

渡河部隊と渡河作業との連繫

渡河掩護

(三) 要すれば渡河攻撃の爲の戦闘動作

(四) 渡河後に於ける特種火點の攻撃に於ける歩、工兵の協同

(五) 濕地、水流通過材料の使用

(六) 渡河直前歩、工兵協同して渡河の諸動作を豫習する場合に於ては、特に渡河の爲の企圖を暴露せざることを必要なり。

(七) 一四、大河に於ては夜間防者の視力、聴力は我岸に及び難きを以て、渡河準備を發覺せらるる虞少し。故に渡河材料は架橋材料中隊の「開進地」に於て授受を終りたる後馬車又は自動貨車に依り河岸近く推進して卸下するを得べし。故に材料卸下地點「架橋材料中隊展開位置」と「河直前に於ける材料」秘匿位置」とは之を接近せしめ、或は前者を省略し直接材料秘匿位置に卸下するを得べし。

但此際敵の夜間の空中搜索、水上より舟艇を以てする偵察、游泳によりて潜入する斥候等に對し嚴に警戒するを要す。狀況に依り馬匹を脱駕し、人力に依り車輛を輓くを可とすること

あり。

一五、材料置場より泛水位置に至る舟の運搬及泛水は、通常歩兵の援助部隊を以て之を行ふものとす。之が爲援助部隊の指揮官は豫め關係工兵指揮官と連絡し、運搬班の編成、服裝、裝具の處置(註、豫習も此部署に依りて行ふを有利とす)、集合時刻及地點、泛水後の處置等に就き協定し、更に各渡場毎に運搬班長との間に於て鐵舟の運搬法、進路、待機位置、泛水法其他連絡等の細部に就き所要の協定を行ひ、工兵は援助部隊と協力して鐵舟の運搬及防音の處置、進路の標示要すれば進路の設備等の所要の準備を實施するものとす。

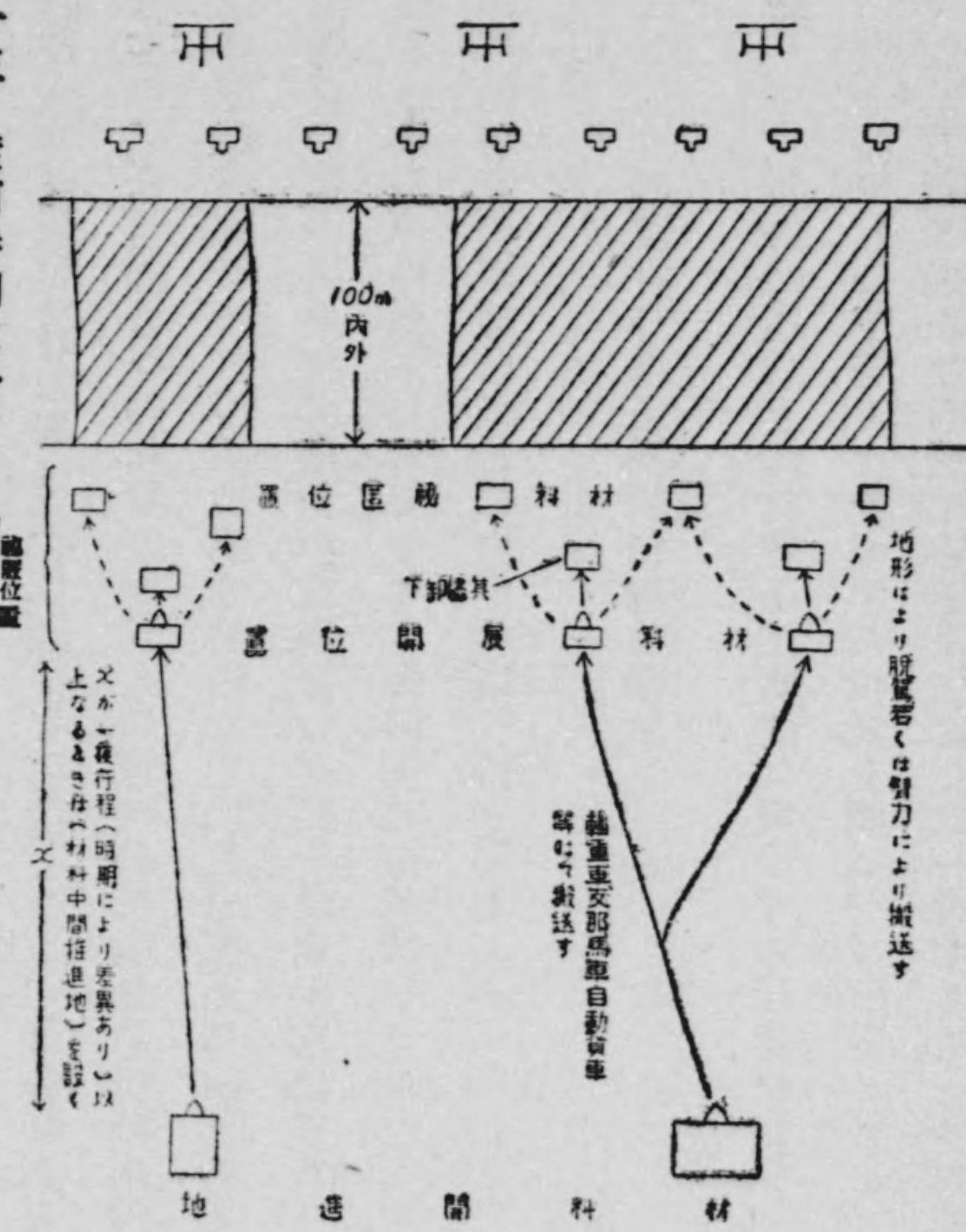
一六、渡河作業の諸準備は爲し得る限り渡河實施の前夜までに之を完了するを可とす。渡河材料推進の要領を白紙的に圖示せば次圖の如し

河渡材料推進要領白紙的圖示

備考

一、材料開進地とは材料を工輜間に授受する位置を謂ひ、材料展開位置とは材料を區分し卸下若くは脱駕する位置を謂ふ。

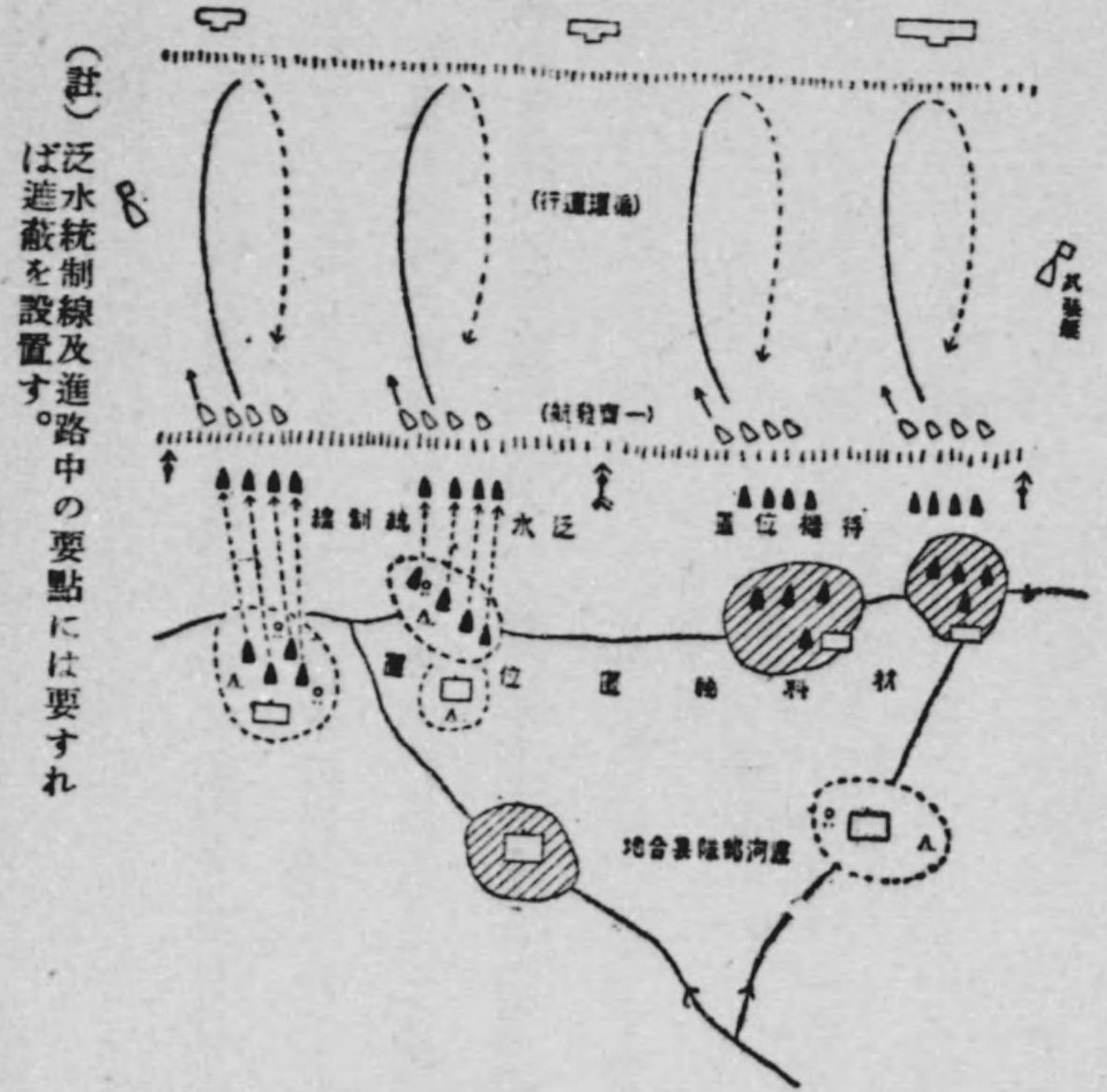
二、材料展開位置と材料秘匿位置とは一致すること少なからず。



第十三 渡河時期に於ける協同

一、渡河の實施は既定の計畫に従ひ萬難を排して之が遂行に勉むべし。局部の事象に捉はれて妄りに計畫を變更し或は實行を遅延するが如きは渡河作業をして遂に混亂に陥らしむるに至るも

敵前渡河要領圖



一般戦術の研究

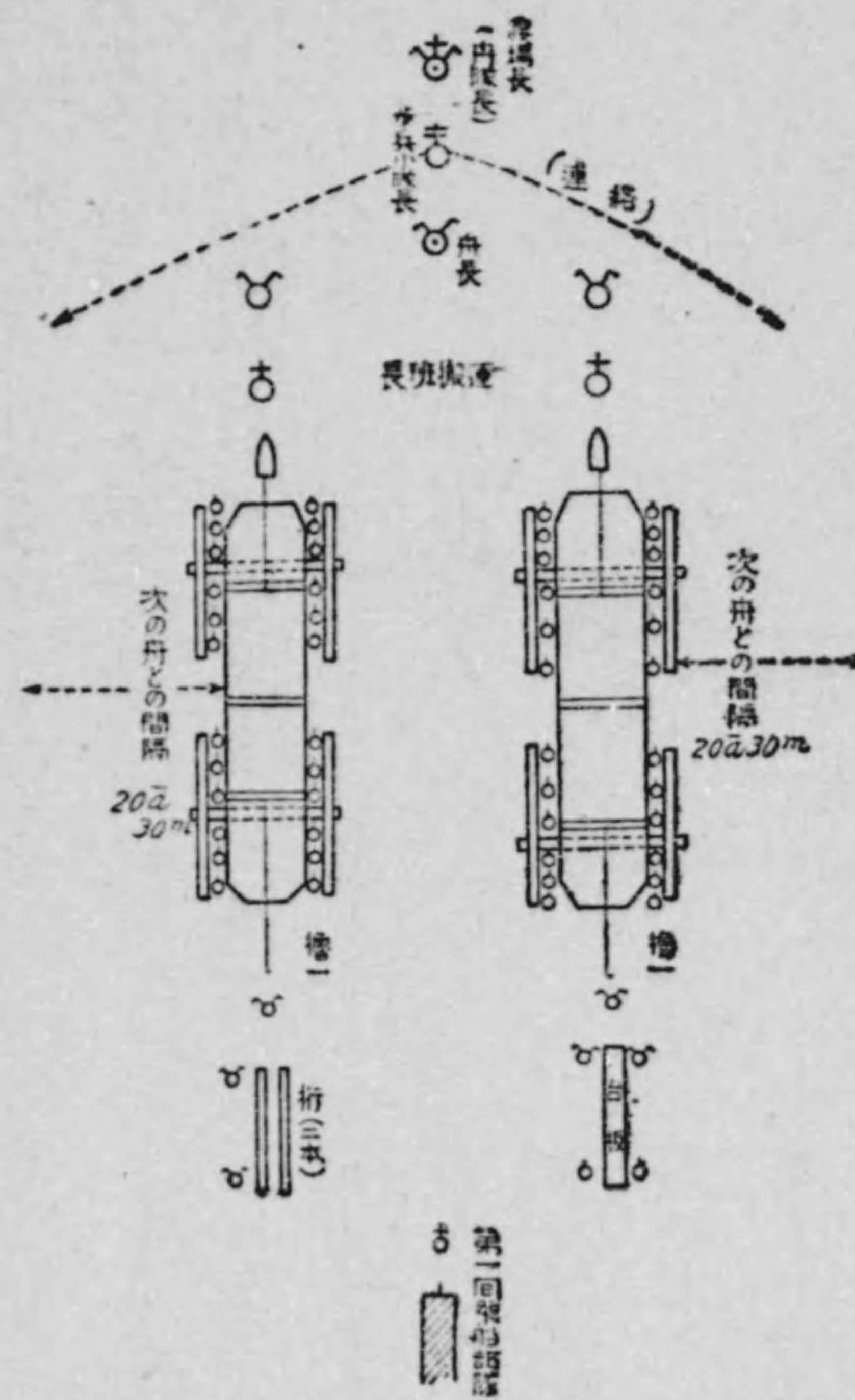
のとす。然れども屢、天候氣象の影響を受け或は狀況の急變に遭遇することあるべきを考慮し、機宜の處置を執行するに遺憾なきを要す。
二、最初の渡河に在りては通常使用し得べ全部の舟を以て成るべく多數の渡河部隊を同時に敵岸

に上陸せしむる如く一齊に發航し、爾後混雜と滯滞とを來さざる如く逐次循環航行に移り渡河を續行するものとす。
然れども大河に在りては渡河の爲配當せられたる舟數通常多數なるを以て、汎水は之を數段に實施せざるべからざること屢、なり。然るときは豫め綿密なる計畫を立て之が推進及汎水の順序と進路とを規定し其後の行動の整齊を期すること肝要なり。
敵前渡河の要領を圖示せば上圖の如し

三、材料置場より泛水統制線に至る機舟(鐵舟)の運搬泛水は、渡河開始の機に遅るることなく機密且整齊に實施するを要す。

機舟(鐵舟)の臂力運搬には、多數の兵員を要し且其勞大にして、特に不齊地にありては行進意の如くならざること多く、而も僅々の蹉躑も時として不測の危害を招き渡河の實施に齟齬を來し、奇襲的渡河の企圖を水泡に歸せしむることあり。故に工兵は其指導を適切に、歩兵は滿身の氣力を揮ひ能く難に耐へ、其任を全うするの氣概なかるべからず。

例一の署部搬運舟(合模)舟鐵



機舟(鐵舟)運搬及泛水に方りては、渡場長は工兵小隊長及援助部隊長と密接なる連絡を保ち、之を誘導し所望の如く行動せしむるものとす。

四、機舟(鐵舟)運搬の部署の一例上圖の如し。

五、運搬班河岸附近に到達せば

泛水統制線に於て待機したる後泛水の合圖を受くるや再び前進し、舟長は泛水位置を示し、運搬班は靜に機舟(鐵舟)を卸し班長の下す泛水の記號に依り協力して舟を扛擧しつつ稍、下流側に向け徐々に推進泛水す。

舟の推進に伴ひ先頭の兵は逐次後退伏臥し、班長は舟出發後班員を集合し豫め協定したるところに従ひ運搬具を携持し、歸還し成るべく速に軍裝を整へたる後乗船場に到る。

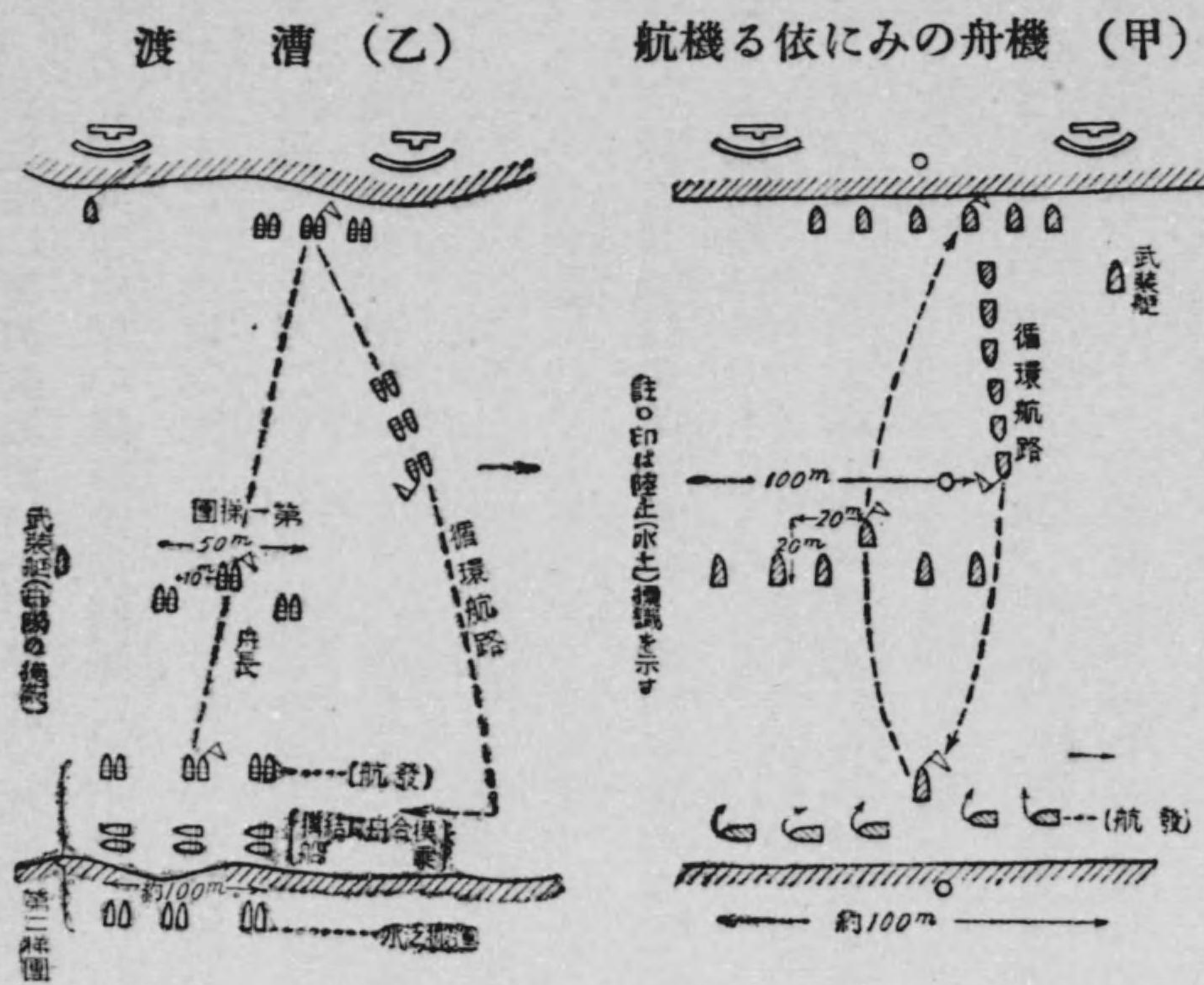
工兵は、泛水に伴ひ機を失せず模合網を保持し部隊乗船後坐礁せざる程度に舟を出し、之を河岸に平行せしめ直ちに航(漕)行を準備す。

第一回乗船部隊は、舟泛水せば舟長の指示により靜肅且整齊に乗船す。

六、最初の渡河の成否は渡河戦闘の運命を左右するものにして、泛水及乗船動作の如何は其成果に關すること頗る大なり。宜しく一致協力軍紀を嚴守し苟も企圖を暴露するが如きことあるべからず。

七、最初の發航は、第一回渡河部隊を乗船せしめたる後命令を待つて發航す。然れども狀況により泛水統制線に於て發進の準備を整へ泛水後直ちに發航するを可とすることあり。

渡河開始は通常所定の時刻に於て爲すべしと雖も、渡河擔任の指揮官は、狀況により渡河部隊



しむるの著意を必要とす。濃霧等の場合に於ては之に反す。

一〇、各渡場に於ける機舟のみに依る機航並に漕渡の要領を圖すれば上圖の如し。

註一、力漕の場合にありても、爲し得れば一部の機舟を利用し、抱舟にす。

依り渡河効果の發揮に勉むるを要す。

二、隣接部隊との間隔は、少くとも一舟隊の正面幅より狭からしめざるを可とす。

三、梯團發航の場合は、其時間間隔を五分時より少からしめざるを可とす。

の指揮官と協定し、機に先だち之を決行するを要することあり。之が爲め渡河開始の時機に於ては渡河作業隊及渡河部隊の各級指揮官は互に緊密なる連絡を保持すること緊要なり。

各舟は發航を命ぜらるるや、一意敵岸に航(漕)行す。此際徒らに左右の連繫に腐心し動作を緩慢ならしむるが如きことあるべからず。

八、機舟を單舟にて前進せしむるには、行動輕快なると且目標小なるとを以て敵火の損害を減少し得るの利あり。又模合舟(簡單に桁又は丸太二本を用ひ兩機舟を模合ふ)とするときは安定良好にして指揮掌握容易なり。故に之が採否は前岸の敵情、渡河正面、明暗特に濃霧の有無、風浪等を考慮して決行す。

力漕による場合にありては、搭載力を増加し渡河効果を發揮する爲汎水後通常二舟を模合ひ、兩舟間に臺板を架して模合舟とし、之に部隊を乗船せしめ(第一回渡河に在りては臺板上には人員を搭載せざるを可とす)、舟隊の長は基準舟に乗船し通常雁行形の隊形を以て發航す。

九、一舟隊の舟數は、戦術上の部署、配當舟數等に依り異なりと雖も、指揮掌握の難易を考慮せば五乃至七舟以内なるを通常とす。

各舟の間隔は月明或は敵の強力なる照明下に於ては指揮掌握を害せざるを度とし努めて大なら

一一、武装艇は渡河實施間河上の警戒、危険物の除去及渡河の掩護に任じ、要すれば水際戦闘に協力し、其他兩岸の連絡並陽動等に任ず。

武装艇を以て渡河部隊を掩護するには、渡河點の外翼に於て之を一線又は數線に配置するの外渡河部隊を同行せしむる爲、別に機關銃、歩兵砲等を搭載せる舟艇を準備するものとす。

渡河點の外翼に配置せらるる武装艇は、陸上に配置せらるる砲兵及探照燈等と協力し、敵舟艇の拒止に便なる地點に位置し、河川を横斷して監視幕を構成し敵の艦船をして其の發見を困難ならしめ渡河點に進出し得しめざるを要す。之が爲障礙物を利用するを可とすることあり。

渡河部隊直接掩護の武装艇は、渡河部隊の舟艇の翼側に位置して掩護に任じ、要すれば渡河部隊の上陸掩護に協力するものとす。

一二、後岸より渡河部隊の渡河並上陸後の戦闘を掩護するには、主として砲兵により、時に歩兵砲等を併用す。渡河掩護の爲中洲を利用し得れば有利なり。

此際渡河部隊、渡河作業隊、砲兵間に緊密なる連絡を保持すること緊要なり。

掩護部隊は状況により射撃又は煙幕に依り或は之を併用して渡河動作を容易ならしむべしと雖も、之が爲過早に我企圖を暴露せざるを要す。

敵の特種火點直前にて渡河する部隊は、適時強行渡河に轉移し得る爲特に砲兵射撃準備に遺憾なきを要す。

渡河間特に敵飛行機の空襲に對し適時掩護し得るの準備を肝要とす。

一三、航行中敵火を受くるも歩、工兵は益、沈著し、一意速に前岸に到着することに勉むべし。此際過早に射撃を開始し企圖を暴露することなきに特に留意するを要す。

時として敵の武装艇等により水上より擾亂せらるることあり。斯くの如き場合にありても豫め準備しある狙撃砲、掩護火器、武装艇等之に當るを以て、各機舟(模合舟)は一意所定の方向に前進するを要す。

一四、舟隊敵岸に接近し敵の發見を免れざるに至れば、各舟は舟隊長の記號により全力を盡して敵岸に轟進し、障礙物破壊手は要すれば水中に飛び込み障礙物に通路を開設し、舟の著岸を容易ならしめ、乗船部隊は迅速果敢に上陸す。上陸終れば空舟は速に離岸し縦隊となり歸航し循環漕行に移り渡河を續行す。

然れども敵火點嚴存し熾盛なる火力を蒙るときは、其の損害を避くる爲各個に歸還するを有利とす。

前岸に到着せる部隊は爾後到着する部隊の爲速に河岸附近に據點を占領し火點を攻撃す。
第一線部隊と共に渡河せる工兵は、水際障礙物をも破壊し特種火點攻撃に協力す。

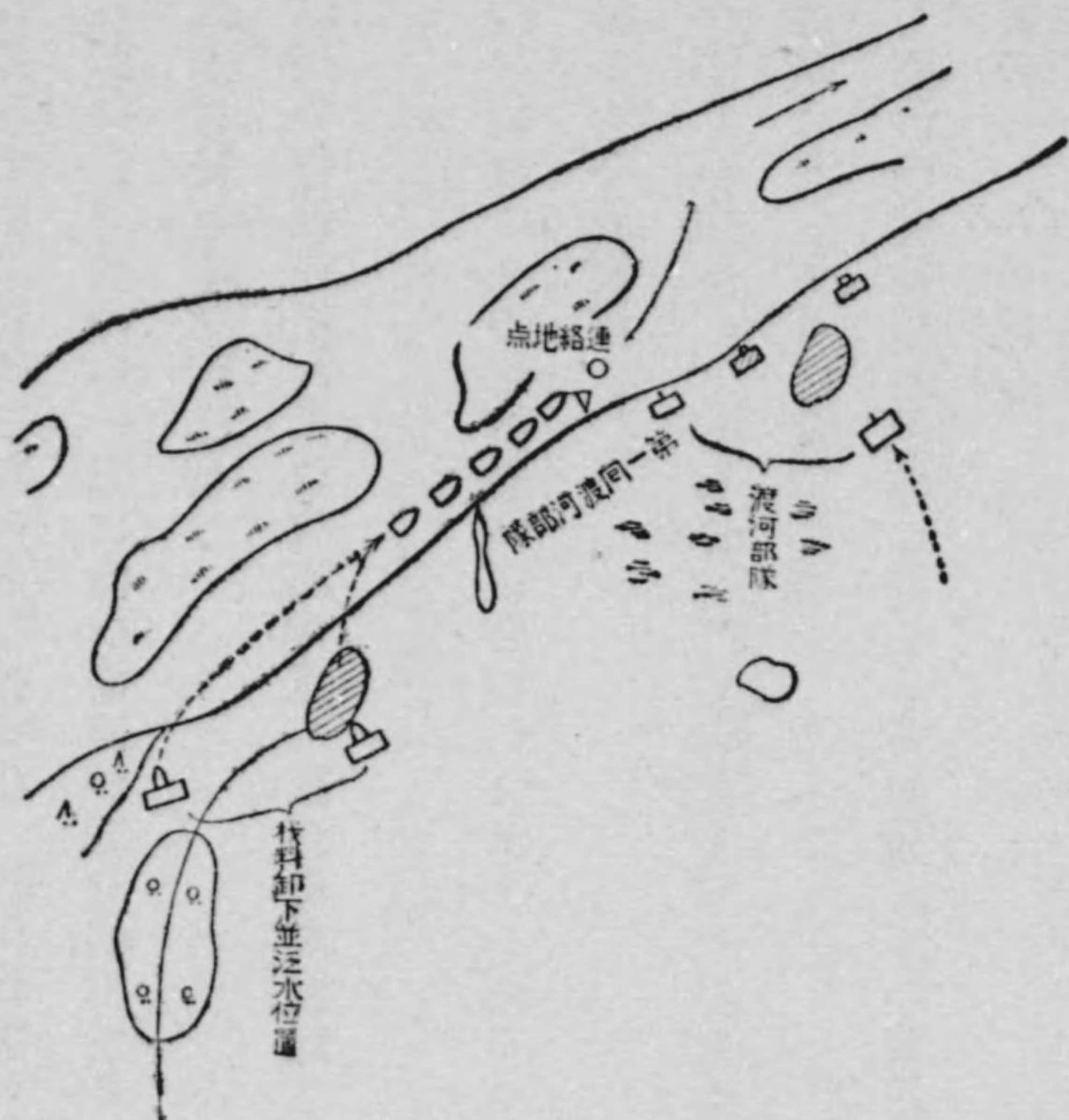
漕行に任ずる工兵指揮官は、對岸の戰況特に敵情に注意し速に所要の事項を關係指揮官に報告（通報）すると共に渡河部隊に通報し且機を失せず馬匹、車輛の爲上船上陸場を設備す。

一五、爾後渡河部隊渡河の爲逐次同地に到着せば、渡河部隊の指揮官は直に渡河する渡場の工兵指揮官に連絡し、先遣しある連絡將校の指導により渡河の進捗に伴ひ逐次之を乗船場に進出せしめ、渡河の實施をして圓滑ならしむるを要す。苟も連絡不十分の爲渡河を中絶せしむるが如きことあるべからず。

一六、正面より渡河を力行せざるべからざる場合と雖も、爲し得る限り一部を意表外の方面より渡河協力せしむるを有利とす。

敵の不意に乗ずる等の目的を以て行ふ水上機動の一例左圖の如し。

一七、爾後各種の手段により渡河効率の増大を圖り、前岸に進出せる部隊をして孤立に陥らしめざるを要す。而して爾後架橋に依るを得ば最も可なりと雖も、之が爲夥多の材料と作業力とを要するを以て、機航及漕渡のみに依り渡河を終始せざるべからざること多し。之が爲第一線歩



兵主力の渡河の進捗に伴ひ、成るべく速に機舟又は模合舟を門橋と爲し、馬匹、車輛並後方部隊の渡河に任せしむると共に、適時渡舟を増加泛水して門橋となし、曳行（抱舟をも用ふ）に依り渡河効率の發揮に努む。此の際發動艇を利用し得れば有利なり。

後方連絡の爲の架橋は軍に於て統一して實施せらるるものとす。

一八、渡河部隊と渡河作業隊との緊密なる協同の精神に則り、渡河の實施を圓滑ならしむべきものにして、渡河作業隊の各指揮官は、當時の狀況に基く渡河部隊の各級指揮官の要求に應じ、克く戰機を逸せざると共に、渡河部隊の各指揮官は、渡河作業の特質を理解し、各、其責任及權限の分界を明らかにし、戰捷の一途に向ひ協同の實を發揮すること緊要なり。

第十四 某地方に於ける渡河作業

某地方に於ける河川の特性に鑑み敵前渡河作業も渡河の準備並實施上内地に於ける河川と其趣を異にする所多し。

- (一) 數軒の河孟内に幅數十米の水流數條に分岐して流下しあるも後岸の友軍砲兵を以て對岸の戰鬪に協力し得る場合の渡河
- (二) 河床十數軒に達し幅概ね二、三百米以下の水流數條に分岐して流下し對岸に於ける戰鬪に砲兵主力の推進を必要とする場合の渡河
- (三) 河幅大にして渡河の爲特種の準備を要するが如き大河の渡河

其の一 (一)の場合

(イ) 要旨

此種河川に於ける敵前渡河は、特に輕量にして且秘匿に便なる器材を豊富に準備し、最前部隊には全員同時に渡河し得る渡河器材と之に要する作業部隊とを充當して各水流を躍進的に渡河せしめ、其他の徒歩部隊も亦機を失せず之に追隨して迅速に渡河し得る手段を講じ、以て全河川の渡河を一舉に完了するを要す。

(ロ) 渡河準備

- (一) 渡河準備に特に顧慮を要するもの左の諸項なりとす。
 - 適切且豊富なる渡河器材の準備
 - 豊富なる渡河作業部隊の充當
 - 周密なる企圖の秘匿
 - 渡河實行の爲緊密なる協定
 - 渡河進捗に伴ふ砲兵進出の爲周到なる準備
- (二) 渡河に使用すべき器材は、河岸の地形上之が秘匿の爲河岸を隔たる相當廣範圍の區域に分散せられあり、渡河當夜之を河岸に搬出するに方り相當大なる困難を伴ふのみならず、渡河

開始後に於ては水流の關係上河川を超越して之を梯次に推進使用するを必要とす。故に輕量にして且秘匿に便なるが如き形體の小なるものたるを要す。之が爲第一線部隊の渡河に使用するべき渡河器材は、輕快なる使用に適する渡河材料を可とす。次で砲兵其他後方部隊の爲架橋を行ふ場合に在りては、別に之に要する材料を準備するを要す。

(三) 一渡河點に配當すべき器材は、一に渡河部隊の兵力、兵種に依り異なるべしと雖、各水流毎に所要數を準備せざるべからず。是れ最前線の部隊には間斷なき前進を要求し、且縱長部隊の渡河をも亦中絶せしむることなからしむるを要すればなり。故に準備すべき器材の數は一に渡河作業を要する水流の數及渡河部隊の縱長區分を顧慮して決定せざるべからず。

(四) 河川偵察は、兩岸平坦地にして展望に適する地物稀なるを以て、地上のみによる視察は殆ど不可能なること多し。故に上空よりする視察及寫眞偵察によるを最も有利なる手段とす。又土民により偵知せんとする場合にありては殆ど信を置き得ざるが如し。

(五) 渡河準備間に於ける企圖の秘匿は、最も留意するを要する所なり。是れ河岸は廣漠なる原野又は耕地にして、村落甚だしく相離隔し、且つ器材及車輛等の秘匿に對する價值少く、又之を他に求めんとするも地形に乏しきを以てなり。

茲に於てか渡河の準備は前後左右に互り廣範圍に分散せらるるを常とするに至るべきを覺悟せざるべからず。

地上の狀況以上の如くなるを以て、偽裝材料は最も貴重にして、少くも各架橋材料の中隊の各車輛には偽裝材料の諸準備を必要とす。

(六) 渡河作業部隊の兵力は、使用すべき渡河器材の數に應じ決定を要するは言を俟たず。而して作業隊は之を第一線部隊の渡河に任ずるもの、第二線部隊の爲の渡河設備に任ずるもの及砲兵推進の爲の交通設備に任ずるもの等に區分使用せらるるを通常とす。

(七) 渡河作業援助部隊の兵力は勉めて之を減少するの著意を必要とす。是れ多量の渡河器材の運搬に多數の援助歩兵を要求するが如きは、到底之を許し得ざること多ければなり。輕易なる渡河器材を整備し他兵種の援助を待つことなく乗船部隊自ら之を携行し得る如くするの要ある所以亦茲に存す。

(八) 河川の特性として兩岸及中洲中に濕地存在すること多く、砲兵進出の爲大なる障礙なり。勿論第一線に隨伴すべき少數の砲車は銳意之が推進に努むべきも、砲兵主力の渡河に方りては、大規模の交通作業を伴ふものなることを覺悟し、渡河準備の當初より之が準備に著手す

る必要あり。

(ハ) 渡河の実施

- (一) 攻撃部署に伴ふ最前線の部隊は、渡河作業隊と協力し自ら輕易なる渡河材料を運搬し、躍進的に各河川を渡河し他の部隊の追隨を待つことなく一意前進して速に敵直前の河川彼岸を占領することに努め、爾後態勢を整へ一般敵前渡河の要領に準じ渡河攻撃するものとす。
- (二) 渡河の実施に於て特に顧慮すべきは、作業部隊及渡河器材の掌握、渡河開始後に於ける前進方向の維持、渡河部隊との密接なる連繋及渡河動作の秘匿等とす。
- (三) 夜間は正確に方向を認識すること極めて困難にして、分散せる部隊及渡河器材を豫期の如く集結するには豫め十分なる準備と注意とを要す。又渡河の開始後に於ても逐次躍進的に實施せざるべからざるを以て、各級指揮官相互の連絡、部下の掌握に就ては、特別の規定を設くる等手段を盡して絶対に遺算なきを要す。
- (四) 河孟内の地形は相當複雑なるを常態とするを以て、第一水流の渡河後更に前進するに方りて方向を誤り豫期せざる失態に陥るの虞尠しとせず。故に経路指示器、磁針等を利用するの外豫め彼岸に基準を設け以て前進方向を指導する等の著意を必要とす。

- (五) 廣漠たる地形に於ては、數次の渡河により分散せられた部落相互及作業部隊との連絡は最も困難にして、且其良否は直ちに渡河の成否に重大なる關係を及ぼすものとす。故に各部隊相互に於ける連絡に關しては周到なる計畫、緊密なる實施を必要とす。
- (六) 秘匿處置は河岸の地形就中中洲内に於ける部隊の行動を秘する爲必要とする場合多し。而して之に對する手段は、簡單なる遮障の設置又は煙幕の使用に依ること多かるべし。
- (七) 河床就中中洲内に於て敵の毒瓦斯使用を豫想し得るときは、豫め防毒竝に之が大規模の消毒準備を完全にし、以て迅速なる部隊の通過に支障なからしむるを要す。

其の二 (二)の場合

(イ) 要旨

此種河川に於て、二段の渡河に依るべきや一舉に全般の渡河を敢行すべきやは、一に狀況に依るべしと雖も、二段の渡河によらざるべからざるときは、先づ敵線に近づき主要なる河川を除く其他の河川を渡河して河床の大部を我が勢力内に收め、次で迅速に爾後の渡河準備を整へ最後の渡河を敢行するものとす。此の場合に在りても勉めて全般の渡河日數を短縮し、且偽行動其他の手段により攻撃渡河軍の企圖を秘匿すること特に緊要なり。

敵情及河川の景況特に有利にして一舉に全般の渡河を敢行せんとする場合に在りては、支流の周到なる利用と渡河部隊相互の協調に違算なきを期せざるべからず。又主力の渡河は第一線部隊の渡河當夜に完了し得ざることあるべきを覺悟せざるべからず。

以下述ぶる所のものは、主として一舉に全般の渡河を敢行する場合の要領並注意事項にして、二段に渡河する場合は從來研究せる渡河法の應用に依り實施し得べきを以て省略す。

(ロ) 渡河準備

(一) 此種渡河に於ける渡河準備は、概ね前述せる所に依るべしと雖、特に豊富なる渡河器材及煙幕材料の整備を必要とす。

(二) 準備すべき渡河器材の種類は、輕快なる漕渡舟、搭載力に富める車載式器材及多數機舟なりとす。輕快なる漕渡用舟は主として第一線部隊之を使用して躍進的に各水流を渡河せんとするものにして、前述せる所の輕快なる器材を適當とす。

車載式器材は、支流を利用して行ふ渡河及第二線部隊並砲兵等の渡河に使用するものとす。機舟は此種河川の渡河に於て特に重要にして、且之が活動に待つ所極めて多し。是れ第二線部隊の迅速なる推進に於て曳船による兵力輸送及迅速なる架橋の實施等に使用せらるること

多ければなり。

(三) 地方渡河器材は、此種河川に於ては比較的多數に蒐集し得る公算多く、用途亦尠からざるを以て、之が利用は決して等閑に附すべきにあらず。

但地方舟中には相當側板の腐朽しあるもの多きを以て、蒐集に方りては之が選擇に注意すると共に豫め所要量を加へて點檢し、且實施に方りては搭載量に制限を加ふる等の注意を必要とす。

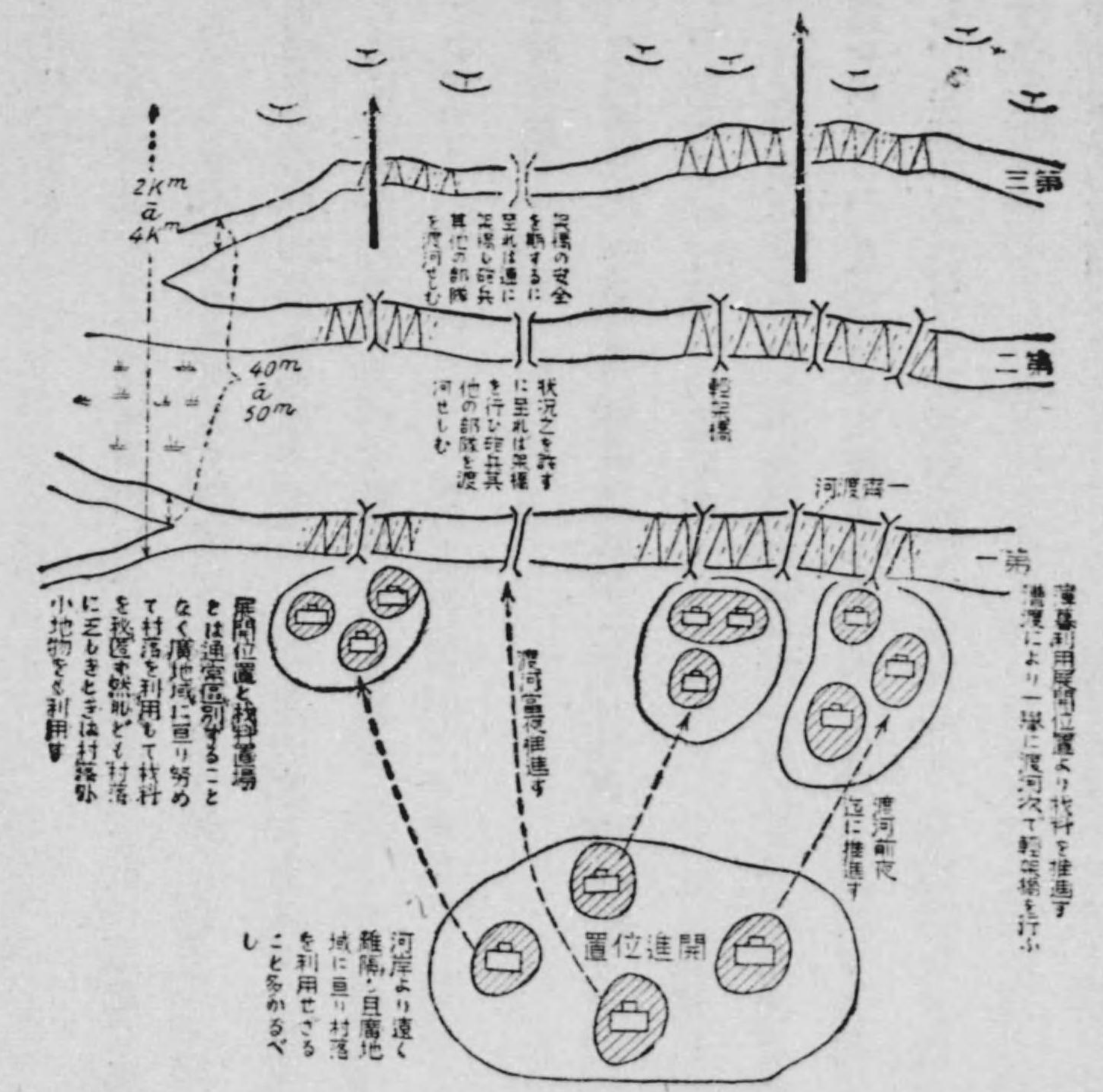
(ハ) 渡河實施

(一) 渡河開始の時機は、努めて早きを可とす。是れ即ち河川を渡河する爲には相當の時間を要し、動もすれば翌天明後地物なき河床内に於て敵に暴露し大なる損害を蒙る虞あればなり。

(二) 渡河は先づ重要な中洲の占領を第一段とし、之に砲兵の主力を推進して對岸に於ける戦鬪を準備し、且勉めて支流より潛行して兵力を注入する如く後岸に近き水流に渡舟を整備し、中洲上に於ける攻撃準備完了せば各所より一舉に渡河を開始して攻撃地區に兵力を集中するを要す。

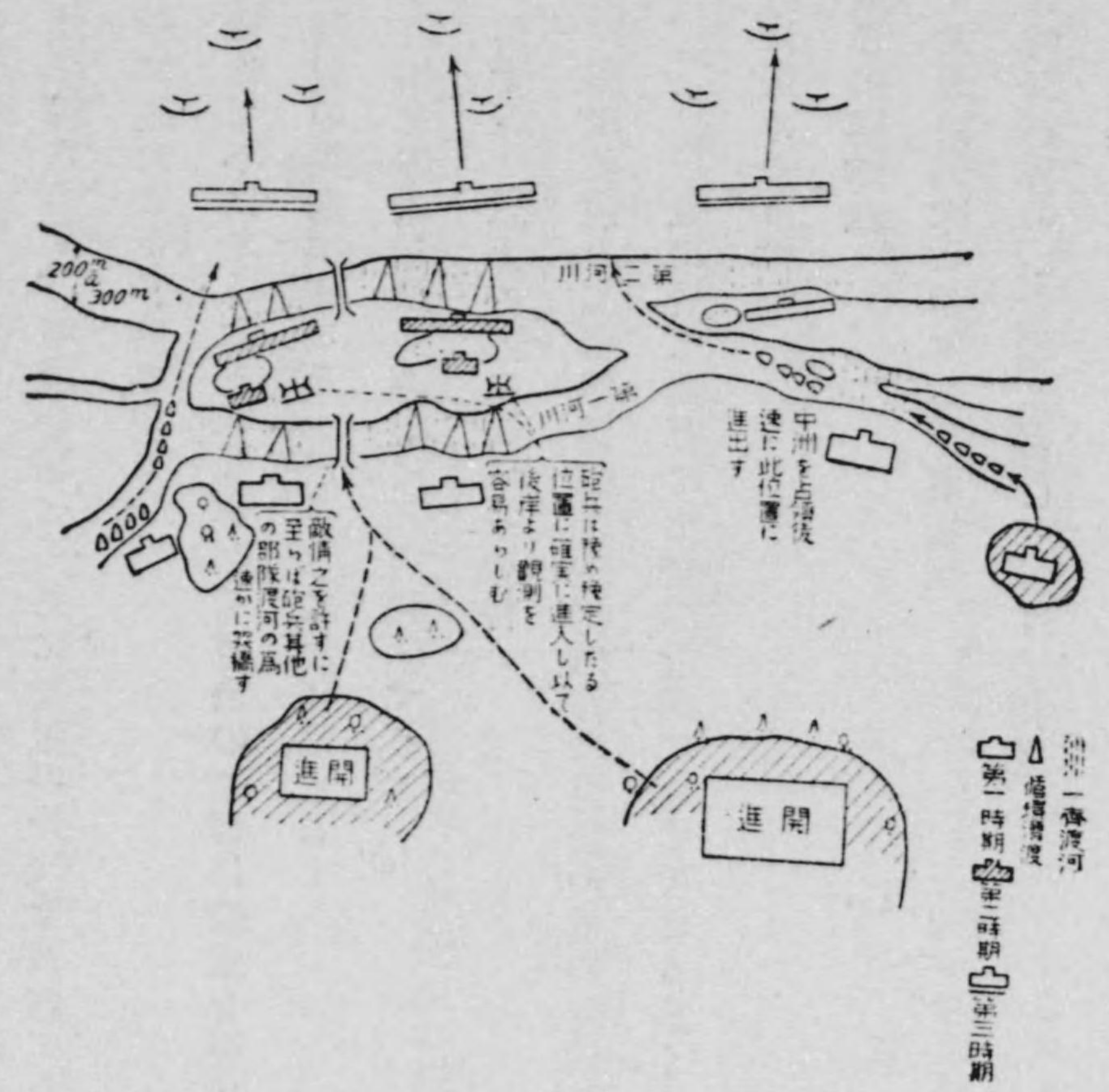
(ニ) 渡河指導の要領

(合場の(一) 一の其) 例圖河渡



- (一) 一部を以て輕渡河に依る漕渡に依り第一河川を渡河せしめ、速に敵線に近き主要なる河川の後岸を占領せしむ。又第二線部隊は、第一河川渡河の爲別漕渡材料を部署し渡河を繼續す。
- (二) 前項部隊豫定線に進出するや、期を失せず第一河川に架橋を行ひ、已むを得ざれば漕渡に依り砲兵及其他の部隊を中洲に集結し攻撃の準備を爲さしむ。
- (三) 支流を利用して渡河する部

(合場の(二) 二の其) 例圖河渡



- (四) 渡河攻撃の態勢整ふや、機を見て全線一齊に渡河を開始し、攻撃地域に向ひ一舉に兵力を集中攻撃す。
- 其の三 (三)の場合
- 一、大河に於ては相當數の地方舟存在するを以て、利用に努むべし。
- 此場合敵前渡河用としては加工の必要あり。
- 二、地方材料を利用し架橋するを

一般戦術の研究

有利とす。

- 三、水流單純ならず、本流を越えて更に數線の分流を渡河するを要す。
- 四、兩岸に廣大なる濕地存在す。
道路極めて不良なること多きを以て道路の修理に注意を要す。
渡河器材の推進困難なるを以て水路を利用すること。
- 五、鐵道橋を確保し諸兵通過に利用設備すること。

第十五 以上研究に關する雜件

- 一、材料秘匿位置と出發準備線との關係特に進發の爲の時間の規正法

註 「マルヌ」戰に於て獨軍は出發準備線に於て可なり長く待ち合せたる爲大なる損害を此時間内に受けたり。

- 二、兩岸の連絡法
- 三、先頭渡河部隊に對する彈藥補充
- 先頭渡河部隊の「對戰車戰團」に關する用意
- 四、瓦斯防護法

- 註 「ピアヴェ」戰に於ては獨軍は河岸に沿ふ伊軍の第一線陣地を瓦斯射撃を爲せる爲、風向の關係により獨軍工兵は防毒面を裝し漕舟せざるべからざるに至る。又若し「マルヌ」戰に於て佛軍が其撤去せる第一線陣地に瓦斯射撃をなし風向獨軍に向ふ如くなりしとせんか、工兵は防毒面を裝し漕舟せざるべからざりしなるべし。
- 五、歩、砲、工、航空兵相互の協同
 - 六、將來の渡河戰の戰術と技術との連繫
 - 七、追撃に當り敵に接踵追尾し占領し易き時機に於て渡河點を奪取する件
 - 八、渡河開始時刻の問題
 - 九、大河渡河作戦に於ける架橋材料制式の問題殊に發動艇の問題

第八問題原案

判 決

師團ハ二十一日拂曉主力ヲ以テ久留米市東側地區ヨリ、一部ヲ以テ善導寺附近ヨリ、尙一部ノ陽渡河部隊ヲ以テ柴刈村附近ノ地區ヨリ筑後川ヲ渡河シ敵陣地ヲ突破シ一舉ニ高良臺南端ニ進出ス

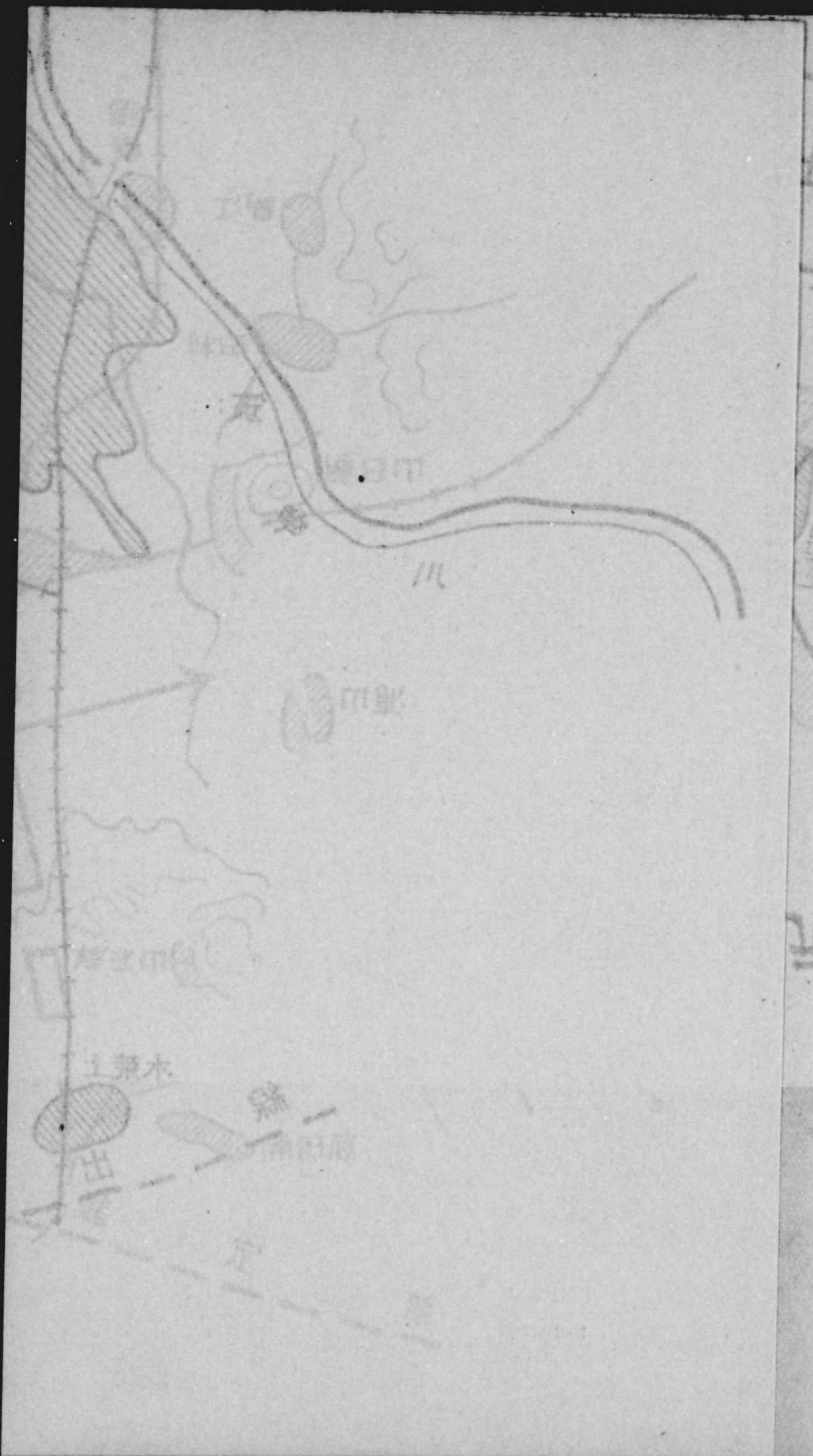
ルヲ要ス

理由ノ概要

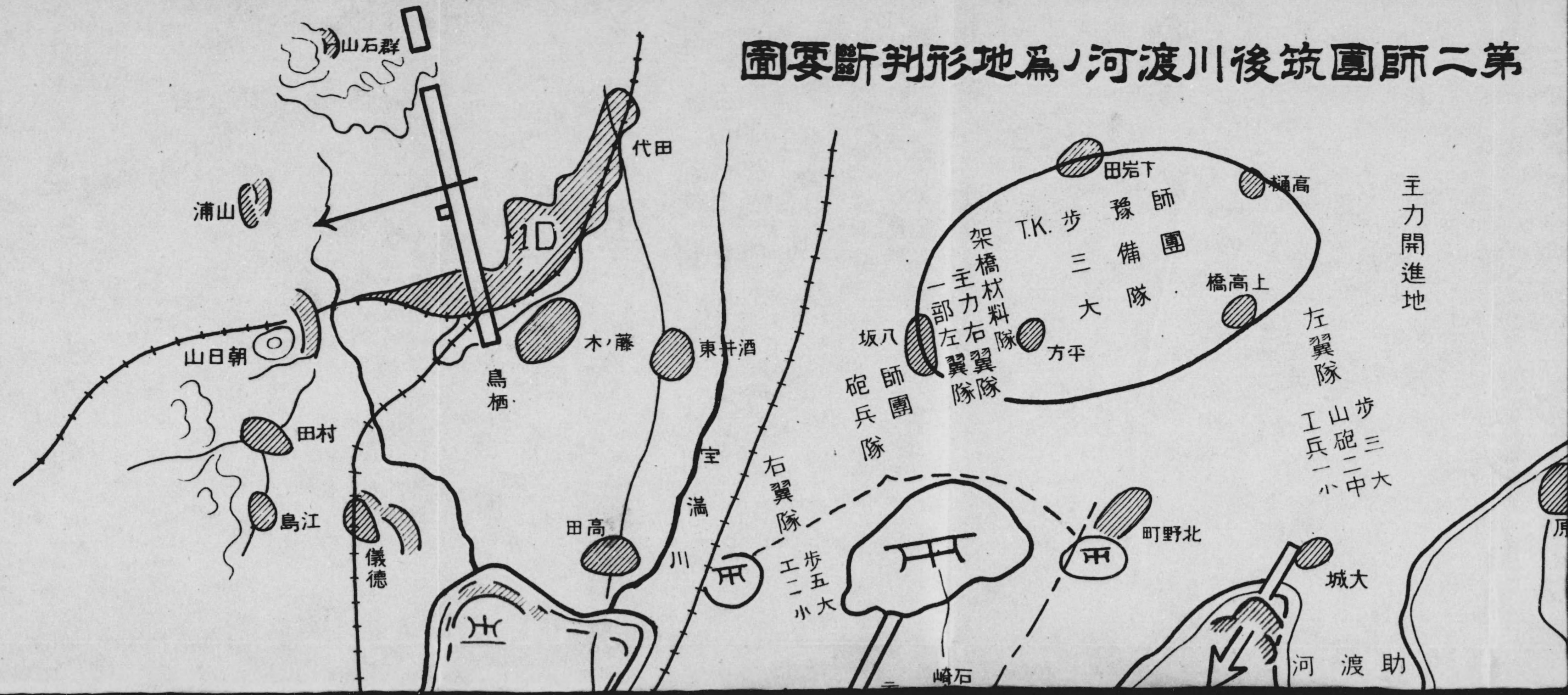
第一師團ト連繫シ速ニ肥筑平野ノ要點ヲ占領スル爲ニハ久留米東側地區ニ楔狀攻撃ヲ行ヒ筑後川左岸地區ニ進出スルヲ緊要トス此際筑後川上流地區ヨリ渡河シ同河左岸山地ニ據レル敵ヲ逐次ニ攻略シ久留米附近ニ前進スルガ如キハ徒ラニ時日ヲ遷延シ却ツテ困難ヲ伴フノ不利アリ

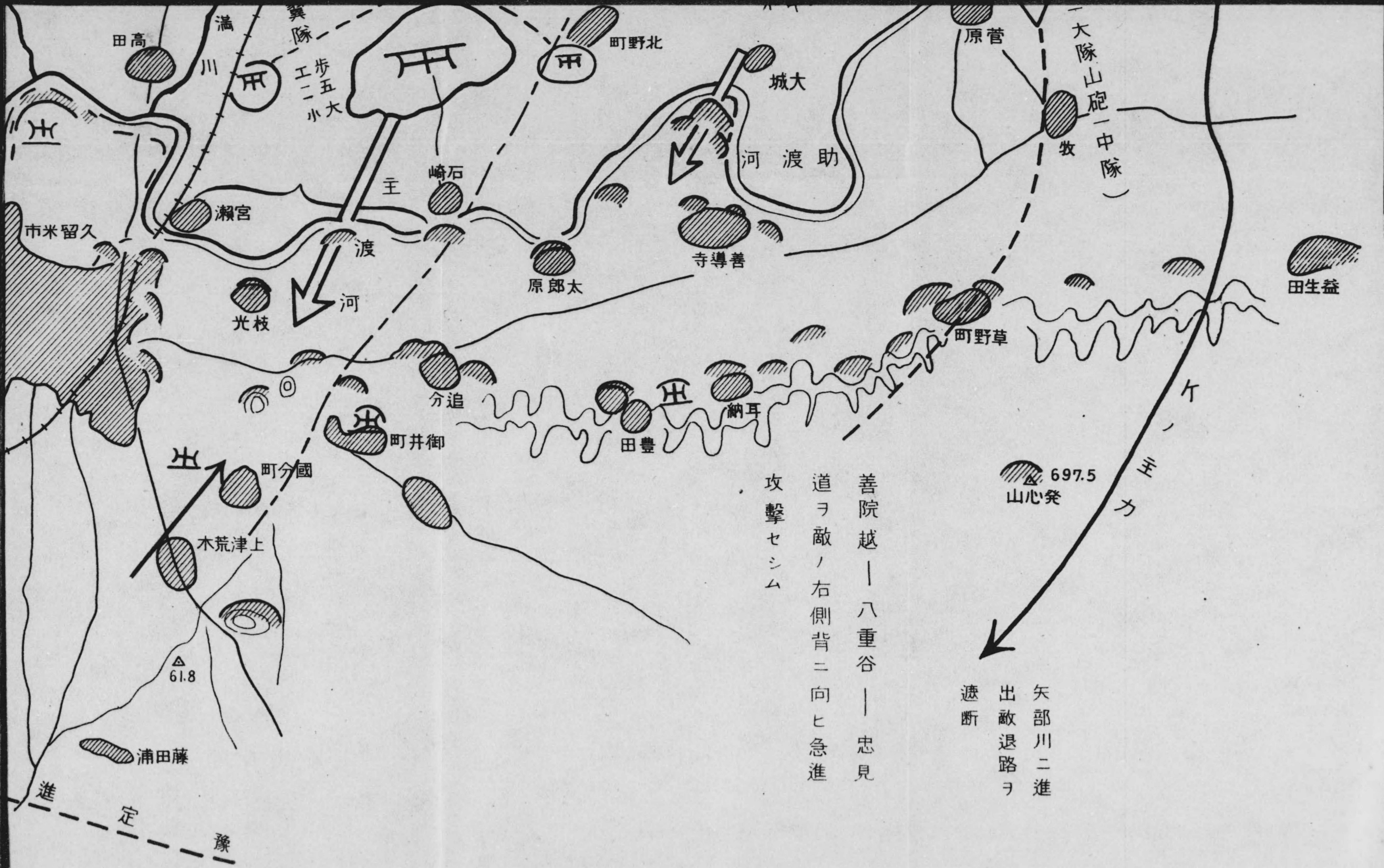
渡河計畫ノ概要

- 一、二十日渡河準備ノ諸偵察ヲ行フト共ニ左翼隊渡河點方面ニ兵力ヲ移動シ敵ヲ欺騙ス
- 二、二十日日没後各渡河點ニ向ヒ渡河材料ヲ移動ス特ニ企圖ノ秘匿ニ努ム（就中住民ノ監視ヲ嚴ニス）
- 三、助渡河及陽渡河方面ヨリ先ヅ渡河ヲ開始シ敵ヲ該方面ニ牽制シ其機ニ乗ジ主渡河ヲ實施ス
- 四、主力砲兵ハ筑後川右岸古賀茶屋附近ニ、一部ヲ大城及北野町附近ニ展開ス
- 五、渡河ハ主トシテ機航又ハ漕渡ニ依リ爾後狀況之ヲ許スニ至リ架橋ス其地點ハ主トシテ神代附近トス
- 六、渡河スルヤ直チニ水繩山脈ノ諸山徑ヲ經テ騎兵隊竝ニ一部隊ヲ派遣シ右側背ニ脅威ヲ與フル



第二師團築後川渡河爲地形判斷要圖





善院越—八重谷—忠見
 道ヲ敵ノ右側背ニ向ヒ急進
 攻撃セシム

矢部川ニ進
 出敵退路ヲ
 遮断

697.5
 山心発

61.8

進定豫

大隊山砲一中隊

町野北

大城

助渡河

善導寺

太郎原

石崎

主

渡河

瀨宮

枝光

久留米市

國分町

上津荒木

藤田浦

益生田

草野町

耳納

豊田

追分

御井町

高田

満川

大五歩工
 隊

山

山

菅原

牧

山

山

山

進

定

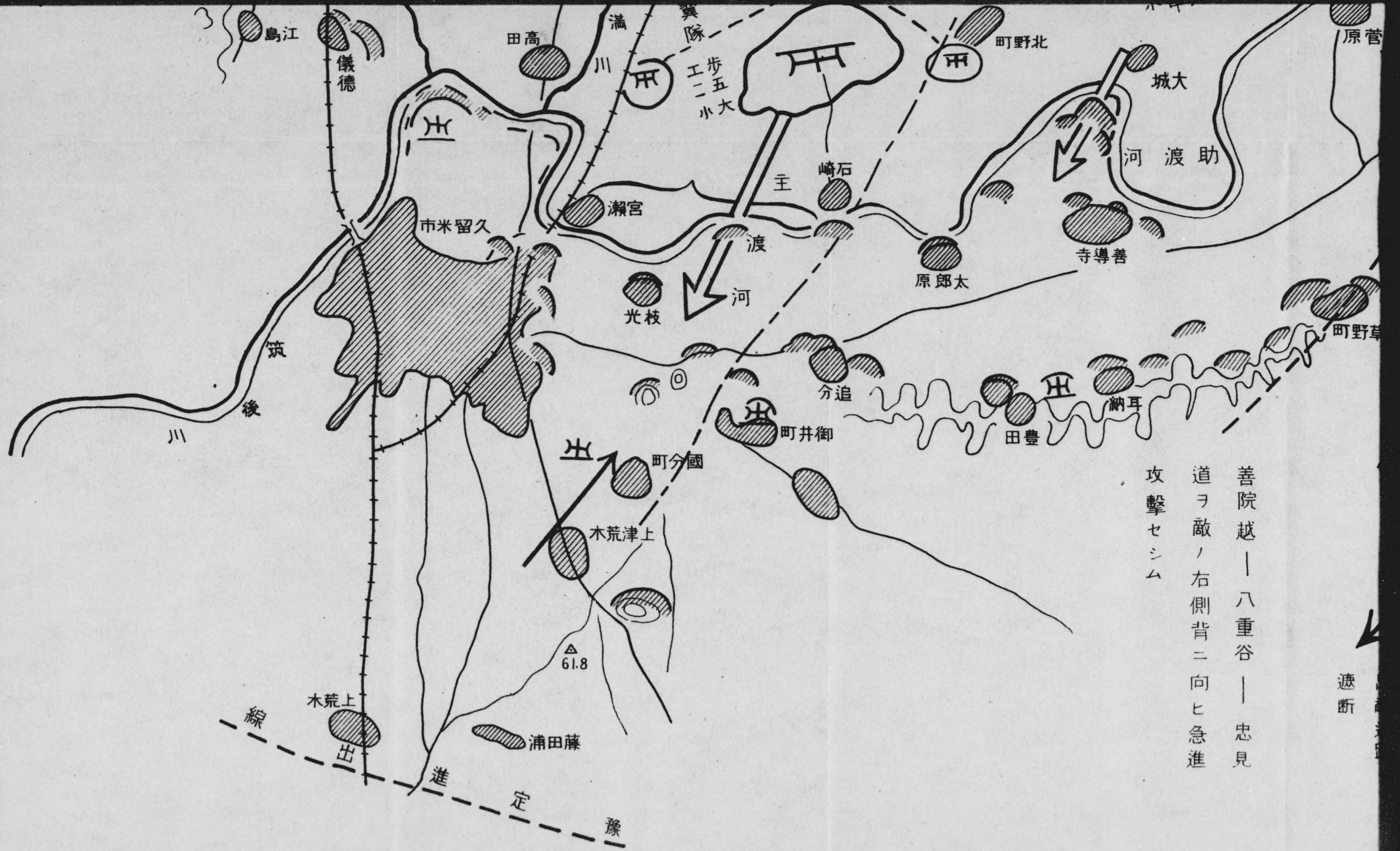
豫

力

力

力

力



善院越——八重谷——忠見
 道ヲ敵ノ右側背ニ向ヒ急進
 攻撃セシム

遮断



ト共ニ熊本方面トノ交通ヲ遮断セシム

河川に於ける防禦に就て

作戰方向に横断し十分なる障碍を呈する河川は、一時軍の行動を中止す。一方は之に渡河設備を施し河岸に達することを努め一方は之を利用して時間の餘裕を得んとするか又は攻者の十分なる兵力を展開せざる以前に乗ずる河川戦闘起る。

一、攻者の渡河は有效なる敵火の下に実施するの不利あるのみならず、其渡河點は隨所に求むること能はず。而も攻者は隘路を越えて展開するの不利あり。然れども防者も亦敵の渡河點を知ること不可能なるのみならず出撃時機の發見困難なり。

二、攻者は渡河後に於ても其後方連絡線は全く限定せられたる渡河點にあるを以て、動もすれば之を遮断せらるるの危険あり。此點は山地戦に於ても相似たる所あり。然れども河川は其警戒山地に比すれば容易なり。

三、河川は防禦線に限界なきことに於て山地と相似たり。即ち防者の守備する正面は堅固なるも其兩翼は薄弱なり。故に攻者は防者の守備薄弱なる點を求むるか又は迂回によりて渡河せんとするに至る。然るに決戦を企圖する防者は、敵のこの迂回に備ふるが爲其守備線を極度に延長

すること能はざるを以て、主力を一地に集め敵の渡河に乗ずることを努む。

四、河川は彼我を分離し攻防兩者共に敵情搜索を困難ならしむ。即ち自己の配備及企圖を秘することを得るも、敵の企圖及展開等を知ること困難なり。換言すれば攻者は先制の利を占め時機と地域とを自由に獲得するを以て防者を欺騙することを得るの利あり。防者は秘匿して敵の半渡に乗ずることを得るも敵情を知ること比較的困難なるを以て、攻勢移轉の失敗は全く之に因す。

河川の戦闘は、山地に於けるが如く、多くの場合持久戦の目的に合す。若し防者にして其兵力配備の重點を河岸に置けば攻者の渡河は勞力と時間とを要す。茲に於てか攻者は迂回を爲すに至る。防者の配備は一點突破せらるれば全線忽ち突破せらるるに至る。

五、河川戦闘の特性

防者は河川を利用して優勢なる敵を撃破せんとするか(決戦防禦)又は單に敵の渡河を困難ならしめ時間の餘裕を得る(持久戦)かにより其戦法を異にし、其配備も後岸を占領するものと兩岸に互りて占領するものとあり。

後岸の配備には直接配備と後退配備との二つあり。

決戦を企圖する河川防禦の要領は、古今東西の原則として敵の半渡に乗ずるにあり。

直接の配備は敵の渡河を妨害して時間の餘裕を得んとする持久戦に適するものにして、決戦の爲めに採る配備としては地形上已むを得ざる場合なり。例へば敵の渡河點が地形上狭き地域に限られ又は後退配備を採らんとするも其餘地なき等極めて限界されたる場合に過ぎず。

直接配備に於ても河幅大にして防者の使用すべき兵力大なれば著大の効果を現はすものなり。

六、クラウゼヴィッツは、大河に於ける戦略的防禦に關して距離、時間及兵力の三者に就て次の如く述べたり。

イ、各防禦團隊の相互間隔は敵の渡河の時間に準じて限定せらる

ロ、團隊の數は河川の全長を團隊相互の間隔にて除したるものなり

ハ、團隊數にて全軍の總兵力を除すれば各團隊の兵力を得べきなり

以上の各團隊の綜合兵力を適時機動運用して攻者の渡河すべき兵力に比し優勢を期することにより其企圖を挫折せしむるにあり(優勢の基準を二倍としあり)。例へば攻者が二十四時間に二萬人を渡河せしめ得とせば防者は十二時間に隨所に二萬人を集中せしめ得れば勝算確實なりと云ふにあり。

而して十二時間に行軍し得る距離を x 里とすれば $2x$ 里毎に二萬人を配置せば可なりと云ふにあり。

以上は大河に於ける戦略的防禦の學理なり。之によれば敵が如何に優勢なるも渡河材料に制限を受くること大なるを以て、渡河は自然に失敗に歸すとなしあり。

然れども實際に於ては、防者は攻者の渡河材料推算に誤あり又守備兵力の機動運用適當ならずして、失敗に歸すること多し。

河川に於ける防禦正面の決定は、

渡河時間の長短

使用し得べき兵力

によるべし。少數の兵力を以て河の全部に直接配備するときは兵力の分散を來し所望の時機所望の方面に所望の兵力を使用するを得ず。此の弱點は山地に於けるよりも更に甚だし。蓋し山地に於ては一點突破せらるるも尙他の陣地を保持し抵抗を持續し得べし、然るに河川に於ては防禦の運命は攻者の某部分渡河成功によりて之を決定せらるるものあればなり。即ち河川と山地との異なる點は河川の抵抗力は恰も強く健淬したる鋼の如く如何なる打撃にも耐ふるも一屈

撓に依り折損するに至るなり。

防禦の危険は攻者の渡河を偵知するの遲きに從ひ益、大なり。殊に其兵力大なるに從ひ一層甚だし。

直接配備の場合に於ては攻者一度渡河せば既に河川の戦闘は終局に至るものなり。

七、奈翁曰く、「河川の後岸に沿ひて直接に防禦するは危険之より大なるはなし、蓋し軍を廣正面に展開しあるに從ひ動作の自由を缺くこと甚だしければなり。」と。

八、河川防禦の目的を達する爲には、

イ、河川の通路を破壊

現存せる渡河材料は自己の使用の有無に從ひ獲得又は破壊す

ロ、對岸の敵情偵察

河川防禦に於て敵の企圖を知ること最も緊要なり之が爲には上空竝に地上の搜索機關を以て搜索に努めざるべからず

敵近接せば漸次河岸に後退の已むを得ざるに至るべし從つて敵の渡河を準備する最も緊要なる時機に搜索を中絶するの不利を來すに至る

之が搜索機關としては

航空機に依り敵の動作を精密に偵知す
各種斥候並に間諜を派遣使用して搜索す
自己の河岸に展望に適する施設を爲す
夜間と雖も之が搜索を連續實施すること
河岸の監視警戒を嚴重に實施すること

九、決戦防禦を企圖するときは

イ、警戒部隊を少くし攻勢兵力を大にす。蓋し此場合には絶対に渡河を妨害するにあらずし總豫備隊の攻勢動作により勝敗を決すべきにして、警戒部隊は後退して攻勢部隊に合すべきものなり。但し敵の企圖を妨害して總豫備隊に時間の餘裕を與へ敵の企圖が果して本渡河なるか陽渡河なるかを偵知するを要す。之が爲には單なる監視部隊にては不十分なり。警戒部隊には歩騎兵及工兵要すれば砲兵を配屬し且通信設備を十分ならしむべし。尙ほ兩側の監視には多くの騎兵を充當するを可とす。航空機を使用すること特に緊要なり。警戒部隊の配置は縦長區分を爲し前哨の要領に準じ其警戒線を河岸に設け殘餘を後方に控置

す。即ち道路、河流其他一般の關係により敵の渡河點を判斷して重要なる地點に歩兵部隊を近く配置す。

晝間は展望を多く利用し得るも、夜間は特に警戒を嚴重にし所要の兵力を直接配備し相互の通信連絡を密にし敵をして我警戒外に於て渡河せしめざる如くす。此場合探照燈を使用し得れば最も妙なり。

警戒部隊は、敵の渡河を妨害し已むを得ざるも構築したる陣地に據り敵を拒止し、以て主力の進出を待つべきものとす。

ロ、總豫備隊は戰略戰術上敵の本渡河たるべき地點の後方に位置す。特に道路の關係を顧慮し何れの方向にも進出し得べきを顧慮するを要す。

ハ、高級指揮官として最も緊要なるは、敵主力の河川渡河の半渡の機に乗じ決然攻勢に轉ずるにあり。故に成るべく強大なる兵力を控置し、且其位置は河岸より適度に隔離しあるを可とす。即ち河幅、河長及敵の渡河材料をよく打算すべきものなり。而して全防禦區域の長大なるに従ひ總豫備隊の進出する方向を顧慮し置くこと肝要なり。河幅小なるに従ひ防者は速に渡河點に到着すること緊要なるが故に、警戒地域狭小なるを可とす。主力を數團に區分して

各一定の區域を指定することあり。又一地に集團する場合には兵力強大なときは必ずしも狭小なる地區に集團する必要なし。即ち兵力と行動の利便とを顧慮し適宜の地點に位置すべし。

敵の本渡河又は陽渡河は容易に判斷すること不可能なり。故に攻勢移轉の時機は高級指揮官の慧敏なる判斷と果敢なる決心とによらざるべからず。動もすれば敵の陽動に欺騙せられ時機を逸すること多し。故に大局を達觀し適切なる狀況判斷を下し機を捉へて躊躇することなく部隊を運用するにあり。

ニ、河川の戦闘と夜間の戦闘とは殆んど附隨的のものなり。敵若し夜間に渡河するときは縦ひ夜間と雖も決然攻勢に轉ずること緊要なり。之が爲には地理に通曉し夜戦の準備を整へあるを要す。

攻勢防禦にありては敵の本渡河を知りたる後主力を以て攻勢に轉ずる爲、警戒部隊をして一時敵を拒止し主力の進出を掩護せしむべし。此の動作は恰も前衛が本隊の隘路進出を掩護するときに同じ。

ホ、河岸適當の位置に攻勢の據點を確保し置くを要す。之に依つて主力を以て某方面に攻勢に

轉じ他方面よりする敵の陽動に對し抵抗陣地と爲すことを得べし。
この據點としては、

河岸に接近して敵の動作を警戒するに便なること

主力をして時機を失せず行動せしむる爲には後岸に接近し尙ほ主力より適度に離隔しあること

交通連絡容易にして時機を失せず高級指揮官と連絡し得ること（通信連絡には各種の手段を講ずべし）

攻勢部隊の進出を容易ならしむる爲には交通連絡の設備を講ずること
必要なり

十、河川を利用する持久防禦にありても、一般の要領は大差なし。唯警戒部隊の兵力は之を大にし各地区毎に獨立して當面の敵に對し其渡河を絶對に防止せざるべからず。

此場合に於ては、警戒部隊は地區守備隊なり。而して後岸の要地に工事を施して極力敵の渡河を防止せざるべからず。此場合に於ける總豫備隊は各地区守備隊を増援するか又は退却の爲めの收容に必要なものにして、決戦の爲に使用せらるるものにあらず。

十一、以上述べたる方法によりて、十分なる兵力を以て河川を防禦せば理論上成功するが如きも戦史は河川防禦の失敗に終ることを例證す。既に本研究に於て幾多の戦例を挙げたるも更に若干の例證を追加すれば、

一七九六年九月奈翁一世の伊太利ポー河に於ける渡河(埃軍の失敗)

一八〇九年奈翁一世のウイン附近に於けるドナウ河の渡河戦闘

一八七七年露土戦争に於けるジムニッサ附近に於ける露軍の渡河

日露戦争に於ける鴨綠江日本軍の渡河
等是なり。

十二、河川防禦の失敗の原因

防者は對岸の敵情を搜索するを得ず、且夜間に於てする敵の企圖、兵力を知ることを得ず。

防者は各方面より來る而も矛盾せる報告によりの確なる判断を下すを得ず。

防者は敵の本渡河と陽渡河とを區別認識すること困難なり。

防者は敵の企圖に制せられ其處置過早なるか又は過遲なること多し。

防者の神經は過度に刺戟せられ爲めに適當の時機に投合して決戦すること困難となる。果して

然らば河川決戦防禦は全然絶望なるかの疑ひを生ずるに至るも、是一つに將帥の能力によるものにして、奈翁一世の言を引用すれば、

河川は唯若干時間之を拒止する障礙物に適す。

對岸に於ける軍隊を橋頭堡内に準備し敵の渡河を開始するの瞬時に於て攻勢を採り、以て敵の渡河を妨害することを得。

即ち奈翁一世の謂ふ最も有利なる方法は其軍隊を河の對岸に配備するにあるが如し。

一八一三年追撃したる露軍に對しオーセル河及エルベ河防禦の場合に於て攻勢的河川防禦を爲すの遙かに有利なることを屢、示せり。この方法は、敵の交通路の側方に側面陣地を占め敵之に關せず通過せば其側面を衝き敵渡河せば其半途に乘じ攻勢に轉ずるにあり。

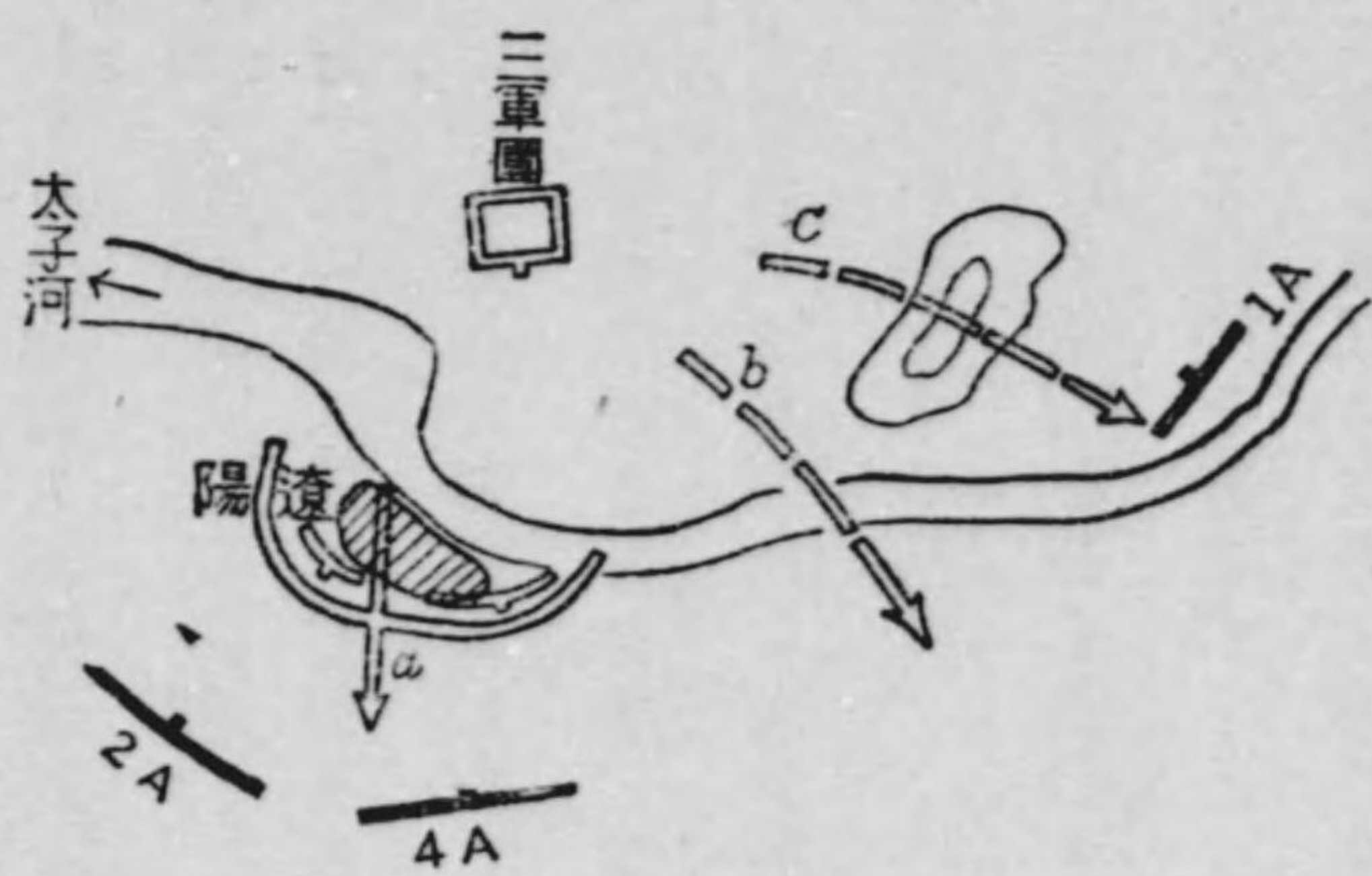
この方法の有利とする所は、

前岸に於ける敵情を長く偵知することを得

敵に大なる迂回を許さず

情況に應じ適宜に攻勢に轉じ得

一八七〇年のメツツ會戦及日露戦役に於ける遼陽會戦に其例證を認む。



露軍としては a b c の何れをも採り得る情況なり。

孰れの場合に於ても成功の見込みありしを、其行動の緩慢なりしと指揮官相互の不和なりし爲め、有利なる形勢にありながら日本軍をして比較的 safety に動作せしむるに至れり。

露軍の遼陽に於ける陣地に關し更に附加し參考とすべし。

橋頭陣地

河川の積極的防禦即ち河川を越えて行ふ前進

若くは退却を安全ならしめ、之により河川兩岸に於ける軍の行動を容易ならしめんが爲めには、敵方に於て橋梁の前方に設堡する必要あり。之を橋頭陣地と謂ふ。

其用務を述べれば、

イ、河川の積極的防禦に於て自軍の進出の爲に使用すべき橋梁の前方に設く。即ち自軍の集結する前に敵をして其渡河點を占領せしめざるにあり。此陣地は同時に自軍部隊の失敗せし場合等に於ける退却を安全ならしむるものなり。日露戦争に於ける露軍遼陽の陣地もこの橋頭堡陣地なり。

ロ、敵が若し自軍の渡河以前に於て優勢なる兵力を集結せば、某地點に於て強行渡河し、後直ちに架橋し之を安全ならしむる爲に橋頭堡陣地を設置す。

爾後に於ける自軍の行動を保障し且作戰の失敗せしとき退却を掩護せんが爲橋頭陣地を利用す。

ハ、野戦軍の遠く後方にある橋梁の前方に設け軍を通過せしめ其橋梁を保全し軍が萬一失敗して退却するとき敵の進撃の下に退却渡河を容易ならしめんが爲めなり。例へば日露戦争に於ける遼陽及九連城の日本橋頭堡陣地の如し。

ニ、橋頭陣地は、一般防禦陣地の構築の原則の外次の條件に依らざるべからず。

a、敵の砲兵火に對し橋梁を掩護すること。之が爲には其陣地は橋頭より少くも二乃至三軒前方に位置せざるべからず。蓋し敵砲兵を我陣地前に位置するものとせば敵の榴霰彈射撃

に對し橋梁を通過する軍隊をして被害を免れしむる爲には此距離を必要とすべし。敵の榴彈はこの距離に於て尙到達することあるべしと雖も、かくの如き遠距離に於ける榴彈の命中率は小なるが故に、深く顧慮するに足らず。以上の如き距離に於ける陣地は大兵團の爲に設くるものにして小橋頭堡は敵眼に對して掩蔽するを以て満足せざるべからず。即ち河川の凹部に架橋し戰術的に之を掩蔽せざるべからず。

b、橋頭陣地の内部の地積は十分に之を存し渡河軍隊の行動進退を自由ならしむるを要す。

故に内部地積は渡河軍隊の大小と橋頭陣地守備隊の大小とに關すべし。大兵團に於ける陣地と橋頭との距離は少くも二軒を要し時としては四乃至五軒に至ることあり。

c、橋頭陣地の側面は敵の迂回に對して安全ならしめんが爲には、河岸に翼を依托し尙堅固なる支撐點を設け人工障礙物を以て之を圍繞す。

d、以上の三件に適合する橋頭陣地は通常突球形に配置し、砲兵は支撐點の中間後方に配置す。

尙陣地の外側及内部は敵の近接を防ぎ尙自軍の出勤を掩護し、本陣地守備兵の退却を掩護する爲には後岸に砲兵を配置す。尙ほ陣地の上流若くは下流より渡河する敵に對し後岸に

於て側方の支撐點を設くべし。

e、戰鬪隊形を以て前進若くは退却に支障なからしむる如く間隔を陣地内に設く。

f、橋梁を直接に掩護し本陣地守備兵の退却を掩護し且つ之に橋梁破壊の餘裕を與ふる爲めに橋梁に接して複廓陣地を設く。之は障礙物を以て圍繞せる閉塞堡及び附屬散兵壕を以て後方陣地より支援せらる。

この複廓は軍隊遠く前方にあるとき而も橋梁を準備せざるとき敵の別働隊、挺進隊等に對し準備するの要あり。

g、防空設備を十分に施し爆撃に對し遮蔽、偽装を行ふこと緊要なり。

h、川流内よりする敵の破壊に對し橋梁を掩護する爲に川内に障礙物を設く。即ち上流よりの流下物に對して水柵を設け敵の船を以てする破壊に對しては障礙物殊に水雷を布設す。

十三、露軍遼陽の橋頭陣地に就て

遼陽は、開戦當初露軍の爲めに軍隊及軍需品の集中(集積)地にして殊に旅順及朝鮮に至る輻輳地にして、戰略上重要な地たり。故にクロバトキン將軍は此の地に豫め築堡の必要を認めて四月の初めに著手せり。其目的は、

イ、遼陽に向つて進む優勢なる日本軍に對して兵力の均衡を得ること
ロ、太子河兩岸に於ける機動を容易ならしめ萬一に際し北方に向ひ退却を安全にすること
其編成概要次の如し。

陣地は、遼陽の市街を含み半徑約四軒、延長約十五軒に互る半圓形にして、其兩翼端を太子河に托し鐵道橋及六箇の軍橋を掩護する如く堅固に構築し三線陣地となす。

第一線陣地は、歩兵二中隊を收容せる堅固なる斷面の八支撐點堡壘及歩兵一中隊を收容すべき八箇の中隊堡壘の閉鎖せるものにして、此等の中間には散兵壕及野砲二百有餘門を容るべき砲臺二十一箇を設備す。

各堡壘、砲臺は互に側防せられ且其周圍及中間地區の各所に障碍物を設くるの外各方面に對する多數の交通壕を設く。

第二線は、遼陽の城壁を中心とし左右に支點堡壘二、角面堡四、銃眼堡五、砲十九門の爲めに三砲臺を設け、城壁の處々に通路を開設す。

第三線は、橋梁直接掩護の爲め遼陽東北隅に一箇、其北方に互る太子河に沿ひ主堡壘二箇、中間堡壘二箇、砲三十六門の爲めに六砲臺を設く。

この計畫は陣地には約二師團を配備する考案なりしが如し。

工事は工兵半中隊指導の下に支那人を使用し四月八日より開始し七月下旬に略、完成し、其後は掩蓋を堅固にしたり。

遼陽市街に近接せる周圍は平坦の地形にして降雨時には濕潤となる。又南方及東方は約六乃至七軒の距離を以て高地に連なる。

太子河は平水に於ては所々に徒涉場あるも雨期には増水し流速可なり急となるを以て大障礙を呈す。四乃至五月頃に於ける水幅は約百五十米内外、水深は二米位あり。

露軍は六箇の軍橋を架設し尙鐵道橋を歩兵及輕車輛を通じ得る如く設備せり。左岸橋梁掩護の爲め第一軍橋の上流約八軒湯家廣及五軒峨眉庄に水柵を設けたり。

太子河の右岸に於ては老木廠より上麥窩附近に互る約十四軒間の河岸の高地に急造的の堡壘を設く。尙其背面稠井子、攀家屯の線に急造的の後方陣地を設く。此等兩陣地の目的は東方より本陣地を迂回する日本軍に對抗せんが爲にして、尙老木廠附近の陣地は太子河左岸の橋頭陣地の左翼を堅固にせんが爲めなり。此等陣地は四月中旬より六月下旬に互りて設けられたるが如し。前進陣地は軍隊の到着するに従ひ八月の初めに著手したり。

露軍は八月三十日、三十一日の前進陣地の戦闘により日本軍の兵力を概知し第一軍が露軍の左側背に迂回する如く上流（江官屯の上流）に於て左岸に渡河せんとせしを發見し、クロバトキン將軍は、斷然主力を、右岸に集結し當時太子河右岸高地を占領せる第七軍團を軸とし其右翼を進出して日本軍を太子河に壓迫せんとし、三十一日前進陣地にありし西伯利第一軍團、第三軍團及戰列第十軍團に太子河右岸に退却すべきを命じ、而して此等主力の退却を安全にし此機動中軍の右翼を保障する爲當時總豫備たりし西伯利第二軍團、第四軍團及第三十一師團の集成旅團より成る歩兵五十大隊、砲百四十六門を以て左岸橋頭陣地の守備に任せしむ。前進陣地の撤退及三箇軍團の渡河は八月三十一日と九月一日夜間に互りて行はれ、九月二日より逐次日本軍に向つて前進し、三日に斷然たる總攻撃を爲さんとして三日午前四時之に關する命令を起草中諸方面の狀況不利なるの情報に接し、遂に奉天に退却するに決せり。此間橋頭堡陣地の守備隊は露軍のこの機動遂行を安全に掩護し、九月一日より三日迄の間日本軍の猛烈なる攻撃を支へたるも、太子河左岸の戦況不利の爲三日の晝退却命令を受け其夜陣地より退却せり。

斯くの如く露軍は最初三軍團の兵力を一夜にして右岸に移し日本軍の機動に對抗し得るの機

會を得たるは、橋頭陣地を設けたるが爲めなり。

遼陽會戦に於て露軍の敗北したるは河川の防禦のみに因るにあらずして、その他の原因によると雖も、以上概要を記して参考となす。

鴨綠江の戦例

日本軍の鴨綠江渡河に要せし日数は、十日間前後なり。即ち敵監視部隊驅逐と架橋材料收集作業の爲めなり。此際安東縣及九連城に於ける陣地の抵抗は大なる問題とならざりしなり。

當時日本軍は五月一日に渡河を開始し、露軍は僅かに一日を支ふること能はずして敗退せり。

蓋し當時陣地に在りて全く攻勢に轉ぜざりし爲に斯く容易に成功せしめしなり。

ザス・リツチ將軍が、當時日本軍の渡河を知りつゝ、主力を以て攻勢に轉ずることなかりし理由は、クロバトキンの訓令竝に安東縣附近に於ける日本軍の渡河を顧慮したるが如し。即ち鴨綠江下流方面に日本の砲艦ありしと第二軍の鎮南浦附近に於ける運送船團に牽制せられ判断を誤り失敗に歸せるなり。

之を要するに河川に於て攻勢防禦を行はんとせば、河の兩岸孰れにも動作し得る態勢にありて何れかに行動せざるべからず。若し他の方法を採るとせば河川の後方に控置して敵の半渡に乗ず

るを緊要とすべし。

以上により河川の攻防に於ける研究は之を終る。

筑後川渡河に於ける細部の研究は他日に譲り方面を轉じて第一師團の研究に歸る。

狀 況 其ノ七

- 一、十二月二十一日拂曉ニ於ケル軍ノ攻撃ハ各方面共ニ著々成功シ敵ハ遂ニ陣地ヲ放棄シ主力ヲ以テ筑後川左岸地區ニ、一部ヲ以テ同川右岸地區佐賀方面ニ退却スルニ至レリ
- 二、第一師團方面ニ於テハ二十一日拂曉ニ於ケル攻撃竝ニ二十一日拂曉群石山方面ヨリスル攻撃功ヲ奏シ西方ニ向ヒ一齊ニ退却スル敵ニ尾シテ十時頃第一線部隊ハ原古賀、板部、江口ノ線ニ進出スルコトヲ得タリ
- 該方面ニ退却シアル敵ノ兵力ハ少クモ一師團(砲兵ヲ増加セラレ且戰車ヲ有スルガ如シ)ナルガ如キモ戰場附近ニハ約二千ノ死傷者ヲ遺棄シアリ
- 三、第一師團ハ軍命令ニ依リ新ニ該方面ノ敵ヲ擊滅シ長崎、佐賀兩縣ヲ領有スベキ任務ヲ受ク騎兵聯隊ハ軍命令ニ依リ原所屬ニ復歸シアリ

四、第一師團ノ配屬部隊左ノ如シ

- 獨立輕榴彈砲第一大隊
- 山砲兵第一大隊
- 野戰重砲兵第一聯隊第一大隊
- 第一、第二野戰高射砲隊
- 無線電信一小隊
- 飛行隊第一中隊(偵察)
- 其他省略
- 兵站ハ師團ノ作戰ニ追隨シ得ル狀態ニ在リ
- 五、軍主力ハ二十一日拂曉ノ渡河攻撃成功シ十二時頃久留米市東南側地區ニ進出シ高良臺附近ノ敵ヲ攻撃中ナリ

第九問題

第一師團敵追擊部署ノ概要

第九問題の研究

追撃に關しては既に筑後川右岸城山及甘木附近の戦鬪後寶滿川及太刀洗川の流域に於て筑後川の線に向ふ追撃に就て原則的研究を爲したるを以て、本追撃に就ては之を省略すべし。

本追撃に於ての著眼は、佐賀平地に於て敵を捕捉殲滅するに在り。此の場合に於て佐賀平地並に之に關聯する地勢を大觀するに、北部は山地にして而も南北に通ずる交通路を有するも東西通ずるものは殆んど之を有せざる状態なり。又南方は神埼—佐賀市—中津道以南の地區は水壕多き地帯にして、軍隊の行動には障碍多し。

以上の如く觀察せば、追撃に方り縦隊を進むべき進路は自ら制限せられ、大規模の包圍的部署は爲し得ざるに至る。唯問題となるは主力を進ましむべき進路を何れに選ぶかにあり。敵の抵抗を豫期し尙且有利に前進せしむる爲には、山地に近き方面に主力の進路を選定するを可とす。從つて本追撃の状態は廣く深く且放膽に外翼に廻る追撃よりも猛烈果敢なる急追によりて本目的を達することを努むべきなり。

追撃目標は敵が隨意退却に移りたると地形は小城以西は隘路を成形しあるを以て、該地附近以

西は狀況に應じ更に追撃部署を更めざるべからざるを以て、一先づ該線を目標に選定するを可とす。

追撃地域の區分に關しては、各縦隊の行動を容易ならしむることを顧慮するを要す。

師團の編成内に在る輕戰車は、此際前方部隊に配屬使用するを有利とすべし。即ち退路上の要點に殺到し退路の遮斷に勉めしむべし。

騎兵隊は敵の側背若くは間隙に向ひ行動せしむる爲には神埼—小城道に沿ふ地區に於て敵を追撃せしむるを可とす。

砲兵隊の部署に關しては、其原則作戰要務令第二部第二百十四及第二百十六に示す如く、勉めて多くの砲兵を第一線歩兵の指揮官に配屬するの著意を必要とすべし。

飛行機に對しては、敵の退却状態及停止地點を搜索し、兩縦隊の連絡竝に敵退路の遮斷に努めしむるを要す。特に小城附近に於ける敵の動靜、増援部隊の有無を速に搜索せしむるを要す。

敵は瓦斯を利用して退却を庇掩すること多きに鑑み、消毒部隊は重點方面に於て勉めて前方に進出せしめ、機を失せず消毒作業に任せしむべし。

補給を迅速機敏に行ふことは、追撃力を培養するの要訣なり。先進輜重及行李の部署を適切な

らしむるを要す。

以下支那事變に於て遭遇したる追撃の經驗に就て若干述べし。

指揮統制不十分なる軍隊の退却は、其行動區々にして意想外の狀況に遭遇すること屢なり。故に此場合に於ては、縦ひ敵が全面的に退却態勢に在る場合に於ても常に前後左右をも、十分に警戒し、常に不期遭遇戦を惹起することあるべきを顧慮し置くを要す。又各縦隊に於ても、各梯隊各自の自衛力を以て警戒しあるを要す。固より本警戒に大なる力を注ぎ軍隊の行動鈍重に陥るが如きことあるべからず。

退却に方り、道路、橋梁等を破壊、遮斷、焼却し又は水流を利用して汎濫を構成する等は、徹底的に行ふものと豫期しあるを要す。故に此等進路の障碍を排除し又は修理することに關しては、特に工兵隊の使用部署を適切にし、材料の準備、輸送の迅速機敏を圖るを肝要とす。

混亂して退却する敵は各種の兵器は勿論其他重要な作戦戰闘指導に有益なる資料を遺棄しあるを通常とす。故に單に戰場掃除の部隊等に委することなく、機敏迅速なる行動を要する追撃間に於ても注意して資料の収集に勉むるを可とす。

戰場の各地に於ては、我軍の進路に平行して多數の遮蔽したる陣地を設備しあるを目撃せり、

一應心得置くを要す。

第一師團追撃部署ノ概要 (原案)

- 一、敵ヲ佐賀平地ニ於テ捕捉殲滅セントス
- 二、追撃目標 小城—牛津ノ線
- 三、飛行中隊ハ敵退却並停止ノ状態(小城附近ノ陣地占領ノ有無、状態)ヲ搜索シ並ニ川上川及嘉瀬川ニ於テ敵退路ノ遮斷
- 四、軍隊區分及進路

1、騎兵隊 主力

主力ヲ以テ鳥栖—神埼—小城道

一部ヲ以テ江口—佐賀—牛津道方面ヨリ敵情搜索及退路遮斷

2、右追撃隊

旅團長ノ指揮スル歩兵一聯隊

師團通信隊ノ一部

騎兵一小隊

野砲兵一大隊
十五榴一中隊
山砲兵一大隊(一中隊欠)
工兵一大隊(一中隊欠)
師團輕戰車隊
衛生隊三分ノ一

鳥栖—神埼—小城道ヲ追撃シ敵ノ捕捉殲滅ニ勉ム

3、左追撃隊

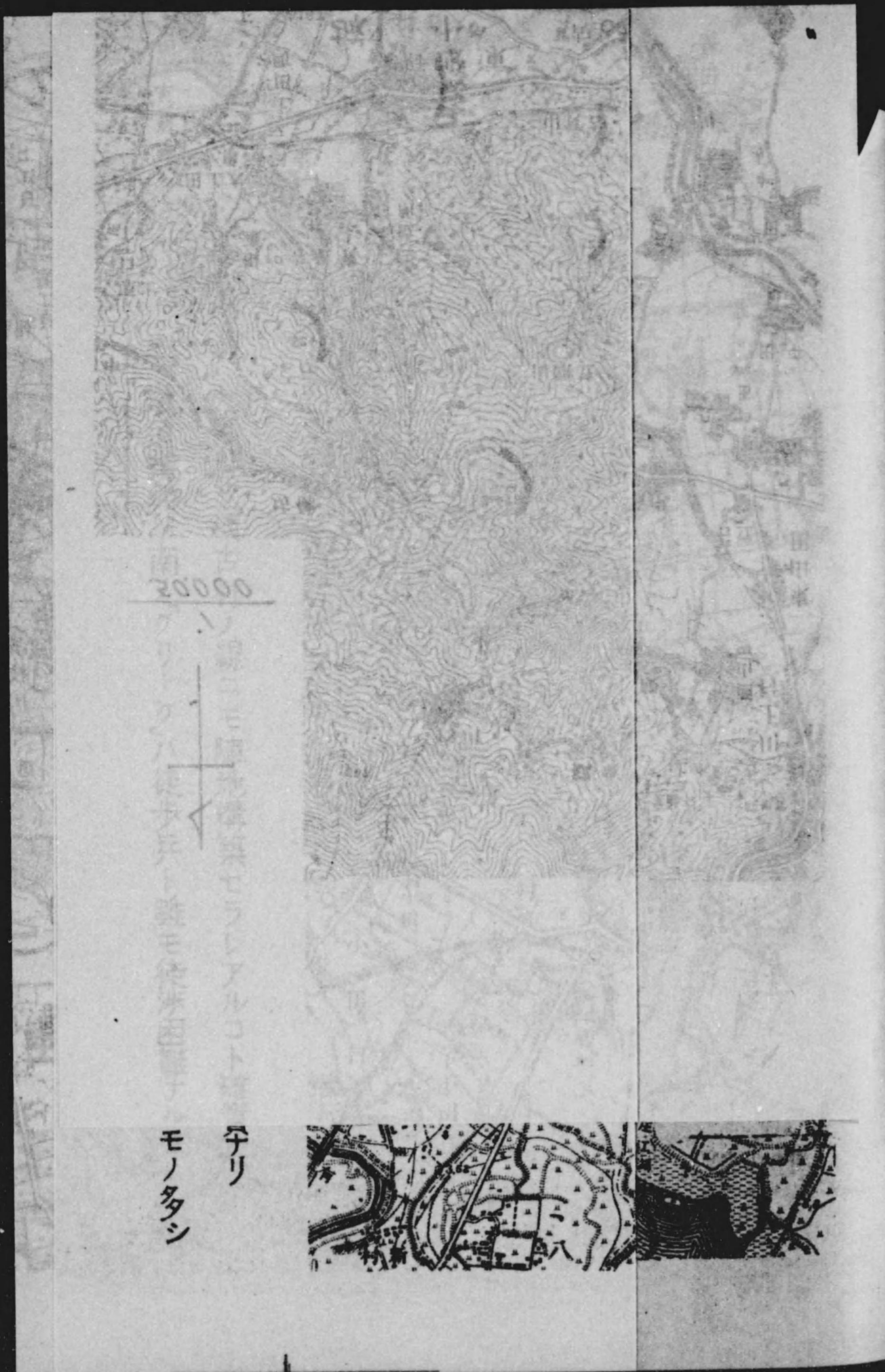
旅團長ノ指揮スル歩兵一聯隊
師團通信隊ノ一部
騎兵二分隊
野砲兵一大隊
山砲兵一中隊
工兵一小隊

衛生隊三分ノ一

江口—佐賀—牛津道ヲ追撃シ南方地區ヨリ敵ノ退路ヲ遮斷スル如ク行動セシム

4、本隊(同行軍序列)

歩兵中隊
師團通信隊主力
師團司令部(師團長ハ隨時前方ニ進出シ又戰團司令部ハ必要ニ應ジ躍進セシム)
歩兵聯隊(一中隊欠)
工兵第二中隊(一小隊欠)
野砲兵聯隊(二大隊欠)
歩兵一中隊
輕榴砲大隊
十五榴大隊(一中隊欠)
歩兵聯隊(一中隊欠)
衛生隊(三分ノ二欠)



右追撃隊ノ進路ヲ前進

5、高射砲隊

第一、第二野戦高射砲隊

右追撃隊ノ進路ヲ躍進シ防空ニ任ズ

五、追撃地域

坊所—野目里—いがや驛—東高木—樋口ヲ連ヌル線(線上ハ右追撃隊ニ含ム)

六、行李ハ本隊ノ進路ヲ千布ニ向ヒ前進

先進輜重ハ尼寺ニ、其他ハ神崎ニ向ヒ前進

備考 瓦斯防護ニ關スル件ハ省略ス

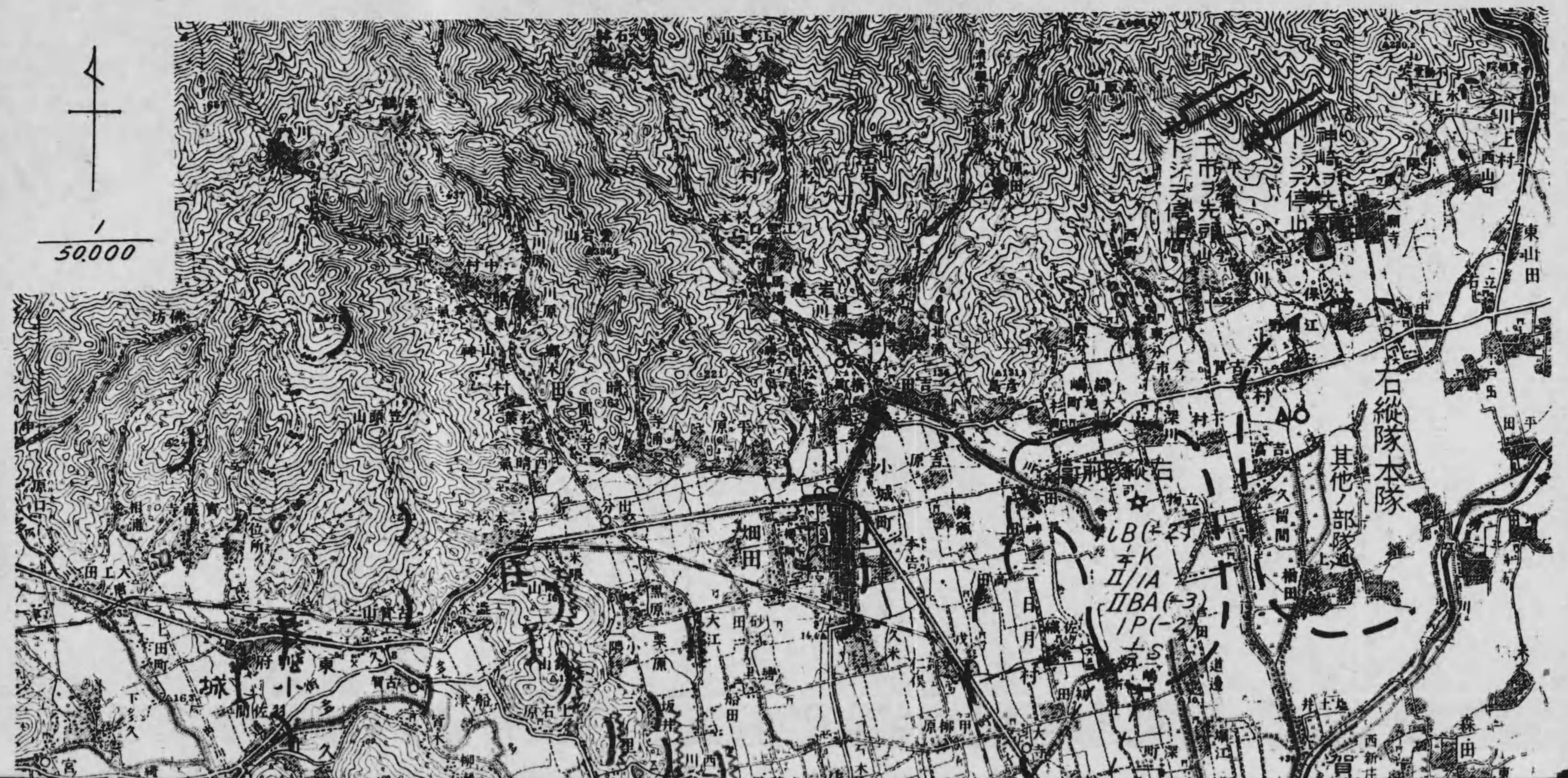
作戦要務令第三部の衛生隊は従來のものとは異なること勿論であるが、目下の時期に於ては暫く舊のものに従ふの止むを得ざることは、讀者の首肯せらるゝことと信ずる。

状 況 其ノ八

一、師團ハ追撃途中所々敵ノ抵抗ニ遭遇シタルモ猛烈果敢ナル追撃ヲ敢行シ隨所ニ障碍ヲ排除シ

第一師團態勢要圖

九月二十一日夕刻ニ於ケル





一 大町村及須古村ノ線ニモ陣地構築セラレアルコト確實ナリ
二 鐵道線路以南ノ「グリーク」ハ徒步兵ト雖モ徒步困難ナルモノ多シ



十七時頃別紙要圖ノ態勢ニ在リ

尙ホ敵情ニ關シ知り得タル件要圖ノ如シ

筑後川右岸近クニハ敵影ヲ見ザルモ佐賀―長崎道上嬉野―大村―諫早間ニハ敵人馬車輛ノ往復スルモノヲ見ル

二、兵站末地ハ鳥栖ニ開設セラレアリ

三、師團配屬飛行隊ノ爲ニ使用スベキ飛行場ハ佐賀練兵場ニ設備セラレアリ

四、軍主力ハ高良臺ノ敵陣地ヲ奪取シ矢部川ノ線ニ敵ヲ追撃中ナリ

五、軍主力方面ニ於テハ筑後川渡河後左岸ニ於ケル渡河材料ヲ獲得シタル結果第一師團架橋材料中隊ハ第一師團ニ配屬セラレ二十三日十二時迄ニハ神埼附近ニ到着シ得ル状態ニ在リ

六、新ニ戰車一大隊第一師團ニ配屬セラレ該部隊ハ二十二日夕刻迄ニ師團ノ所在地ニ到着スル豫定ナリ

第十問題

第一師團小城西側敵陣地攻撃ノ爲ノ地形判斷

一般軍術の研究

狀況 其ノ八追加

師團長ハ更ニ左ノ如キ敵情ヲ知ル

- 一、小城町西北方平原北側標高二二一ノ高地ヨリ愛宕山附近ノ高地線ニ互リ點々敵陣地ヲ見ル
- 二、小城町—牛津町道上上江良及下江良附近ニモ陣地アリ
- 三、牛津町南方濱枝川ヨリ三條ニ互ル間ニモ亦敵陣地ヲ見ル

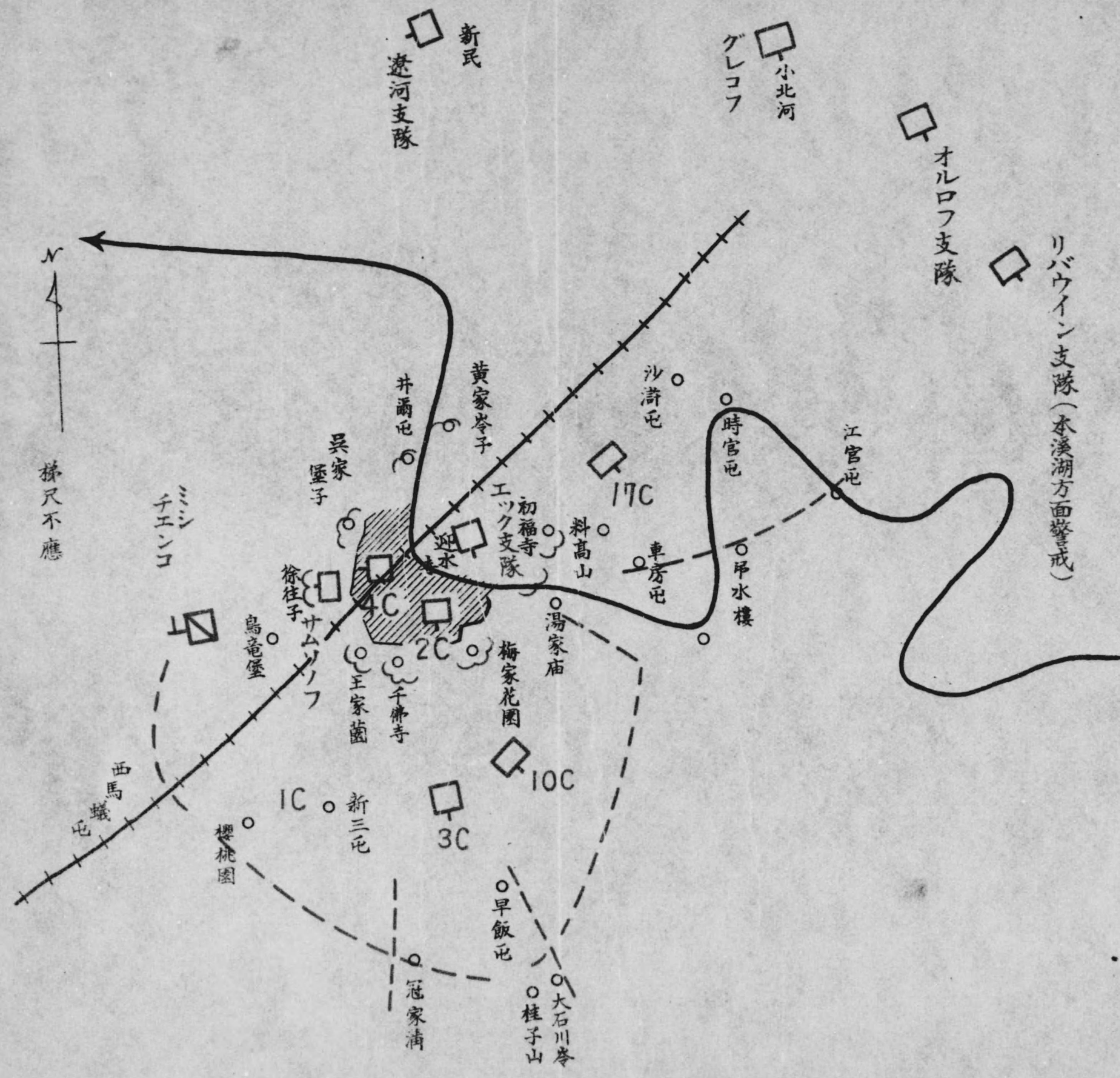
陣地攻撃に關する研究

一、機動に依り成るべく陣地外に決戦を求むること

先づ日露戰爭遼陽會戰に就て研究すれば〔遼陽に於ける露軍總司令官の防禦計畫（露軍將校バイオフ大佐著に依る）露軍配備要圖參照〕、露軍は堡壘を増築し増援隊の來著を待つ等時日の餘裕を得ると敵情を偵察するの目的を以て先づ鞍山站、浪子山及安平峯の陣地に於て敵を拒止し其後遼陽の前進陣地に退却し橋頭堡に據り太子河の兩岸に機動を行ひ好機に乗じ優勢なる兵力を以て敵を撃破せんとす。

八月二十三日以後に於けるクロバトキンの計畫は、サルバエフ及ピリデルリンク將軍の防禦陣

露軍配備概要圖





地は單に後衛を以てする戰鬪に止め、西伯利第一、第三及第十軍團の全力を以て敵を攻撃し其成
果良好の場合には更に攻勢に轉ぜんとするの決心を懷くに至れり。

八月二十九日日本各軍は既に遼陽攻撃の第一次準備位置に達し、所謂滿洲軍戰略開進を終了せ
り。然れども總司令官は更に此の位置に於て戰略開進を行ふは敵に餘裕を與ふるの不利ありとし
(作要一〇五の末尾「然レドモ時日ヲ遷延シ敵ヲシテ陣地ヲ強固ニシ或ハ新ニ兵力ヲ招致スルノ時
間ヲ得シメザルニ著意スルコト亦必要ナリ」を參照)、同日早朝次の命令を下せり。

要 旨

- 一、1Aハ勉メテ速ニ軍ノ大部ヲ太子河右岸ニ移スノ準備ヲ爲ス
- 二、4Aハ早飯屯、櫻桃園ノ線ニ開進シ以テ1Aノ攻撃ニ協力ス
- 三、2Aハ沙河、魯臺子ノ線ニ開進シ一師團ヲ隨時滿洲軍ノ總豫備隊タラシメ又野砲一聯隊、徒
歩砲兵獨立大隊ヲ4Aニ配屬シ得ル知ク準備ス

次で同日午後更に各軍に本戰勝を利用して敵を殲滅に陥らしむべきを命令せり。

第一軍は敵を追撃して夜に入り第十二師團を以て遼陽東方官屯南北の線に進出せり。

當時第一、第四軍の行動せし山地は峻山深谷相錯綜し、道路不良にして野砲の運動極めて困難

なり。第二軍方面の平地に於ても雨期の後を受けて道路泥濘特に鐵道線以西の地區は最も甚だしく、之を距る三軒以西に於ては殆んど野砲の通過を許さず。平地に密生せる高粱は生長正さに共極に達し高さ二乃至三米に及び蔭蔽の利ありと雖も亦整齊の運動を妨害すること甚しく、太子河の景況は未だ明かならずして同河右岸の地形に關し第一軍の諜報に依れば野砲の運動頗る困難なるが如し。

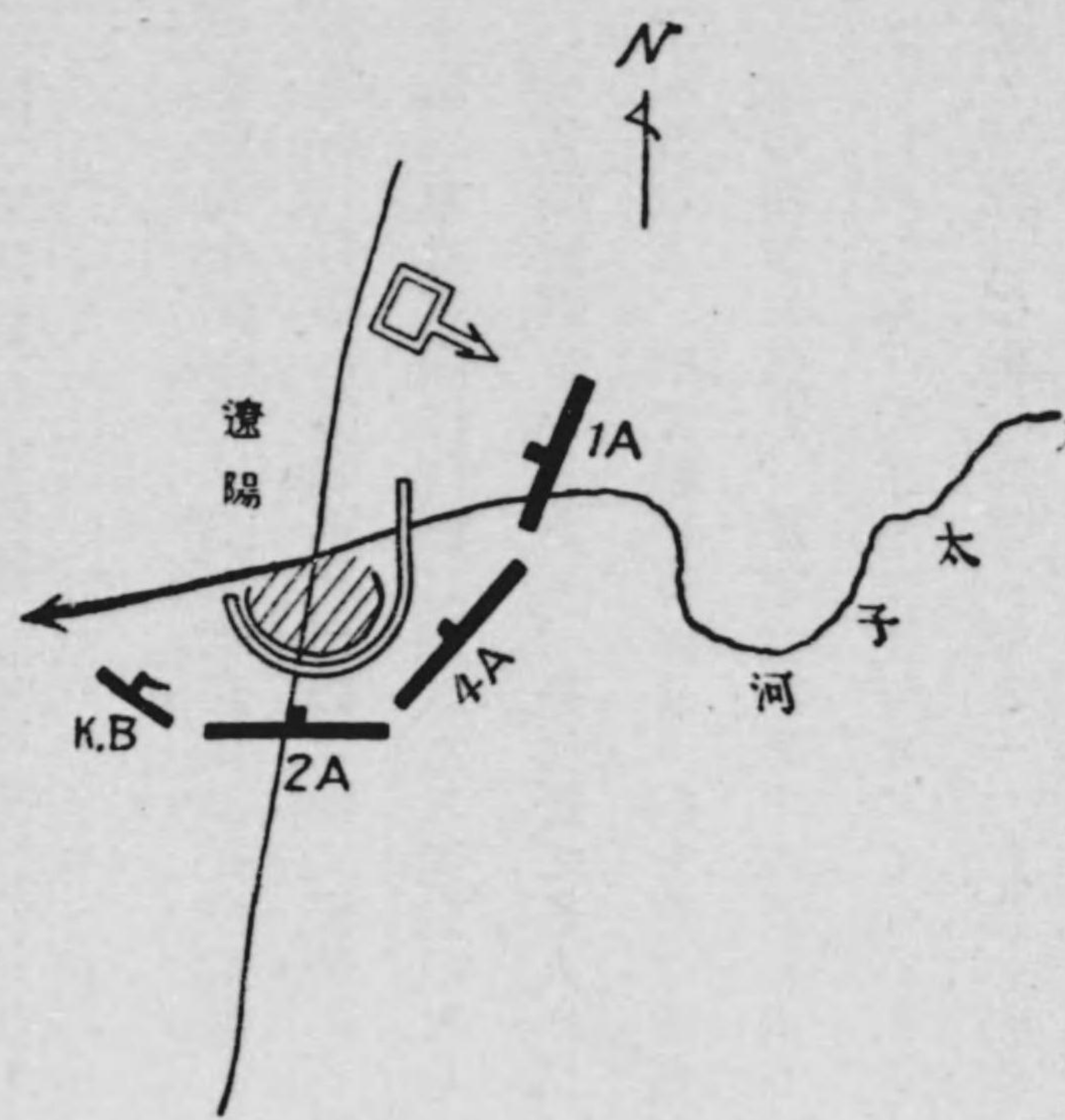
之より先き大本營に於ては、第八師團を九月三日頃より大阪に輸送し内外の情勢に應じ用途を決せんとすの意圖を有せり。然るに滿洲軍に於ては第八師團を大阪に集めて空しく時期を待たしめんより寧ろ之を金州附近に招致し南北何れの戰況にも應じ得るの準備に在らしむるを有利とし、烏蘇里方面に對する牽制的行動の爲には要すれば第七師團を使用し得べしとなし、二十七日總司令官より意見を具申す。然れども本具申は直に採用せられず爾後數回の折衝を要するに至れり。

斯くて二十八日以後更に第一、第四、第二軍は相呼應して遼陽に向ひ攻撃前進したるも、敵兵頑強に應戦し、且首山堡の線に於ける敵陣地の狀況不明にして之に對する判斷に苦しみ、三十日夜に至るも攻撃意の如く進捗せず、此夜總司令部は全般の情況を次の如く判斷せり。即ち敵は我急追に遭ひて決戦の企圖に出でたるが如く逐次其兵力を第一線に増加し我の最も突出したる第

十師團に對し攻勢に轉じたる形跡あり、敵の兵力は我約十師團と見て可なるべく、敵兵縦ひ首山堡、孟家房間の一點を突破することあるも恐るるに足らず、要は我軍の主力意氣衝天の勇を以て太子河右岸の地區より敵の退路に逼迫せば彼を殲滅するの好機を獲得するに至るべしと。三十一日第四、第二軍は更に首山堡、北大山の線に對し壯烈なる攻撃を反復したるも未だ成功せず。

此日午後三時總司令部參謀は第二軍參謀副長宛電報して曰く、「全戦役の運命を決すべき前日來の戦闘は各軍共に行惱み第四軍及近衛師團は優勢なる敵に壓迫せらるるの現狀を保持するに止り、第一軍は第二軍の成功に信頼し果敢なる運動をなすべしあり、今や各軍共に其運命を第二軍の成功に賭して苦戰奮闘しつゝあり、是に於て吾人は切に貴軍の成功を祈る。」と。以て總司令官の意圖を卜すべきなり。次で秋山支隊より砲を有する優勢なる敵午後三時北臺附近に現出し續いて南進中なりとの報告に接し、敵軍我全軍の左翼に向ひ大舉攻勢に轉ずるにあらざるかを思ひ、寒心に堪へざらしめしも、後該敵は優勢なるものにあらず且前進を停止したるを知るに及んで漸く意を安んぜり。此日午前一時第一軍第十二師團の前衛は敵の抵抗を受くることなく連刀灣附近に於て太子河を渡河す。

九月一日朝第四、第二軍は敵の退却に尾して早飯屯、首山堡の線を占領し、第四軍は遼陽南側の堡壘線に向ひ急進し、第二軍は第四師團をして取敢ず遼陽西方地區より敵を追撃せしめ主力は概ね占領地區にありて隊伍を整頓す。



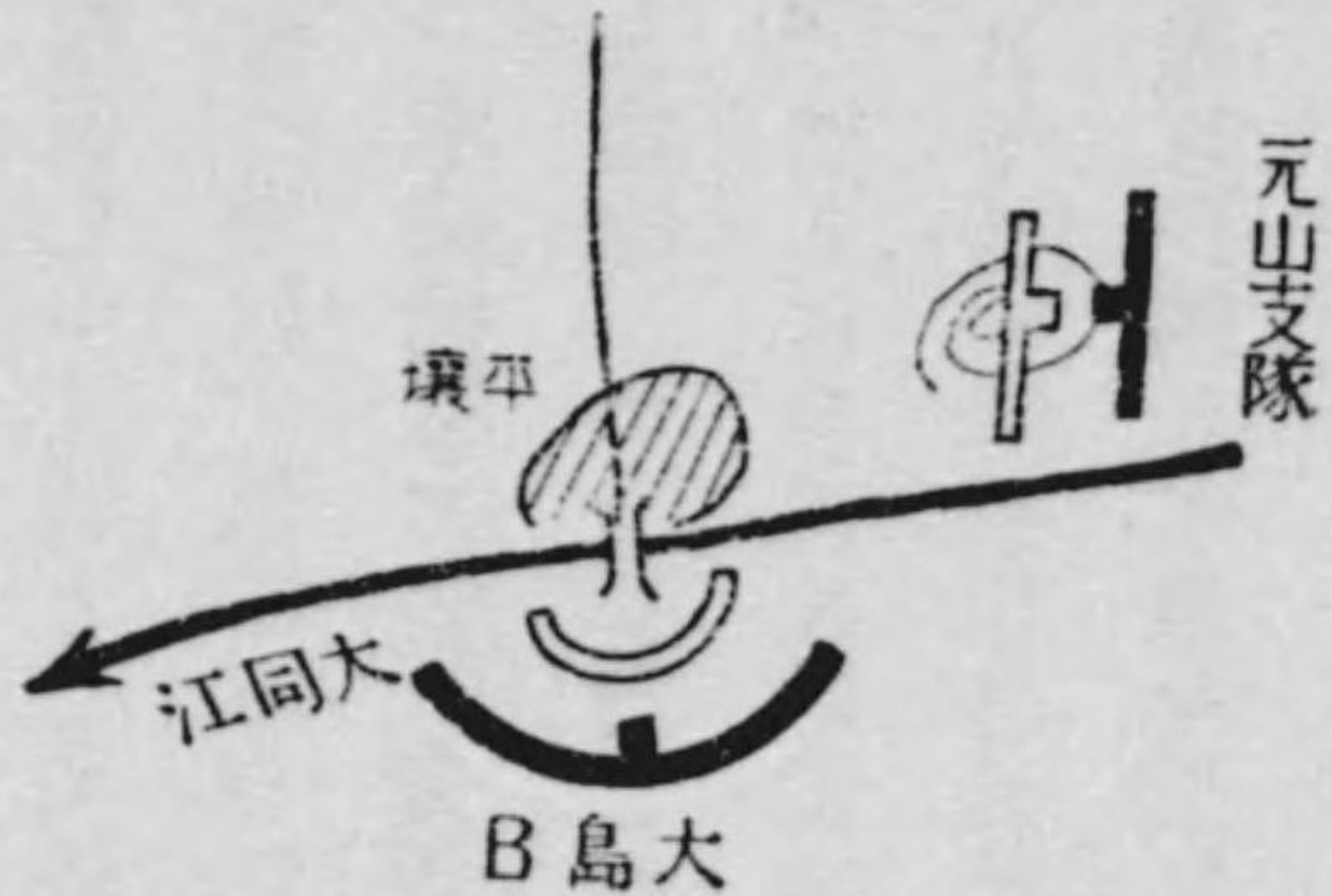
此日太子河右岸に於ては我第十二師團、第二師團は果敢なる攻撃を断行し、夜に入り概ね五頂子山附近より饅頭山に互る線を占領す。

九月二日第四、第二軍は遼陽南側堡壘線に對し力攻したるも、敵陣地堅固にして抜くべからざるのみならず、第二軍第四師團左翼方面には敵攻勢に轉ずるあり、各師團は近く敵と相對峙して夜を徹す。

太子河右岸第一軍方面にありては、此日優勢なる敵の逆襲夜に入るも止まず、諸隊は間斷なき敵の夜襲を撃退しつゝ頑として陣地を固守して天明に至る。

九月三日當時第四、第二軍正面の敵陣地は巧に編成せられ、堡壘の位置、障碍物の景況等全く不明にして、唯銃砲聲に依り大體の位置を知るに過ぎず、太子河右岸に進出しある第一軍に有利に策應せんと焦慮しつゝ、斷行したる勇敢なる攻撃も敵前近距離に至りて頓挫し、復た術の施すべきものなし。然るに日没後敵兵退却の兆あり、諸隊は直に敵陣地に突入し、第五師團は夜間追撃を續行し四日午前一時遼陽各城門を占領す。此日太子河右岸第一軍主力は近衛師團の右岸に轉進するを待ち孤軍長驅して敵を潰亂せしめんと欲し、舊來の陣地に在りて追撃を準備す。

九月四日朝來濃霧四塞し午前十一時頃漸く散ず。總司令官は連日の戦闘に於て各軍人馬、材料、



彈藥等の缺乏甚だしく爲に遠く敵を追撃すべからざるを察し、諸軍をして遼陽附近に停止し隊伍を整頓し北進を準備せしむ。

此の隊勢は上圖日清戦争に於ける平壤の攻撃に相似たるものあり。

抑、露軍司令官クロバトキンは、増援軍到着し日本軍に比し優勢を占むるに至る迄は決戦を避け輕戦を交へて漸次遼陽設堡陣地に退却し、此間所望の増援軍來著せば決戦し否らざれば更に遠く遼

陽北方に退却せんと欲せり。此間所望の増援軍續々來著し八月二十三日に至りては遼陽に退却するの必要なく既に浪子山、鞍山站の線に於て一大決戦を豫期し得るに至りたるを以て、之が部署を命ぜり。然るに八月二十六日紅砂嶺附近の陣地一舉にして黒木軍の奪取する所となり、且此日豪雨沛然として湯河漲溢し後方の交通に困難を感ずるに及び、忽ち決心を變更し遼陽南方首山附近一帶の高地線に據り、機を見て攻勢に轉じ、又日本軍有力なる部隊を太子河右岸に移動せば遼

陽設堡陣地に退きて防禦正面を縮小し其節約し得たる兵力を以て太子河右岸に集め、同河右岸に進出したる日本軍を撃破し、之を太子河に壓迫するの策案をも併有せり。然るに八月三十日に於ける日本軍の各方面の勇敢なる攻撃は、露軍をして過早に總豫備隊を逐次注入せしめ、遼陽南方高地線に於ける攻撃の機を捉ふることに困難なるを思はしめたるを以て、更に最後の策案として太子河右岸に進出したる黒木軍に對し攻勢を執るに決し、九月一日以後之が行動に出でたるも、其指揮混亂し、軍隊機動力を缺き、我勇敢なる第一軍の爲遂に其計畫も亦水泡に歸せり。

遼陽會戦に參與したる我戦闘總員約十三萬四千五百、損傷死五千五百五十七、傷一萬七千九百七十六、計二萬三千五百三十三、鹵獲の主なるもの野山砲七門、小銃二千三百二十挺、俘虜八十四にして露軍は戦闘總員二十二萬四千六百、其損害約二萬なり。

本會戦の經過を顧みるに、日本軍として露軍陣地外に於て決戦を求むることは状況上不十分なりしも、第一軍の勇猛果敢なる行動により敵の既設陣地の左翼後に於て敵の豫想外の戦闘を惹起せしめ、グレロフ支隊及オルロフ支隊をして其優勢なる兵力の能力を發揮せしめざる如く之を封じ、以て遼陽既設陣地の價値を著しく減殺せしめたり。

次に奉天會戦に就て研究すれば、

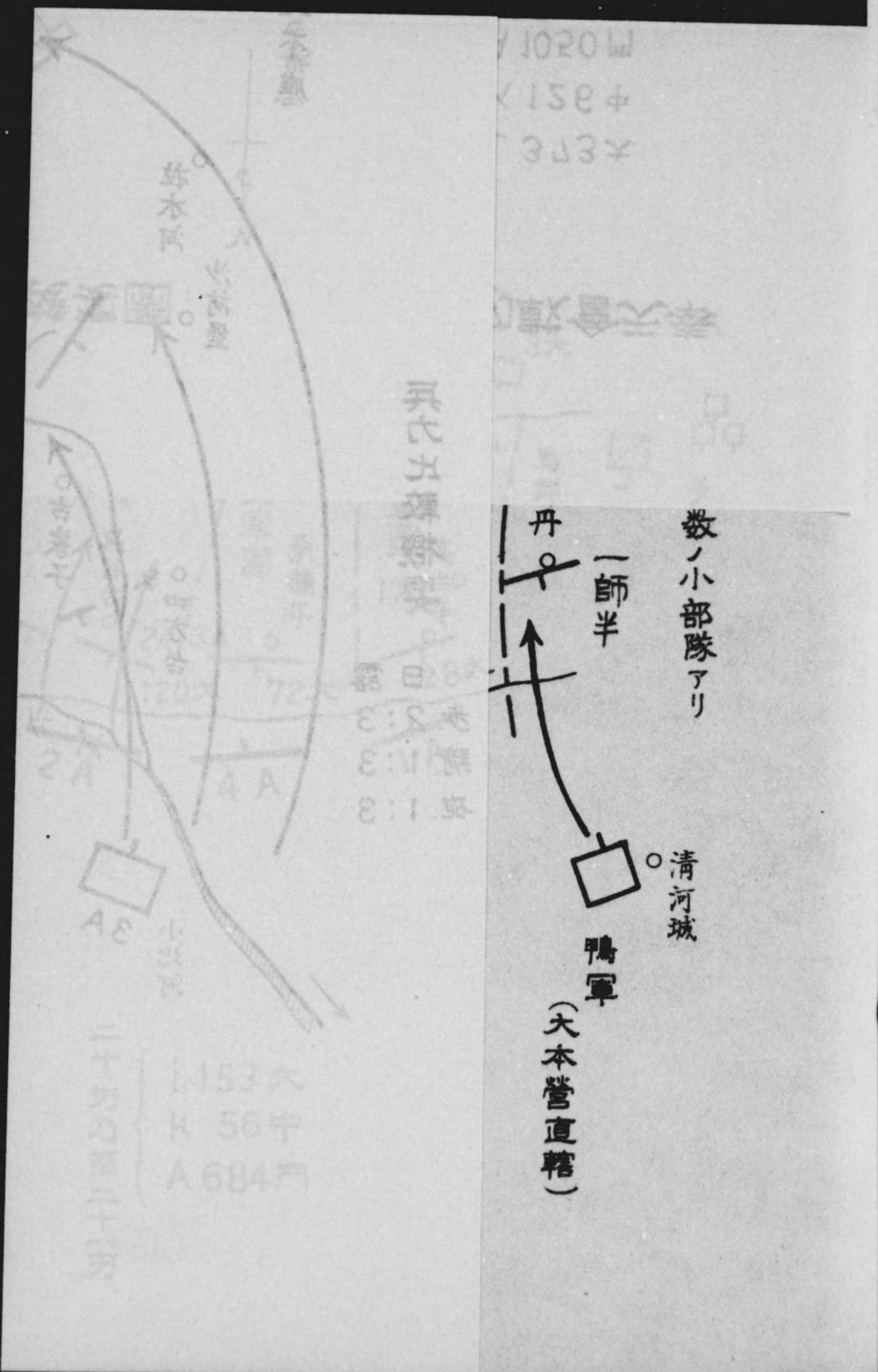
二月二十日滿洲軍總司令官の攻撃部署命令の要旨を示せば左の如し(要圖参照)。即ち
第一軍は主力を以て現在地に置き常に攻撃に轉じ得るの準備に在らしめ且強大なる部隊を以て
邊牛堡子東北方松樹嘴子、上海浪寨方面に派遣し二十七日より攻撃を開始し且常に鴨綠江軍と
連絡すべし

第四軍は第一軍の左翼より林盛堡に互る線を占領し鴨綠江軍並に第三軍の繞回運動奏功前に於
て我中央に向ひ攻撃し來るべき敵竝に烟籠山(滿寶山)の敵に對し攻撃に轉ずべく準備すべし
第二軍は第四軍の左翼に連なり第三軍の繞回運動の成果を待ち最大の兵力を以て沈且堡附近よ
り來勝堡方面に攻撃すべく準備すべし

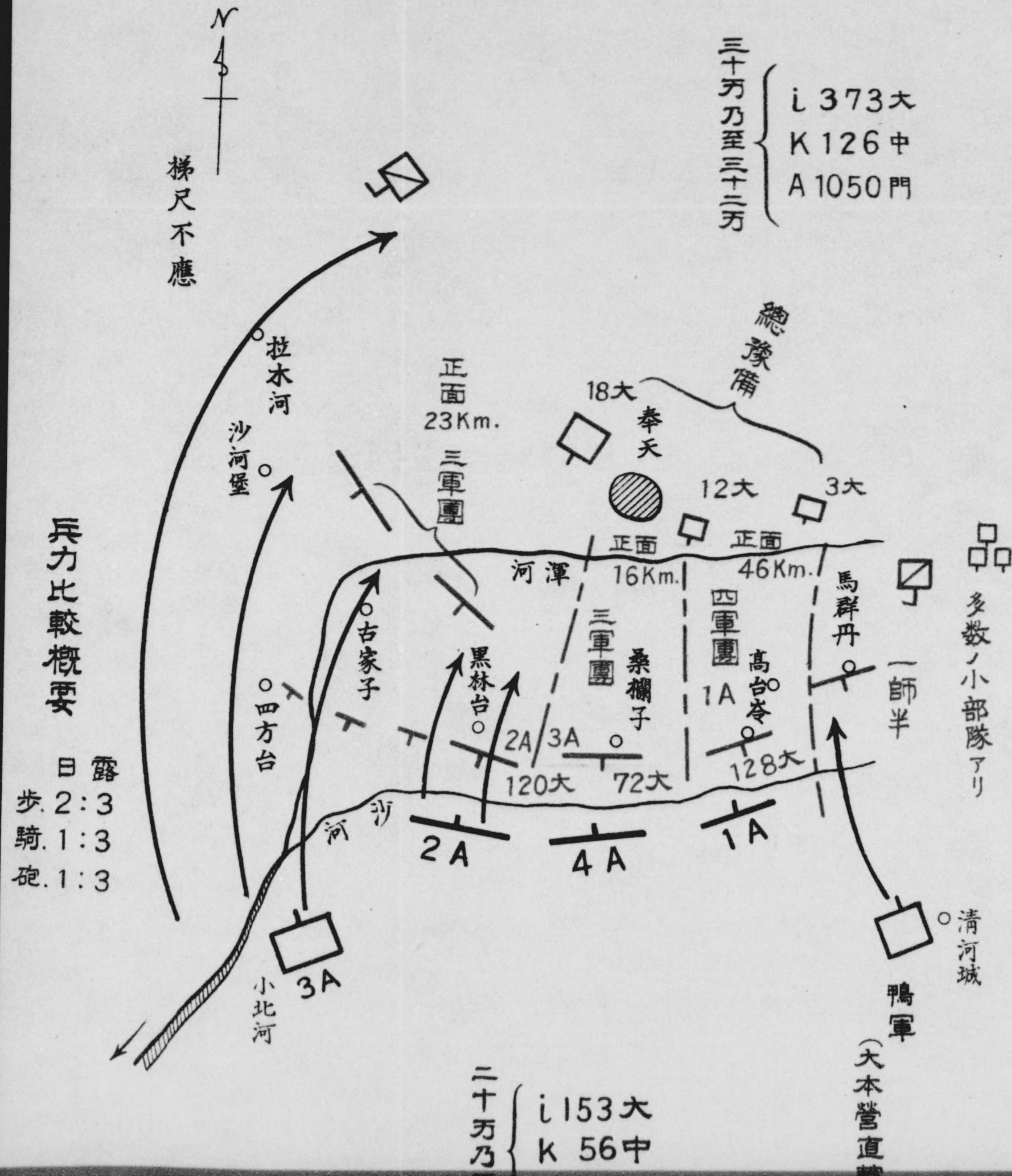
第三軍は二十六日以後常に發進し得るの準備にあり行動開始後敵の右翼に繞回すべく之が爲め
最初の運動方向は軍の左翼を大民屯に在らしむべし
總豫備隊は二十五日より第三師團長の指揮に従ひ大東山堡、狼洞溝附近の地區に位置し前進に
方りては第二軍の左翼後に在るべし

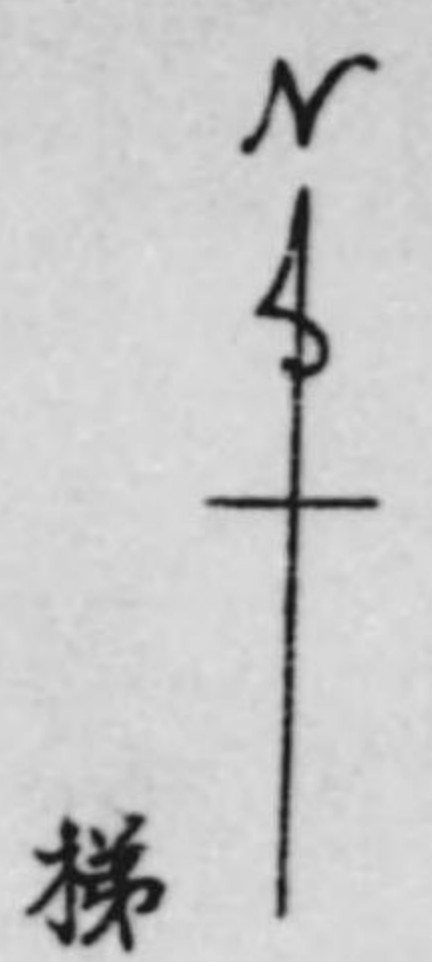
鴨綠江軍は大本營直轄なりしを以て滿洲軍としては別に命令を下さず。

當時沙河の陣地は兩軍之を堅固に占領し騎兵部隊の使用方面少なく、唯遼河の兩岸に使用する



奉天會戰初期二日之露軍態勢要圖



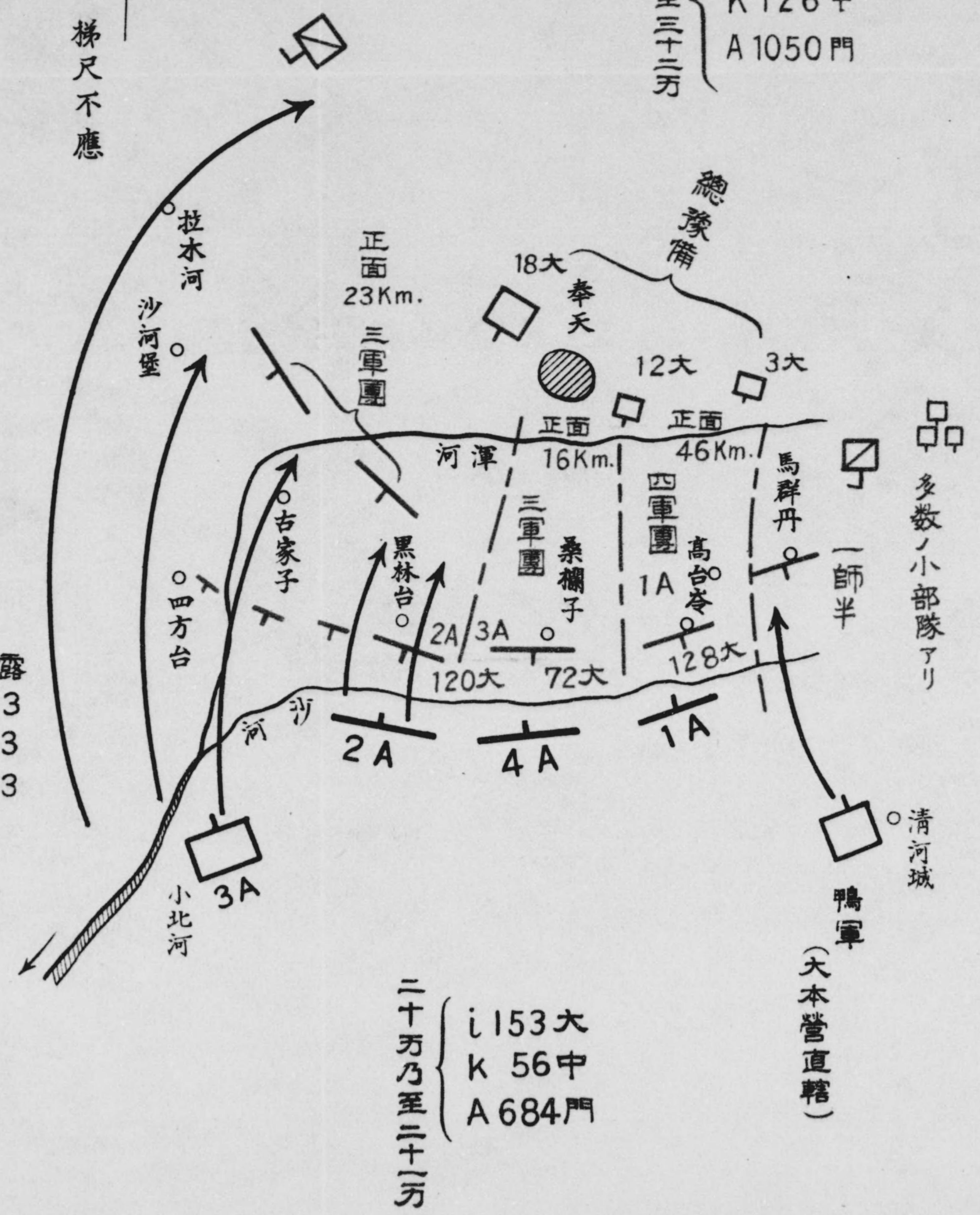


梯尺不應

三十万乃至三十二万
 { I 373大
 K 126中
 A 1050門

兵力比較概要

日露
 步. 2:3
 騎. 1:3
 砲. 1:3



二十万乃至二十二万
 { I 153大
 K 56中
 A 684門

清河城
 鴨軍
 (大本營直轄)

外なく、且該方面には敵の優勢なる騎兵集團ありしを以て、遂に騎兵の使用は已むなく挺進隊を出す状態なり。各軍は盛んに間諜を使用し其間諜は渾河の左岸地區に行動したる爲め撫順方面は依然として不明にして、上海浪寨附近が露軍の左翼なるべしと判断せり。時恰も三月に入れば渾河の解氷となり兩軍共に攻撃に轉ずるの困難なることを豫想し、期せずして兩軍同時に攻撃に轉ずることとなり、唯日本軍一日早かりし差にて日本軍が機先を制することとなり、爲めに露軍が自然に防勢に立ちたるなり。

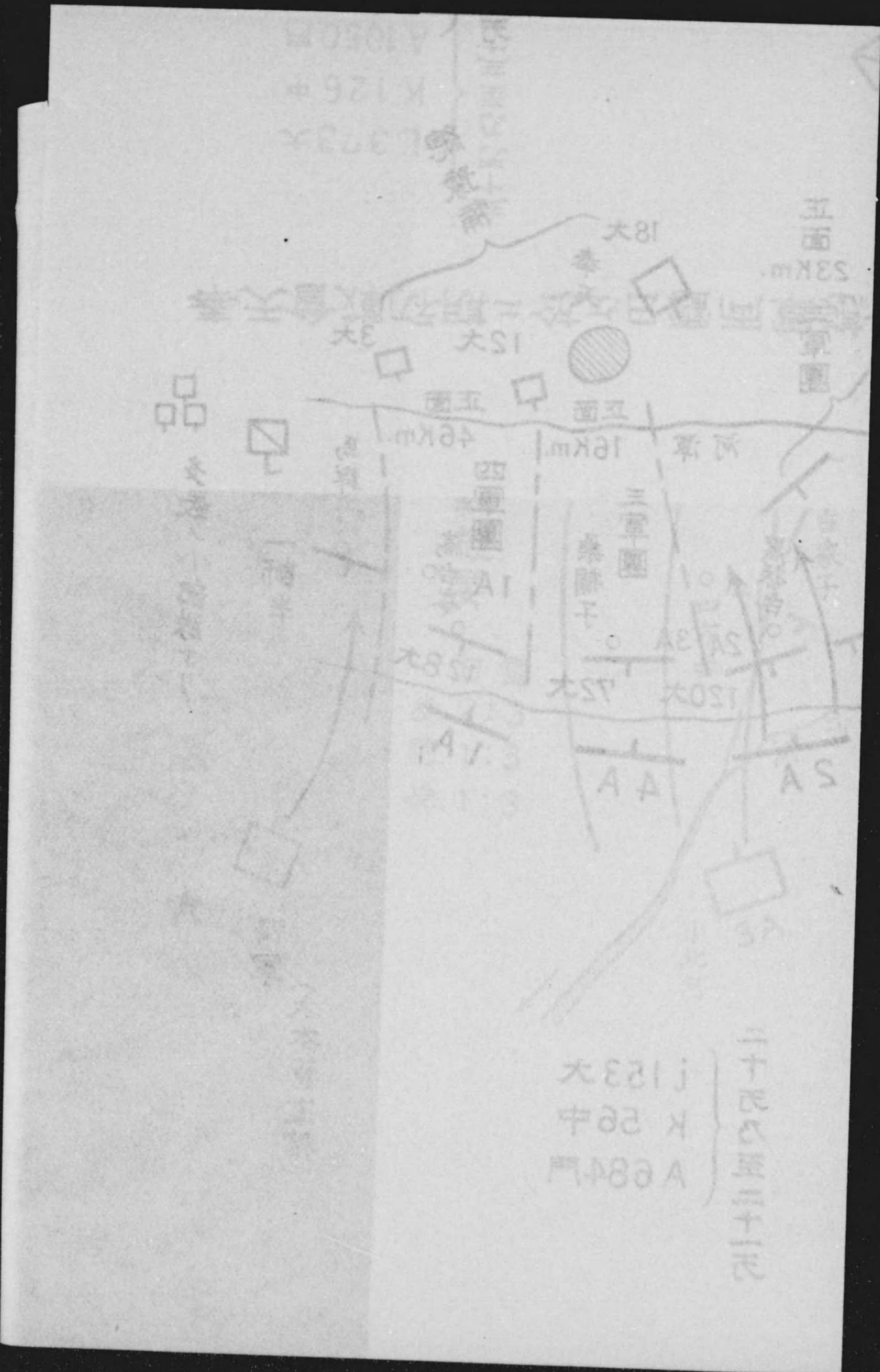
作要第二部第百〇五の研究

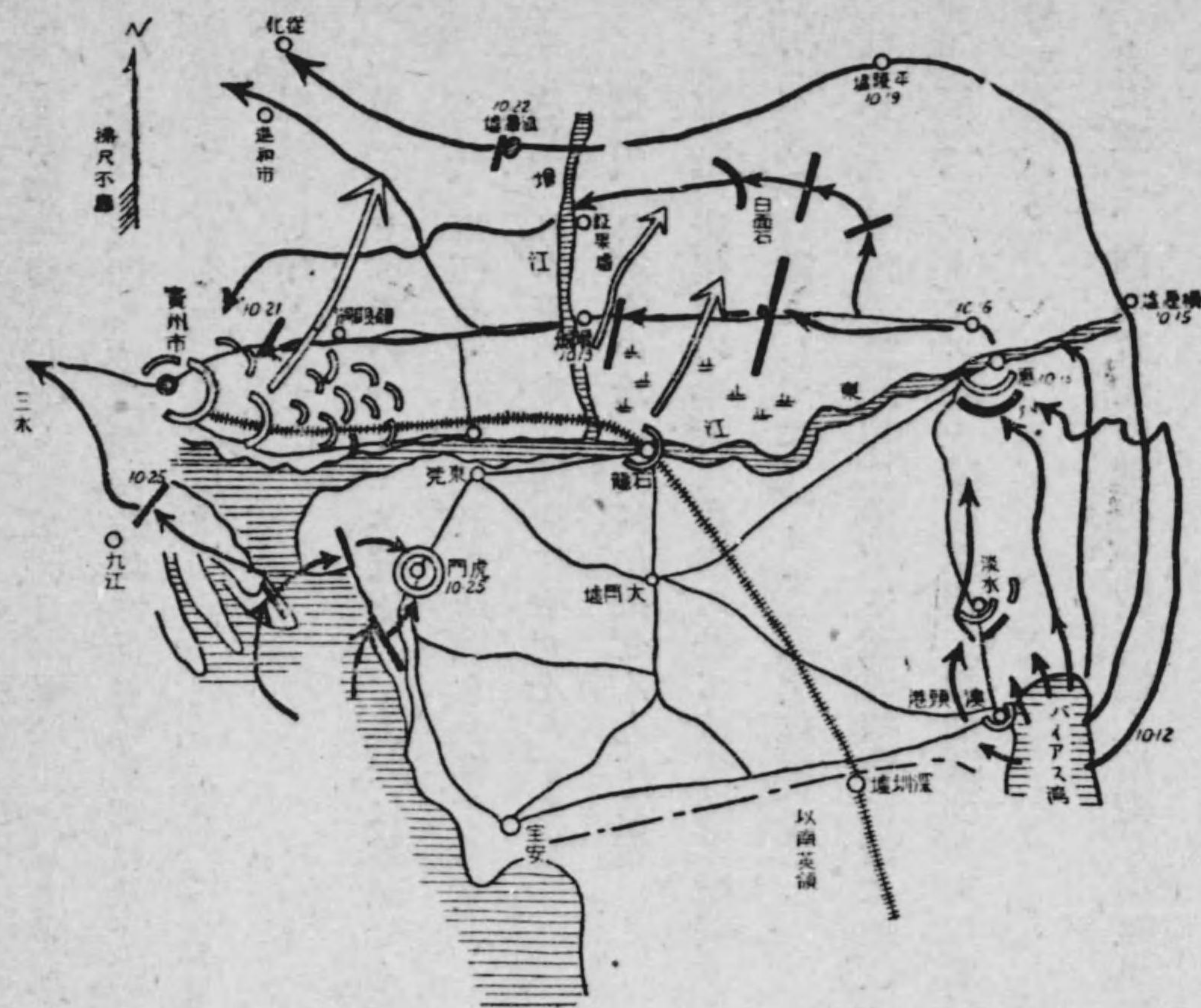
機動に依り陣地外に決戦を求めたることが最も理想的に行はれたるは、本事變に於て皇軍南支廣東攻略戦を以て其最たるものとすべし。

其概要を述べれば、先づ敵は要圖の如く陣地を占領しありたり。

即ち支那軍は第四路軍を基幹とし約六、七師團の兵力を以て半永久の築城要塞に據り廣東、廣州市を圍繞し更に廣州市東側地區特に東江の右岸地區を最も堅固に數線乃至數帶の陣地を以て占領することにより日本軍に備へたり。

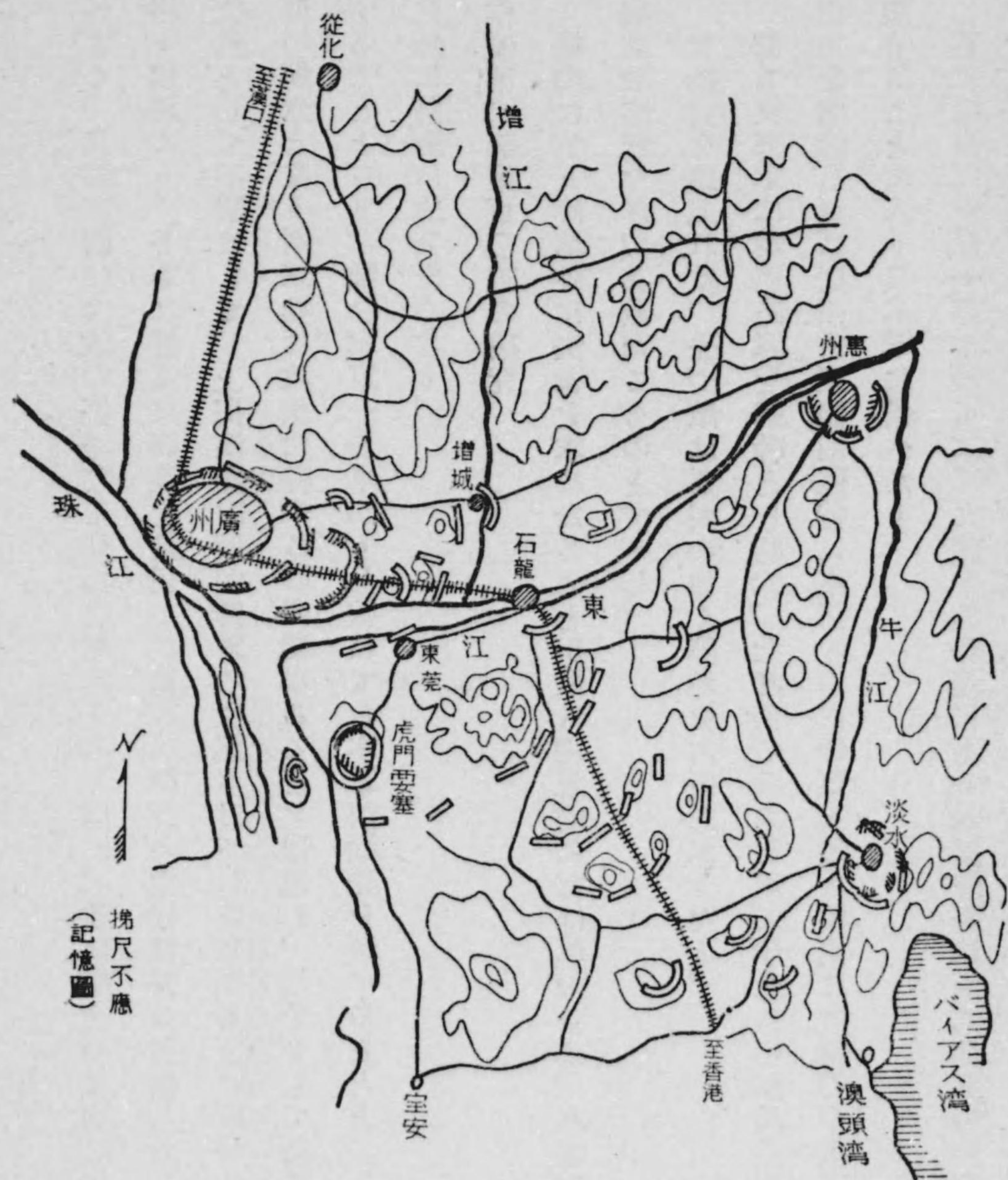
更に又東江左岸一帶に於ては、九龍半島香港に至る鐵道線路に沿ふ地區の要線を重疊して占領





もの稀なり。即ち主要なる道路の外は野砲を通ずること殆ど不可能なり。即ちバイヤス灣より廣州（所謂廣州市）に至る道路にして重車輛を通ずるもの及皇軍の進撃したる状態概ね上圖の如く以て其の一斑を窺知せらんことを望む。

全般的に地形を観察すれば、東江の右岸地區は廣州市に至る間増江の障礙ある外其東側地區は濕地帯多く、惠州—増城—廣州道以北は特に峻峻なる山地にして大兵力の使用に不便なるに比し、東江左岸地區は相當の比高を有する山地なるも良好なる道路を通じある



し、以て日本軍の廣州攻略に對し逐次の抗戦を企圖しありたるもの如く判断せらる。

地形は一帶に廣東省は山地多く我日本中國地方の地形に似たる所多し。但し樹木は一般に少なく道路不良にして車輛を通ずる

爲、支那側の状況判断としては日本軍は主として東江左岸地區を廣州に進攻し來るものと思惟したるが如し。即ち敵陣地の設備は最初の要圖に示すが如く東江左岸に濃厚にして右岸地區に配備の薄きを以て推知し得べし。

支那軍の行動としては、

第一、日本軍のバイヤス灣上陸を水際に撃滅せんとする案

第二、東江右岸地區に於て決戦を企圖する案

第三、日本軍の東江渡河に乗せんとする案

第四、日本軍の増江渡河に乗せんとする案

第五、廣州市の半永久要塞に於て持久的に防禦する案

日本軍の行動としては(バイヤス灣上陸以後)

第一、香港―廣州市に通ずる鐵道線路に沿ふ地區より前進する案

第二、バイヤス灣上陸後惠州―增城道即ち東江右岸地區を前進する案

等あるべし。

日本軍は、即ち東江の障礙を敵に遠く渡河し疾風迅雷的に廣州市に突入したり。即ちバイヤス

灣上陸後敵の待ち構へたる陣地を餘所に見て而も遠く北方地區に意外とする峻峻なる山地より廣州に機動的に迫りたる爲、敵は極めて不徹底なる第四案を採用したるもの如く、それも成るべく日本軍より捕捉せらるゝことを避けんと企圖して廣州市より飛び出したる状態なり。斯くして結果より觀れば明らかに機動により陣地外に決戦を求めたることとなりたり。

若し夫れ支那軍が巧妙に第一案より第五案に至る迄の行動を採りたるに於ては、日本軍としては十月十二日バイヤス灣上陸同二十一日廣州市占領の如き世界記録的戦果は獲得し難く、少くも三、四月の日子を要して廣州市攻略を見るに至りしなるべし。

茲に於て聯想するは本年五月十日未明突如獨逸軍が白蘭に進入し間もなく最も堅固なるマジノ要塞の粹を集め四十門の大砲と千二百の將兵に守られた一大トーチカ群とも言ふべき最新式の要塞エベンメールが一日で陥落したとき全世界は實に驚嘆の極獨逸は驚異的新兵器を裝備しペトンを熔解し盡す火焰放射器を有するとか一發よくトーチカを顛覆せしむる大口徑火砲を發射するか或は百噸近い大戦車を進むとか各種の奇怪なる情報が傳へられたるも、これは寧ろ怪奇なる化物兵器と云ふよりも數と質とに於て極めて優秀なる飛行機と機械化部隊の力に負ふ所大なるものありしものと思惟す。

獨逸軍が最初和蘭白耳義の國境附近に主力を以て押し寄せその有力なる機械化部隊は和蘭と白耳義の國境にあるマースレヒト・マース河とアンベルス運河との合流點でリエジユ要塞の北にあるそのマースレヒトでマース河に架つて居る橋梁を占領し、之より進入したるものにして、獨逸機械化部隊の第一回の會戦はマースレヒトとブラツセルの中間附近にあるセントトルンの附近に惹起せり。聯合軍は獨逸の主力はリエジユの要塞を突破しブラツセル、ナミュル要塞方面に襲來するものと判斷し、白耳義に精銳部隊を配置しセダンに近きマース河上流との間にある地區は所謂アルデンヌの森林にして千古斧鉞を入れざる原始森林地帯なるを以て、聯合軍側に於ては獨逸軍の通過來襲することなかるべしと油斷しありし處に、豈圖らんや獨逸軍はチエツコの併合以來マデノ要塞に對する攻撃の方法に心膽を碎き研究を重ね飛行機、戰車を出動せしめ實彈を使用する實驗演習を行ひ、又アルデンヌの森林に似たる地區に於て機械化部隊の大部隊の原始林通過に關し研究と訓練とを重ねて準備を十分備へありたり。

佛蘭西側に於ては「マースの守りが破れたことが今度の戰爭の致命傷であつた」と自覺しあり。獨逸が和蘭、白耳義に進入し主力を以てブラツセル方面に猛進すると陽動し佛蘭西側の意想外とする大森林を突破し、更に備へ薄きセダン―マースの戰線を衝き、間髪を入れず鐵壁と頼んだマ

デノ線を破つて全佛國人の心膽を奪ひ、急進に急進を續けてドーブア海峽に進出聯合軍を眞二つに中斷した手際は、眞に鮮かなりと謂はざるを得ず。

日本軍の廣東進軍に於てバイマス灣に上陸するや敵が堅固に備へた自動車道路に沿ふ地區を前進することなく高さ八百米の切り立つた岩山の峻峻を突破し備へなきを撃ち南支の要害惠州陣地を陥れ、敵に追尾して東江を破り息つく隙もなく慕進し更に備へなき東北方地區に大迂回を爲して廣州市に迫り折角備へたる陣地をして何等の價值をも發揮せしめざるに至らしめたと相似たる所あり。

本年一月二十七日より二月八日に互る間南寧北方地區に於て行はれたる作戰も亦、作戰要務令一〇五の原則を裏書きしあるを觀る。要圖を以て示せば左の如し。

作戰經過の概要(附圖參照)

一月二十八日〇〇部隊(〇〇部隊を除く)〇〇、〇〇各部隊は、一齊に四塘、五塘北方の敵陣地に對し攻撃を開始し、〇〇部隊及〇〇部隊は鬱江兩岸地區より敵の背後に對する機動を開始す。

〇〇、〇〇、〇〇等の各部隊は、峻難なる地形に據り頑強に抵抗する縦深陣地を逐次攻略し、〇〇部隊は東方に戰果を擴張しつゝ二十九日七塘附近に集結し先遣せる〇〇部隊の後方を賓陽平

地に向ひ前進す。

八塘附近の〇〇支隊は、二十九日攻撃に轉じ五塘附近より東北方に戦果を擴張前進せる〇〇部隊と連繫し三十一日各部隊は昆崙關、東塘嶺、拔豐嶺の嶮による敵を力攻す。

〇〇部隊は永淳伶俐嶺附近の敵を撃破しつゝ、前進し三十一日甘棠墟、沙帽嶺附近の敵を攻撃す。敵は未だ後退の微なきのみならず、賓陽附近に在つた約二箇師並昆崙關方面より三箇師を抽出して武陵墟方面より我〇〇、〇〇兩部隊に對し反撃し來る。

二月一日、二日〇〇、〇〇兩部隊は之等反撃部隊を隨所に撃破し、果敢なる追撃を行ひ、〇〇部隊先遣隊を以て二日九時賓陽を占領し敵の退路を遮斷す。

〇〇部隊亦夜間追撃の後三日賓陽北方地區に進出し其騎兵隊を以て鄒墟附近を占領せり。

正面の山地を力攻せる各部隊は、二日拔豐嶺附近の陣地を突破して〇〇部隊を以て思隴司に、〇〇部隊を以て賓陽に向ひ敵を追撃す。賓陽を占領せる〇〇部隊は更に一部を以て中大村を占領し〇〇部隊は一部を以て上林縣を占領し三日以來各所に於て北方に敗走中の敵を求めて之を殲滅せり。

一月中天候不良の爲航空機の活動困難なりしも、二月に入りてより天候回復し陸海航空部隊は

敗走中の敵を求めて之を攻撃し多大の戦果を収めたり。

六日より早に〇〇部隊を以て思隴司より武鳴に進せしめ大高峰隘に在りし〇〇部隊は之に呼應攻撃に轉じ八日〇〇部隊を以て武鳴を占領せり。

四日賓陽奪回を企圖し黎洞墟方面より我が側面に對し前進し來れる約六千の敵（廣東方面より來れる一五五、一五六師の一部に對し〇〇部隊、〇〇部隊は敢然之を反撃し七日黎洞墟西方の陣地による敵を撃退せり。

戦果の概要

我が巧妙なる作戦と各部隊の果敢なる行動とにより、賓陽南方の敵二十數箇師は四分五裂の状態となり、指揮組織は全く潰亂し、各部隊は數十乃至數百の集團となりて我包围圏外に逸走せんとし、或は我が退路遮斷部隊に激撃せられ或は山間の道路に充滿して我航空部隊に爆撃せられ、死傷算なく僅かに集結せる部隊を以て北方に後退せり。

西南行營主任白崇禧、陳誠、張發奎等の諸將領も柳州以北に逸走せり。

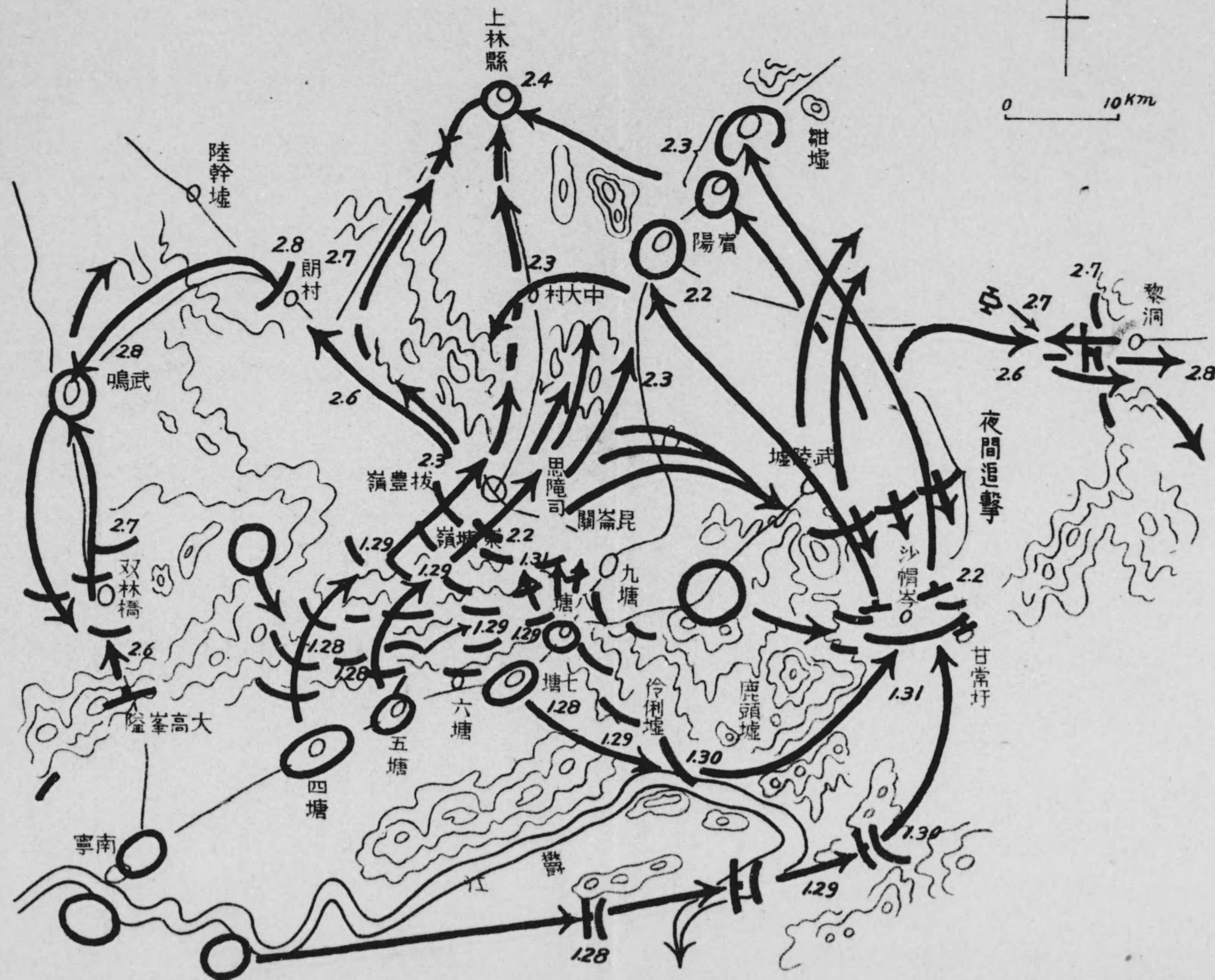
一月二十七日以降二月六日夕迄に判明せる主要なるもの

敵遺棄死體

二七、〇四一

南寧北方地區戰況要圖

一月二十七日—二月八日



- 俘虜 一、一六一
戰車 一九
野山砲 二〇
- 等にして、本戦闘が如何に巧妙果敢に機動迂回以て敵を陣外に誘致して戦機を捕捉し敵に痛烈なる打撃を與へたるかを知るに足るべし。
- 以上の赫々たる戦例は單に偶然なる出來事にあらずして、各種の原因の綜合したる結晶に外ならず。即ち機動は會戰の命脈にして其始終を通じて實施せられ、戦闘の開始之に依りて有利となり戦闘の成果之に依りて偉大を加ふべきものにして、其の要件としては、
- 1、上下一致して飽く迄初志を敢行する熱烈なる意氣あること
 - 2、諸判断決心の迅速明確にして指揮の敏活なること
 - 3、命令傳達を迅速確實にし軍隊行動の爲死節時を最小限とすること
 - 4、兵團の部署宜しきこと
 - 5、企圖を秘匿し放膽卓拔なる行動を以て敵の意表に出づること
 - 6、各種交通通信機關の活用に留意すること

- 7、空地連絡戦闘協同緊密なること
 - 8、行軍力の發揮特に夜間の利用機に合すること
 - 9、各級の指揮官に至るまで迅速的確なる處置及確實なる實行に努力すること
 - 10、人馬の給養其他後方補給機關の運用適切なること
 - 11、敵國軍並に敵國民の弱點を利用し宣傳謀略と相俟つて牽制、僞騙、陽動を巧妙に行ふこと
 - 12、歩兵に協同する砲兵火力の準備及情況に應ずる柔軟的使用特に拂曉黎明時の協同を適當にすること
 - 13、敵を捕捉殲滅することの徹底的手段として敵の退却企圖の看破、交通路の破壊、阻絶並該要點に蝟集する時機を捕捉すること
- 之を要するに、機動の主とする所は所望の時期、所望の地點に所要の兵力を移動するに在り。而して軍隊には優越なる戦闘力を保有せしめ敵をして我企圖を察知せしめざること肝要なり。以下更に想定の狀況と對照して研究せんとす。
- 狀況其の八に鑑み、此際我が機動に依り陣地外に決戦を求むることは其の實行甚だ困難なり。即ち南方は海に制限せられ北方は運動比較的困難なる山地なり。然れども兩者を比較するに南方

は徒渉困難なる牛津川並に處々クリクを有し敵砲火及戦車の威力發揮に容易なるも、北方山地は之に反するもの多し。彼の張鼓峰及ノモンハンの戦闘に於て經驗したる教訓は讀者諸彦の知らるゝ所なり。

小城町西方峰山より其南方牛尾の高地に互る陣地は、相當堅固に設備せられたる陣地なるも、全般より觀れば主陣地の前方に孤立突出し而も主陣地の各部分より有利に協力し難き状態に置かれあり。即ち前進陣地の害を具備しあるものと判断し得べし。

二、警戒陣地の攻略に就て

作戰要務令第二部第一百の末尾に於て「狀況之ヲ許セバ警戒陣地ノ攻略ニ引續キ主陣地帯ヲ攻撃スルヲ有利トス」とあり。所謂狀況之を許す場合には種々あるべきも、主として攻者の砲兵射撃が最初の敵警戒陣地攻略と主陣地帯攻略とを同一陣地に於て有効に實施し得る場合もその一つなるべし。

本狀況に於て警戒陣地を何時攻略するを適當とするやは考慮を要する問題なり。敵に時間の餘裕を與へざる爲には勉めて速に攻略するを要すべく、爲し得れば二十一日夜少くも小城町附近及其西北方愛宕山に至る間の敵陣地は奪略せざるべからず。

以上研究したるが如く敵陣地は多久川—牛津川により前後に二分せられたり、多久川左岸の峰山より牛尾に互る陣地を頑強に保持するとせば敵陣地は全般的に觀察すれば比較的容易に攻略し得べく、即ち二段の抵抗により多久川右岸兩子山の陣地に於て更に抵抗するとせば峰山、牛尾の陣地は思ふ存分の抵抗をなしたる後は該陣地に於て殆ど全滅を覺悟せざるべからず、この抵抗を中途半端にして後方陣地に後退せんか所謂前進陣地占領に伴ふ弊害を冒すものなり。

○軍の配備として後方決戦部隊の待期陣地として本配備の如き部署をなすこと又あり得べき状態なり。

以上の如く判断し多久川兩岸の陣地を攻撃する爲之に適應する配備を採るとせば、師團の攻撃準備中特に砲兵として主要なる各期に於ける火力を十分に發揮する爲には、先づ小城町及其南方附近に砲兵主力を展開し爾後必要に應じ更に其西方地域に陣地を變換せざるべからず。

全般の關係よりして攻撃開始は勉めて迅速なるを要することより、小城町及其附近に在る敵を驅逐するには本夜夜襲を以て該陣地附近一帯を奪取するを要す。

扱て序に夜襲(夜間攻撃)に就て研究を進めることとする。

作戰要務令第二部第四百十六には飛行機、戦車其の他各種火器の發達に伴ひ夜間利用の價値増

加せることを述べあり。

小城町附近は、若し敵が逆襲的に戦車を使用するとせば、比較的使用に便利なる方面なり。故に敵にとつて有利とする戦車の活動を封ずること亦緊要なり。尙第四百七十七には状況により夜襲には歩兵以外の兵種も之に協力することあるを示され、將來各兵種共に此種戦闘の研究の必要を増大するに至りたり。

夜間の錯誤其の他の不利を極力減少せんが爲敵陣地の状態に關し準備を周到ならしむることに關し必要な事項を第四百四十八に於て増補せられあり。

今次支那事變に於ける經驗教訓等は、未だ一般に發表せられざるを以て、茲に記述するの自由を有せざるも、過去の日露戦役に關する戰史的教訓に鑑み、敵情、地形の偵察に關し意見を開陳すれば次の如し。

火器効力の増大せる結果は平坦開豁地に於ける攻撃前進は、射撃の掩護と土工器具の援助に依るが爲非常に多くの時間を要し、且敵の防禦工事就中障碍物の價値を高めたる結果は、戦闘の進捗を益、遅延せしめしを以て、白晝の攻撃を以て其目的を遂行せんが爲絶えず敵情、地形、陣地の状況を偵察判断すると同時に夜襲の目的を以て之を偵察判断するを常則となさざるべからず

夜襲を企つるに方り敵の配備、地形を出來得る限り明瞭に偵察し其乗ずべき地點及方法を確知するの必要なることは勿論なりと雖、之が爲多くの時間を假すは戦況上許さざる所なり。若し晝間の戦闘に於て此注意の薄き爲め夜間攻撃を企つるに方り必要な條件を十分確知せざる如きことあらんか、多大の犠牲を拂ひ戦機を失するの憾なき能はず。故に晝間の交戦に於て晝及夜戦に對する兩様の顧慮を以て偵察及判断をなし、尙晝間偵知し得ざる要件に關しては夜間匍匐等を以て更に偵察せば、蓋し其不足を補ふことを得、戦機を失せず夜間攻撃を實行するを得べし。某部隊が明治三十八年三月六日魚鱗堡附近の攻撃に於て全般の戦況上晝間攻撃に次ぐに甘官屯及揚士屯に對し實施せる夜襲に關し、後日の觀察により當時敵陣地に關する偵察の盡さざるもありしを感得せり。少數偵察者の犠牲を吝んで攻撃に方り多大の犠牲を拂ふが如きは智者の事にあらざるなり。夜間敵陣中の村落若くは堡壘等の一局地を奪取せんと欲せば、其弱點に向ふは勿論側防機能に注意し之を攻略することを圖らざるべからず。而して障碍物の設備あるとき如きは一點に向ひて多大の兵力を使用するも突入路の狭き爲之を用ふるに所なし、故に各要點に向ひ數箇の小縦隊に區分して進め、尙爲し得べくんば若干縦隊は敵の背後に突入せしむるとき奇功を奏するの大なるべきを信ず。斯くの如きは一見企及し得べからざる事の如しと雖も、

三月六日の夜襲に於て甘官屯攻撃部隊の先頭にありし工兵將校及二、三の兵は、攻撃失敗後途を失ひ富官屯、揚子屯等敵の第一線部隊の背後と砲兵陣地との間を通過し揚子屯と其北方敵壘との中間を無事に通過し翌朝歸還せる事實より推察せば、決して不能事にあらざるを證するに足る。而して敵據點の周圍に數方向より進襲し就中小部隊と雖も其背後に迫らしむるときは、敵の志氣を阻喪せしめ守兵に動搖を與へ以て我目的を達成するの機會を醸成するを得べし。

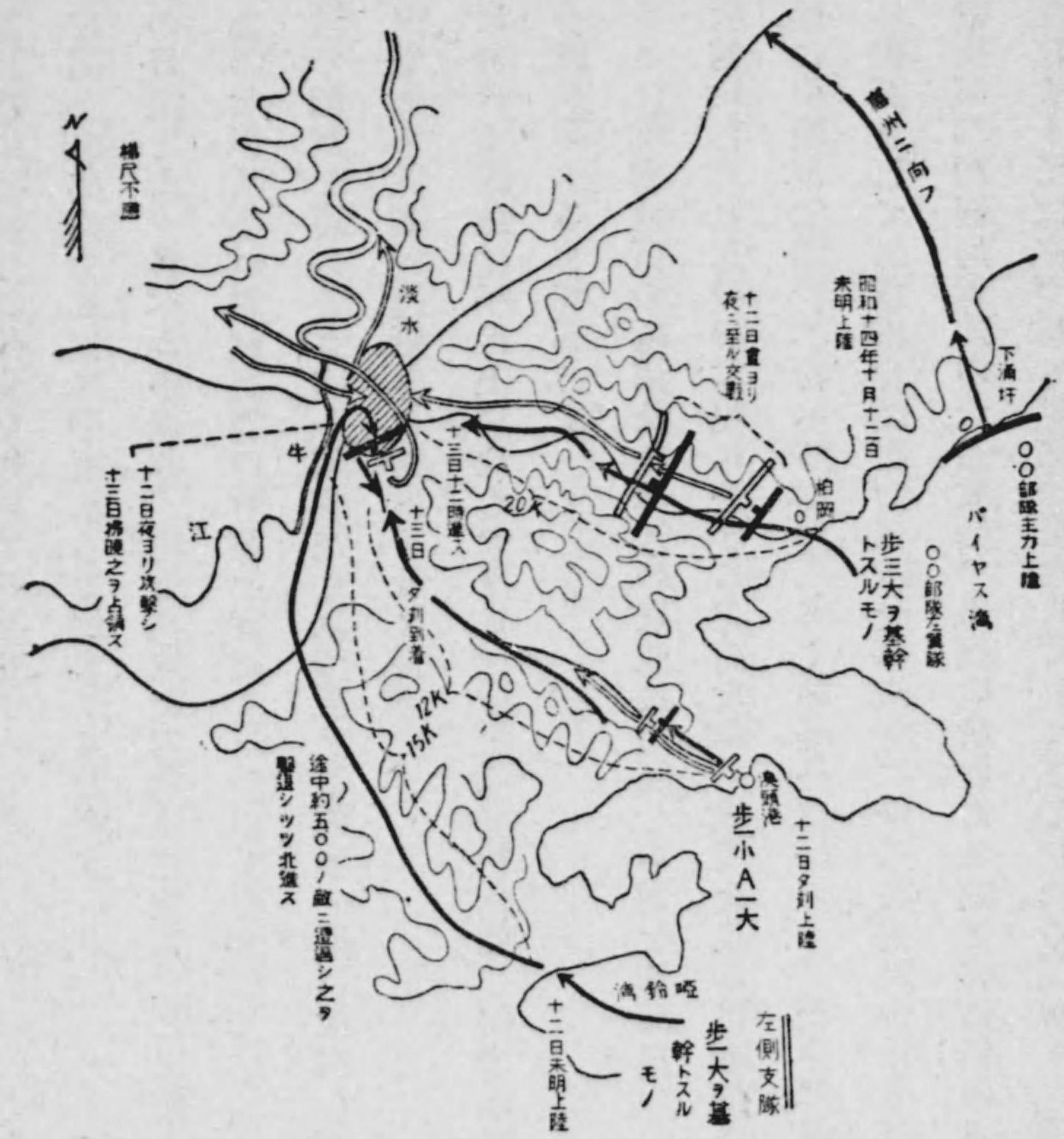
起伏地に於ける戦闘上の注意

- 1、地隙及山背の偵察に十分力を用ふるを要す
- 2、豫備隊及其他の部隊は敵に遠ざかるに従ひ我方斜面の成るべく急峻なる所に依り稀薄疎散の隊形を取るべし是れ敵砲彈落角の大きさを顧慮すればなり
- 3、山地は彼我共に迂回し易し我勉めて之を利用するを要す
- 4、凹地の中央に兵力を配置するは無益なり勉めて兩側高地の頂線上を占領すべし
- 5、正面に並行せる地隙は我に利あり巧に之を利用すると同時に兩側の警戒を怠るべからず
- 6、正面に直角の地隙は我に不利なり然れども多少の屈曲を利用すべし
- 7、地隙中の細流は徒渉するの準備なかるべからず

- 8、勉めて速に敵に近接し其死角を利用するを要す
- 9、晝間と夜間とは其兵力配備に変更あるを顧慮するを要す
- 10、敵砲兵の目標となり得べき小森林、堆土其他突起物は注意して之に據るべし是敵は豫め距離を測定しあるを以て無試射無觀測の射撃を実施するを以てなり
- 11、烈しき敵の側射を蒙るときは小隊躍進を以て散兵を前後一列に散開し進むるを利ありとする
ことあり又勉めて敵側の遮蔽界を利用するを要す
- 12、山地上に於ける躍進は平地上に比し大なる部隊を以て行ひ難し故に地形に應じ中隊を小隊に小隊を半小隊に換ふるを有利とす

以上は要するに攻撃地區の地形及敵陣地の状態に通曉し準備を周到ならしむることに關し説明を加へたる次第にして日露戰爭其他に於ける夜間攻撃の戦例を觀るに概ね左の如し。
晝間の攻撃に引續き(連續し)行へる夜襲は多くの場合成功せり。就中準備周到且敵の不意に乘じ成功せる夜襲としては遼陽會戰明治三十七年八月二十五日夜に於ける第十二師團左翼隊の遊撃溝嶺附近及第二師團兩翼隊の大寒坡嶺、弓張嶺附近の戦闘を其適例とすべきものなり。然れども、狀況によりては必ずしも準備十分ならずして成功したる例あり。誠に支那事變中南支バ

其の一 敵の不意に乘じ淡水を襲つて奪取す
(昭和十四年十月二十二日)



イヤス灣上陸部隊
中淡水及惠州の要
衝を夜間攻撃を以
て奪取せる戦例を
研究せんとす。(要
圖参照)
本戦例は機動によ
り戦機を捉へ夜間
敵の準備完からざ
るに乘じ不意に敵
を急襲して成功し
たる適例なり。
即ち其經過の概要
は、昭和十四年十

月十二日南支派遣軍はバイアス灣に敵前上陸を敢行し其〇〇部隊の左側支隊(其任務は速に淡水西南方地區より左翼隊の淡水攻略に協力するにあり)は要圖其一に示す如く啞鈴灣に上陸電光石火の如き前進を敢行し途中約五〇〇の敵に遭遇したるも鎧袖一觸之を撃破し、十二日の夜には早くも淡水の南方に到達せり。當時の敵情は淡水防備の主力部隊(約二〇〇〇)は左翼隊の進路たる淡水―柏岡方面に於て交戦中にして、其一部は更に増加せられたるものの如く、十二日夜半急遽自動車行軍を以て淡水に到達警備の配置に就かんとしあるときにして、右往左往頗る困難を呈しありたり。偶、左側支隊はこの好機に乘じ果敢斷行疾風迅雷的に淡水の南端に在りし敵の指揮機關を急襲し、敵の部署に就かんとする背後より不意に敢然たる攻撃を加へたる爲、敵は周章狼狽若干の抵抗を爲したるも支離滅裂となり、山砲數門、自動火器其他數臺の自動貨車を遺棄し淡水を放棄して西北方に向ひ退却せり。
この攻撃は作戰要務令第二部第五百十三の「夜間攻撃に任ずる歩兵は準備を周到にし且不意に敵に肉薄し白兵を揮ひ一舉に決戦を求むるを要す」とあることを能く裏書きするものなりと信ず。
尙淡水の軍事施設は十二日晝間は我海軍飛行機の爲め爆撃を受けありたるを以て、特に敵は夜

間を利用して行動しありたるものと察せらる。これ即ち同令第四百十六に示す「飛行機、戦車等より受くる各種の妨害を減じ云々」とあることの必要を證明するものなり。このことよりして夜間は彼我共に利用せらるゝ場合増加したることを知るべし。

次は惠州攻略の夜戦に就て紹介せんとす。

惠州は其一要圖に示しある〇〇部隊の主力即ちバイアス灣上陸當時の右翼隊並に〇〇部隊の主力を合したるものに向ひたる要衝の地にして、左翼隊が淡水を目標として進撃したるに對し此翼隊は惠州攻略を目標としたるものなり。

南支廣東附近は十月中旬の氣候は尙日本内地本州地方の夏と異ならず、バイアス灣沿海の水田は二度目の稻の穂が實らんとする時期にして、上陸當日は百度を越ゆる炎熱にして發汗甚だしく、將兵は到る處に於て流れ水を呑んで渴を醫したり。主力部隊はこの炎熱を克服し敵兵を驅逐しつゝ、一路惠州へ惠州へと進み、恰度十三日夕刻惠州城郊外に到着し直ちに之が攻撃に著せり。惠州附近の地形並に敵配備の概要を記憶のまゝ要圖(其二)に現はせば別紙の如し。

この攻撃は非常に急ぎ行はれたるものにして、作戰要務令第五百に示しある如く時日を遷延し敵をして陣地を強固にし或は新に兵力を招致するの時間を得しめざるに著意すること亦必要な

其二

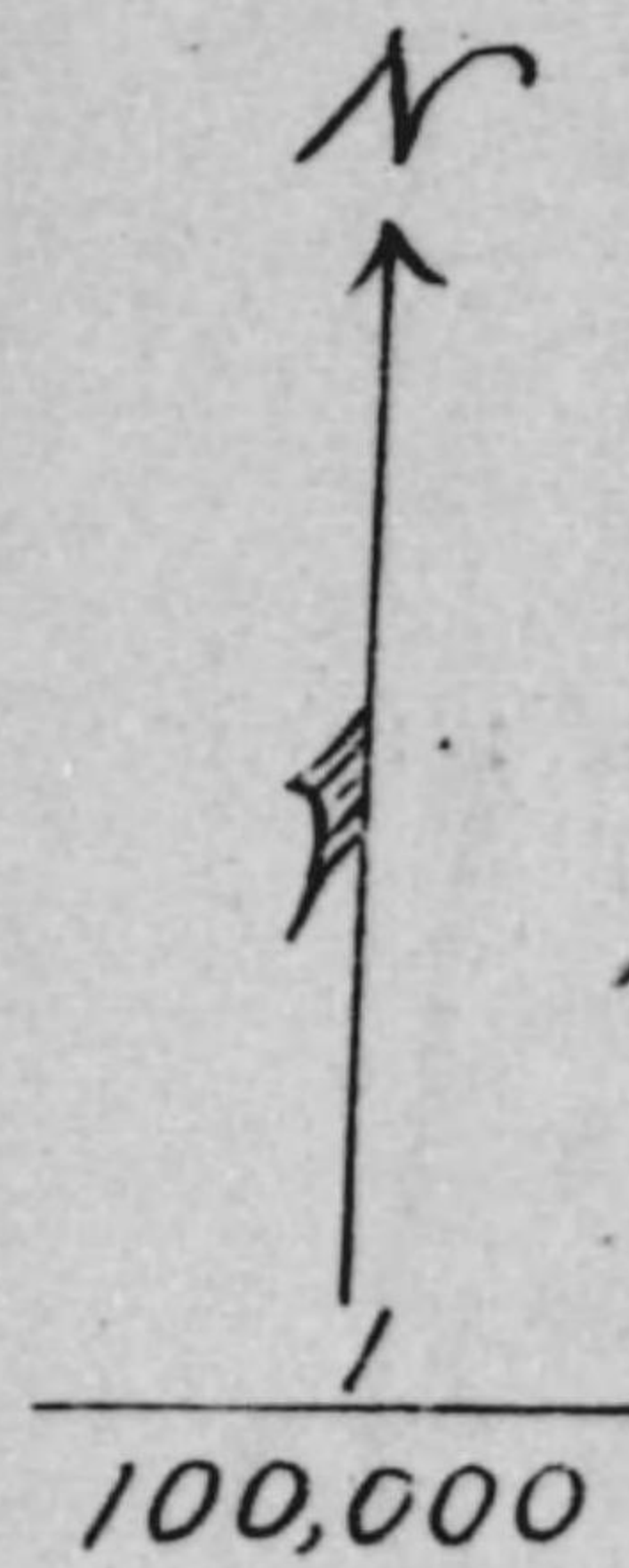


(東江ハ舟筏ヲ用フルノ外徒涉ヲ許サズ)

敵兵力ノ概要

守備約五千人大小ノ火カ
(バトン製)シ之ニヨリ皇軍

西湖ハ周圍約七軒乾燥期水深尚一米ア
水草ヲ生ゼル所多シ南側地區ハ村落池
西湖及東江支流ヲ連絡スル幅十米深サ
リテ甚ダシク運動ヲ阻害ス



其二

〇〇部隊 八十月十三日夕刻ヨリ攻撃ニ着手シ同月十四日朝迄ニ之ヲ攻略セリ
 敵ハ殆ド潰滅的打撃ヲ受ケ數十門ノ火炮及自動貨車等ヲ遺棄シ一部辛ウジテ東江ヲ渡河シ北方ニ退却セリ

北ハ東江ニ西及南ハ東江支流西江ニ圍マレ東方ハ廣瀾アル平地ヲ有ス城壁ハ東方半部煉瓦製ナリ
 東ニ、西一、南一ノ四門ヲ有シ望樓アルモ堅固ナラズ城壁ハ東江ニ沿フ部分ハ高サ五米餘ニシテ下基ノ厚サ數米ナル所多シ
 城內ハ東江ニ沿フ地區高ク南方ニ傾斜シアリ且南方附近ハ內部城壁ニ接シ幅五〇米水深一米以上ノ池アリテ通過困難ナリ又城壁ノ東側附近ハ村落藪池等錯雜シ運動射撃ヲ妨害スルコト大ナリ

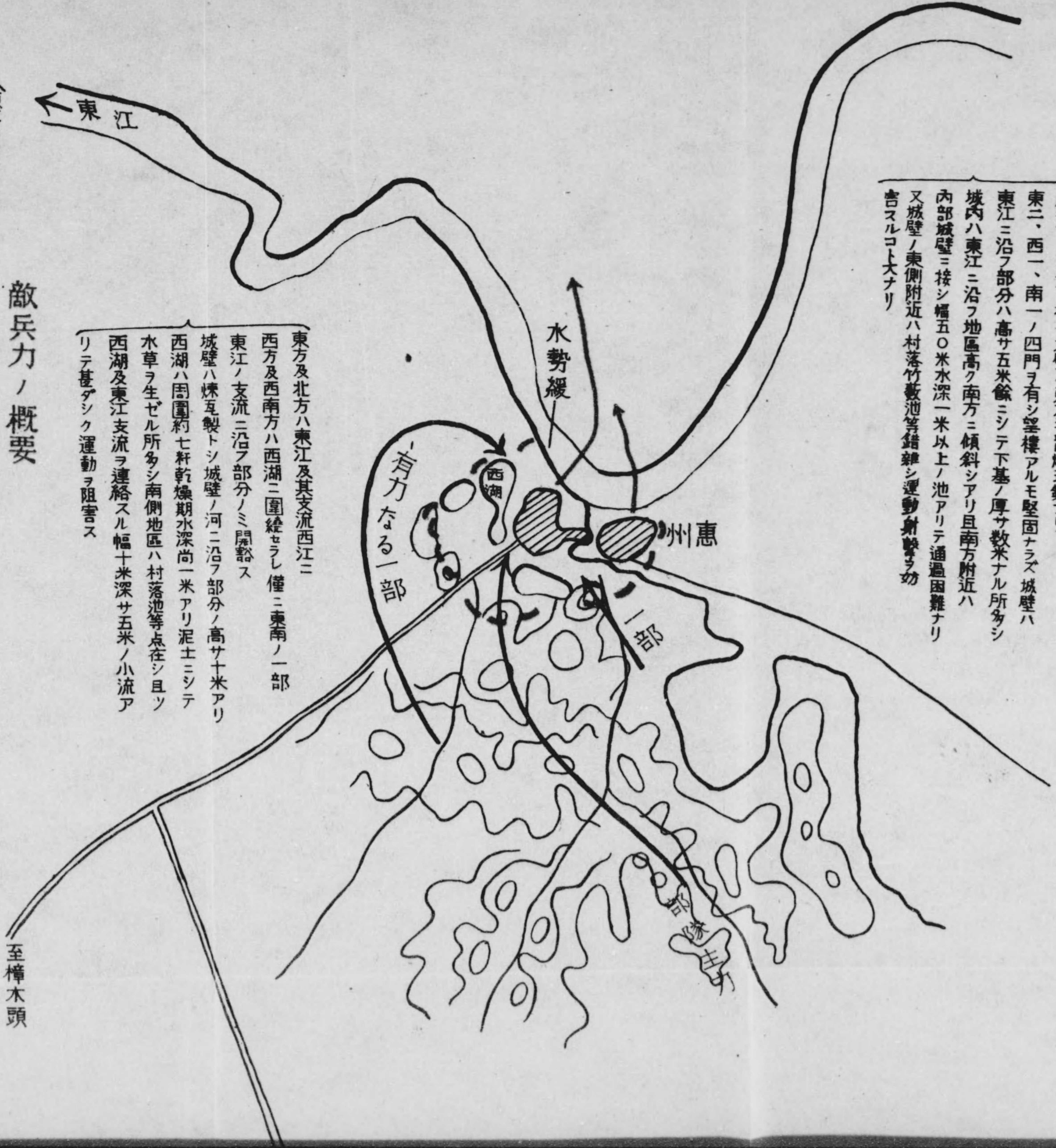
東方及北方ハ東江及其支流西江ニ西方及西南方ハ西湖ニ圍繞セラレ僅ニ東南ノ一部東江ノ支流ニ沿フ部分ノミ開豁ス
 城壁ハ煉瓦製トシ城壁ノ河ニ沿フ部分ノ高サ十米アリ西湖ハ周圍約七軒乾燥期水深尚一米アリ泥土ニシテ水草ヲ生ゼル所多シ南側地區ハ村落池等点在シ且ツ西湖及東江支流ヲ連絡スル幅十米深サ五米ノ小流アリテ甚ダシク運動ヲ阻害ス

敵兵力ノ概要

守備約五千人大小ノ火炮數十門ヲ有シ百有餘ノトーチカ陣地ヲ構（ベトン製）シ之ニヨリ皇軍ニ抵抗セリ



（東江ハ舟筏ヲ用フルノ外徒渉ヲ許サズ）



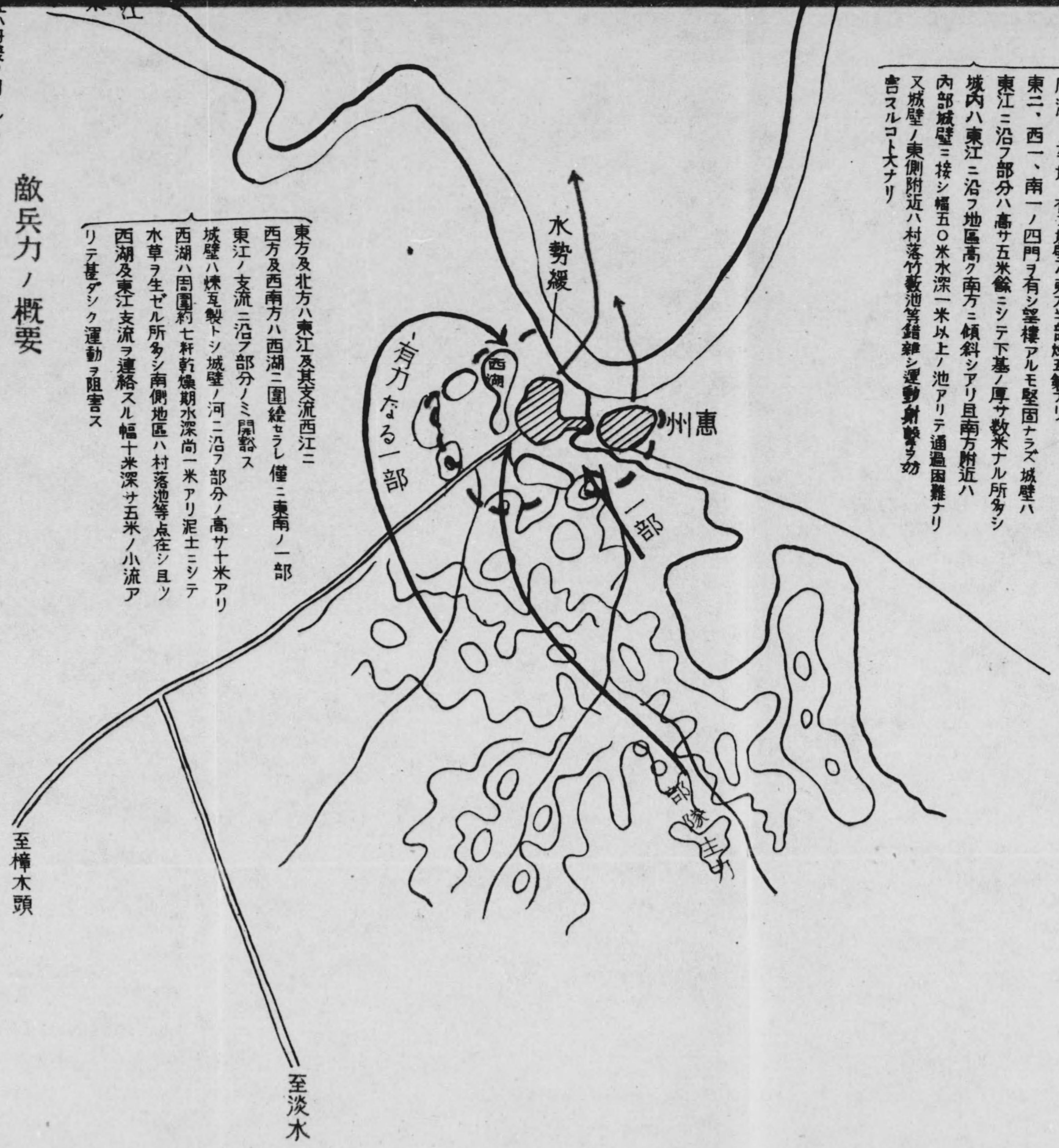
〇〇部隊ハ十月十三日夕刻ヨリ攻撃ニ着手シ同月十四日朝迄ニ之ヲ攻略セリ
 敵ハ殆ド潰滅的打撃ヲ受ケ數十門ノ火炮及自動貨車等ヲ遺棄シ一部辛ウジテ東江ヲ渡河シ北方ニ退却セリ

北ハ東江ニ西及南ハ東江支流西江ニ圍マレ東方ハ廣瀾ナル平地ヲ有ス城壁ハ東方半部煉瓦製ナリ
 東ニ、西一、南一ノ四門ヲ有シ望樓アルモ堅固ナラズ城壁ハ東江ニ沿フ部分ハ高サ五米餘ニシテ下基ノ厚サ數米ナル所多シ
 城内ハ東江ニ沿フ地區高ク南方ニ傾斜シアリ且南方附近ハ内部城壁ニ接シ幅五〇米水深一米以上ノ池アリテ通過困難ナリ
 又城壁ノ東側附近ハ村落竹藪池等錯雜シ運動射撃ヲ妨害マルコト大ナリ

東方及北方ハ東江及其支流西江ニ西方及南方ハ西湖ニ圍テラレ僅ニ東南ノ一部東江ノ支流ニ沿フ部分ノミ開豁ス
 城壁ハ煉瓦製トシ城壁ノ河ニ沿フ部分ノ高サ十米アリ西湖ハ周圍約七軒乾燥期水深尚一米アリ泥土ニシテ水草ヲ生ゼル所多シ南側地區ハ村落池等点在シ且ツ西湖及東江支流ヲ連絡スル幅十米深サ五米ノ小流アリテ甚ダシク運動ヲ阻害ス

敵兵力ノ概要

守備約五千人大小ノ火炮數十門ヲ有シ百有餘ノトーチカ陣地ヲ構築
 (バトン製)シ之ニヨリ皇軍ニ抵抗セリ

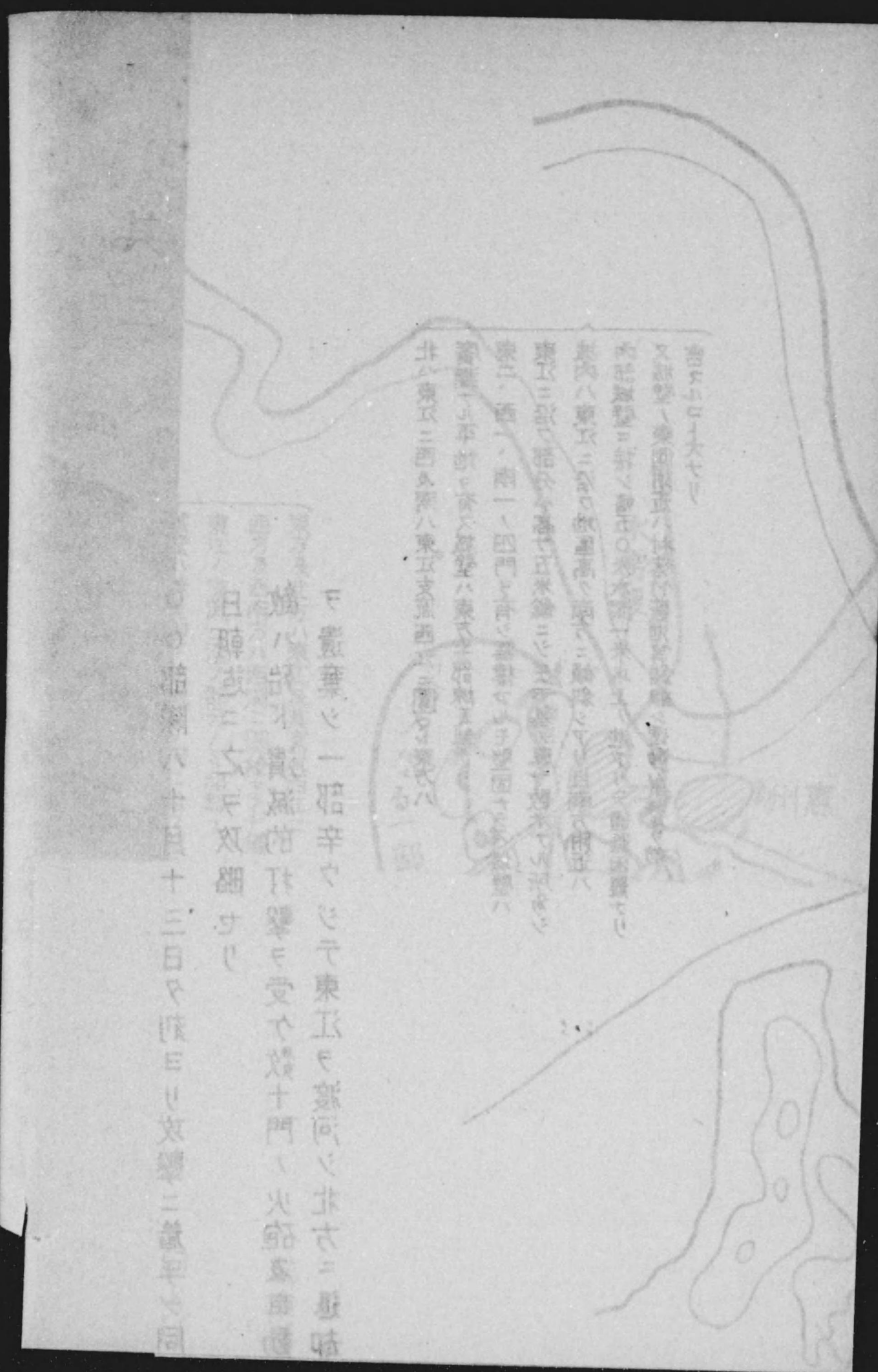


江ハ舟筏ヲ用フルノ便ヲ許サズ

りと述べあるものに該當す。當時のバイアス灣上陸部隊として東江右岸に軍主力を速に進出せしむることが最も望まじきことなるを以て、寸刻を争ひ攻撃を急ぎたるなり。夜襲を行ふ場合が多く時間を遷延することを許さざる事情あることを思はざるべからず。彼の日露戦争時第一軍中の第二師團が弓張嶺を夜襲したる場合も亦滿洲軍全般の關係よりして遼陽攻撃の日時定まり之に應じて第一軍に進出する地域を其日限定要求せられ、之に従ひ第一軍司令官として第二、第十二師團に對し明治三十七年八月二十五日夜遊撃溝嶺附近及大寒坡嶺及弓張嶺附近の攻撃を實施せしめらるゝに至りたるなり。

扱て昭和十三年十月十三日夕刻惠州東南側に近接したる部隊は、速に東江右岸地區に進出する爲鋭意攻撃準備に就き、薄暮より攻撃を開始せり。前日來の酷熱は同夕刻よりして大雷雨を喚び起し土砂降りの豪雨と化したなり。攻撃部隊はこの天候の激變に何の躊躇することなく寧ろ之を以て攻撃決行の好機となし、敵警戒部隊を驅逐し障礙を越え彈雨を冒して敵主陣地に肉迫せり。

惠州城周圍の陣地中に構築せるトーチカは比較的大規模のもの多く(其數百有餘に及ぶ)、大なるものは數十人を收容するものあり。當時攻撃部隊の有する火砲は山砲聯隊の一部のみなり。



支那人は兩に濡るることを極度に嫌ふ國民にして、軍隊に於ても其裝備中に雨傘の携帶品あることを目撃したることあり。恰も當夜の篠衝く豪雨は此等守備兵に非常なる苦痛を與へたるものの如く、トーチカ掩蔽部以外の陣地配備に就きある守備兵は自然に警戒を怠り不知不識の間に雨を避けトーチカ内に這入るに至れり。而も地軸を裂くが如き雷鳴と閃光、稻妻とは皇軍の砲兵射撃と相合し日本軍の大砲兵部隊の集中射撃と看做され、敵の心膽を寒からしめたり。攻撃部隊は敵の守備薄弱なる隙を求めて夜暗と雷鳴と豪雨とに乗じ恰も織田信長が桶狭間の今川軍を破りたる故智に倣ひ、只管敵のトーチカを自由に包圍挾撃し流石に堅壘鐵壁を以て頼みし惠州城も十四日拂曉には皇軍の占領する所となりたり。

戦果の概要に就ては要圖註記に記述し置きたるが如し。

本戦圖に於て得たる教訓多々あるも就中其の主要なりと思惟するものを擧ぐれば左の如し。

- 一、敵に時間の餘裕を與へざりしこと
- 二、天候氣象の異變を巧みに利用せしこと
- 三、トーチカ陣地は單にトーチカのみ孤立したる場合には案外抵抗力弱きものなること
- 四、狀況特に之を要する場合各級指揮官は縦ひ晝間十分なる準備を爲さざる場合に於ても尙

諸種の手段を盡して攻撃を遂行せざるべからざるのみならず又全般の狀況を達觀し敢行すれば成功の見込あること

- 五、作戰要務令第五十二に示しある突入すべき地點は「敵陣地の間隙を突破し敵を背後より攻撃するを可とすることあり」を明瞭に實地體驗したること

尙ほ附加すれば日露戦争及歐洲大戰に於ける露軍の夜間防禦の戦例により之を觀るに（帝政露軍と共産赤軍とは個々の觀測に於ては多少の差異あるを思はざるべからず）

- 1、堅確なる意志を以て任務に殫るゝの風乏し
- 2、夜間防禦に失敗せる例よりも防禦を完うせし例少なし
- 3、露軍の警戒は相當嚴重なるものあり従つて奇襲に成功せる例少なし
- 4、日本軍夜間攻撃成功の例には時恰も露軍に於ては退却の意志ありし場合少なからず
- 5、一般にシベリア歩兵聯隊は歐露のものに比し頑強なる防禦成績を残せり
- 6、築城施設を有する露軍は甚だ頑強なりしも然らざるものは豫想外に脆弱なり
- 7、日本軍の夜襲に對し第一回にて敗走せる例少なきも第二回以後は第一回到恐怖心を起し案外脆く敗走したる傾向あり

- 8、夜間隣接部隊及後方部隊に依頼するの觀念強く他の敗退を知るや案外脆く抵抗を斷念す
- 9、露軍の退却は命令に依らず守地を放棄せる例多し
- 10、歐洲大戰に於ける露軍の夜間行動

夜間を利用すること我國と大差なし即ち夜間を利用して近接し機動し攻撃す又晝間攻撃に續行して行ふ例多し特に小部隊を以てする企圖前哨戦に多し

又歐洲大戰に於ては拂曉の遭遇戦を惹起せり大部隊の夜間攻撃の例僅少なると概ね失敗せり夜間退却に巧みなり之に反し相手軍の夜間離脱を知ること拙なり

更に又準備なき夜襲の例として大正三、四年戦役に於ける浮山高地に對する歩兵第四十六聯隊第四中隊の實施せる夜襲を述べん。

一、一般の狀況

獨立第十八師團は、九月二十六日より二十七日朝に互る戦鬪により樓山後南方高地より石門山を経て北龍口に互る陣地を占領せる敵を撃退し、次で李村南方高地附近に於ける敵の抵抗を排除し、二十七日午後師團の第一線は概ね閭家附近より河南山李村南方高地を経て金家嶺に互る線に進出せり

堀内支隊は二十七日敵を追撃し主力を以て石眠頭山に、左側衛を以て金家嶺に向ひしが午前十一時頃より正午頃に互り第一線を以て右兩地附近を占領し孤山、浮山の線に在る敵情を偵察す。當時支隊は歩兵第四十六聯隊第四中隊を以て犬嶺山東南麓を、第一大隊(第二、四中隊欠)を以て小埠東方石眠頭山を、左側衛の主力たる歩兵第四十六聯隊第三大隊、同聯隊機關銃一小隊及獨立工兵第四大隊第一中隊の一小隊を以て金家嶺西側高地線を、又第十一中隊の一小隊を以て山東頭西方高地を占領し、山砲兵中隊は宋家下庄南側に陣地を占領し、支隊長は歩兵第四十六聯隊第二中隊及第二大隊、機關銃隊と共に劉家下庄附近に位置す(附圖第一參照)。

(附言) 第四中隊は二十七日朝出發に方り支隊命令に基く歩兵第四十六聯隊長の命令にて犬嶺山高地に派遣し歩兵第五十六聯隊と連絡し小埠頭に前進し大隊に合すべき任務を有す。

又支隊の前衛は浮山山頂に敵の展望哨あるを目撃しつゝ、前進し午前十一時頃石眠頭山を占領せり。

二十七日午後迄に知り得たる敵情左の如し。

僅少な敵の歩兵は水清溝東北方標高65高地、黃家塋東方稜線、南韓家庄西南高地、麥島を占領し浮山山頂には監視兵の如きものを見る

二、地形及天候の概要

孤山より浮山に互る敵陣地は、李村河孟以南に於て最も制高の利を有し遠く李村河孟一帯の地を瞰制す。

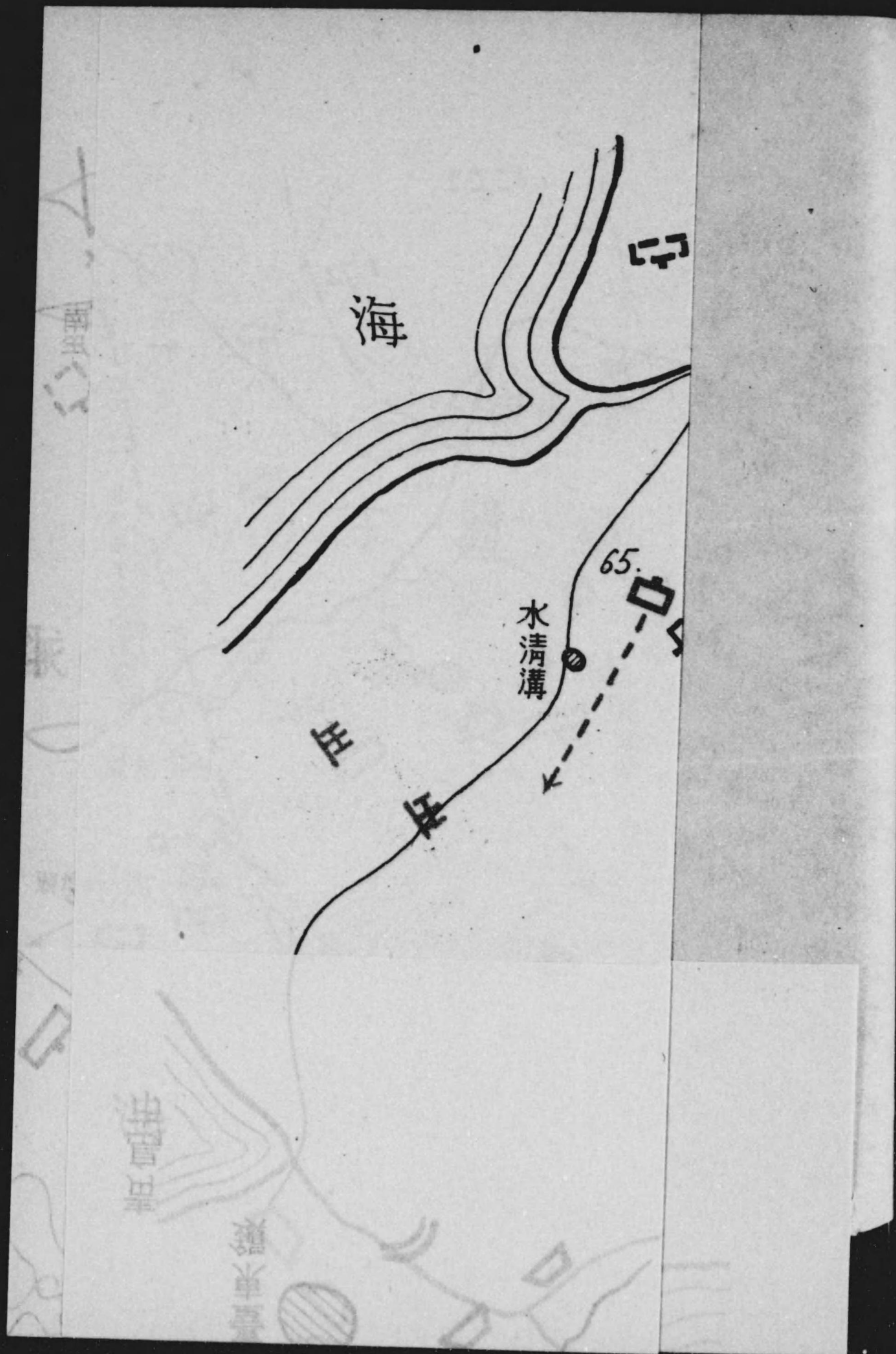
殊に浮山は此附近に於ける制高地點なるを以て東は嶗山南麓より北石門山系に至る間一眸の下に在り、従つて該地點を占領すれば恰も氣球上において見る如く展望監視の爲最も便利なり。

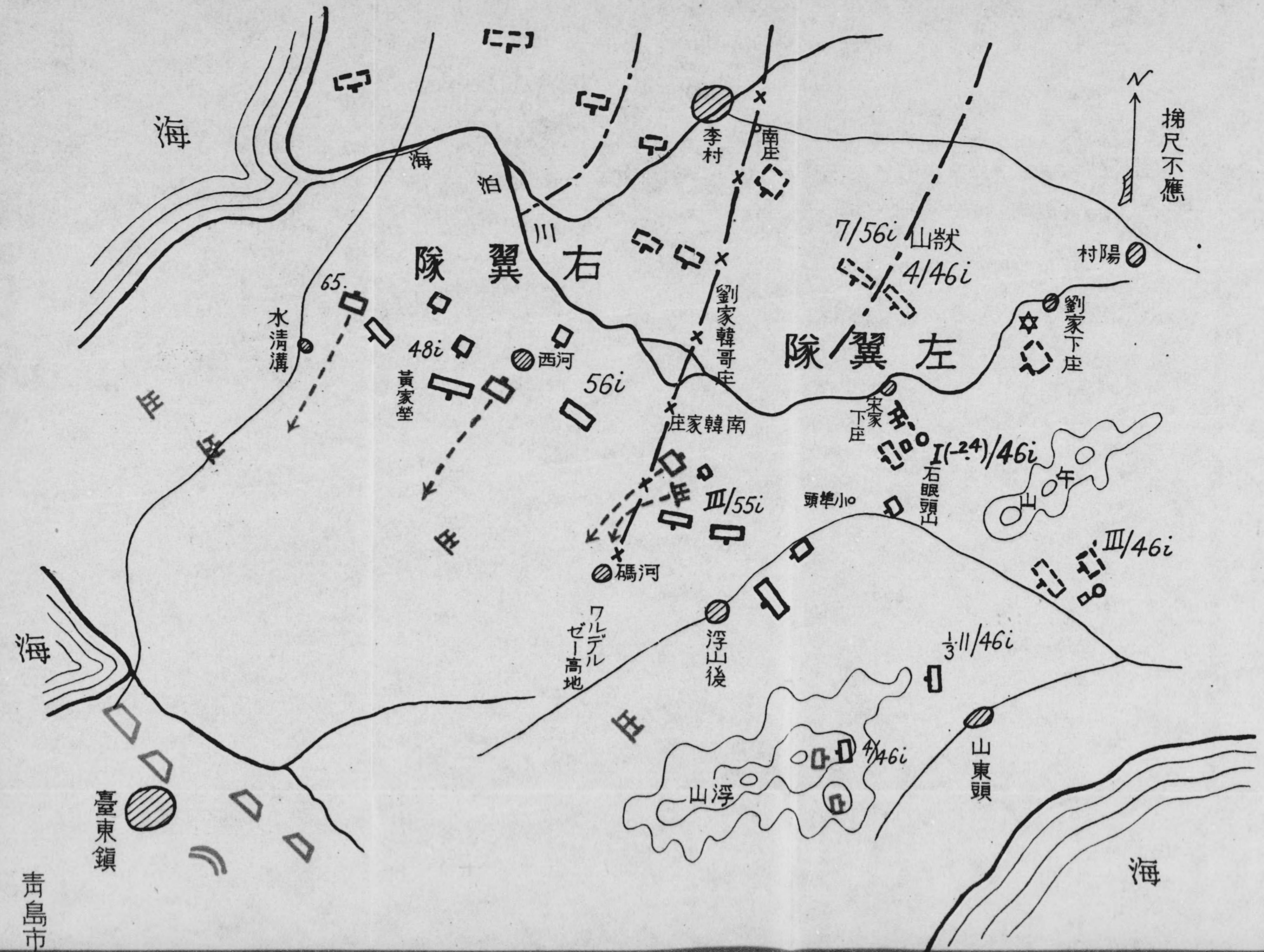
一般地形の關係右の如く二十七日に於ける諸隊の位置よりする運動は常に敵眼、敵火に暴露し、浮山山頂にある敵の監視兵の爲には後方部隊の運動に至る迄暴露せざるを得ず。然れども多數の地隙縦横に存在せるを以て攻撃前進に際しては之を利用し損害を減少し敵に接近し得るの便利あり。

此附近一帯の高地は浮山山頂の一部を除く外概して歩兵の攀登を許し、地質一般に砂礫を含有する粘土質にして、堅固なるのみならず、岩石多く工事は容易なりと謂ふを得ず。河川は河底砂質にして平時水量極めて少なく、従つて降雨期を除きては用兵上何等の價値なし。

二十七日午後天候不良の徴あり降雨到らんとせしも直ちに回復せり。

二十七日夜より二十八日朝に互りて小雨ありしも午前六時頃より空晴れ道路、畑地等は軍隊の





青島市



行動に支障を来さざりき。

三、戦戦経過の概要

師團長は諸情報に依り青島要塞陸正面の本防禦線は海泊川左岸地區に設備せられあることを知る。而して孤山より浮山に互る線は一般の關係上多少工事を實施し前進陣地として利用するは敵として當然なすべきこと及之に對し輕舉なる行動に出づるは不覺を取るの虞ありとし、種々研究の結果本夜暗を利用し直ちに敵に接近するに決し、午後五時三十分下工埠頭に於て左の要旨の命令を下達せり。

- 一、敵の砲兵は尙ほ水清溝東北高地及劉韓哥南方獨立標高89高地に在るもの如し
- 二、師團は明二十八日拂曉概ね沙嶺庄、小水清溝、劉家韓哥南方高地より大埠頭に互る線に進出し爾後の攻撃を準備せんとす
- 三、堀内支隊は左翼隊となり明拂曉主力を以て右翼隊に連繫し左翼大埠頭に互る線を確實に占領し一部を以て浮山を占領し爾後確實に占領地點に占位し敵情、地形の偵察を爲すべし左翼隊長(堀内支隊長)は午後六時前記師團命令を受領するや、午後八時劉家下庄に於て左の要旨の命令を下せり。

一、左翼隊は明二十八日河碼、南庄を連ぬる線以東の地區に展開し河碼西側高地より其以東の敵に向ひ劉家韓哥庄南方約二軒標高八九高地附近より大埠頭南側浮山の高地脚に互り展開し攻撃を準備せんとす

二、第一線諸隊は午前二時各、其占領地區に特に工事を完全にし其占領を確實ならしむべし
三、第一線の前進前我決死隊(佐藤中隊)は夜襲を以て浮山高地に於ける敵を驅逐し之を占領すべし

而して占領確實なるに至れば燎火を揚ぐべし

工兵小隊長の指揮する下士以下十名を附す

歩兵第四十六聯隊第四中隊長(佐藤嘉平次大尉)は、此日師團主力と連絡の爲め犬嶺山附近に到り、既に同地に在りし歩兵第五十六聯隊第七中隊と連絡し、午後三時董家下庄に歸還せり。然れども支隊長は今直ちに大隊の位置に復歸せしめんには無益の損害を蒙るの虞ありとなし、日没を待つて大隊に復歸すべきを命ず。依つて第四中隊は日没後董家下庄を發し午後七時三十分大隊の位置に到着せり(日没後行程約二千米)。

(註) 當時第一大隊は石眠頭山に在り浮山山頂より約二千米を隔つ。

(附言) 第四中隊が午後三時以後日没まで停止せる董家下庄は左翼隊長の在りし劉家下庄と僅かに張村河を隔てるのみ其距離僅かに千米に足らず。

第四中隊長は大隊の位置に歸還し夜に入り左翼隊長より左の命令を受けたり。

佐藤大尉は決死隊長となり其中隊及工兵一分隊を指揮し夜襲を以て午前二時迄に浮山高地を占領し占領確實なるに至らば燎火を揚ぐべし

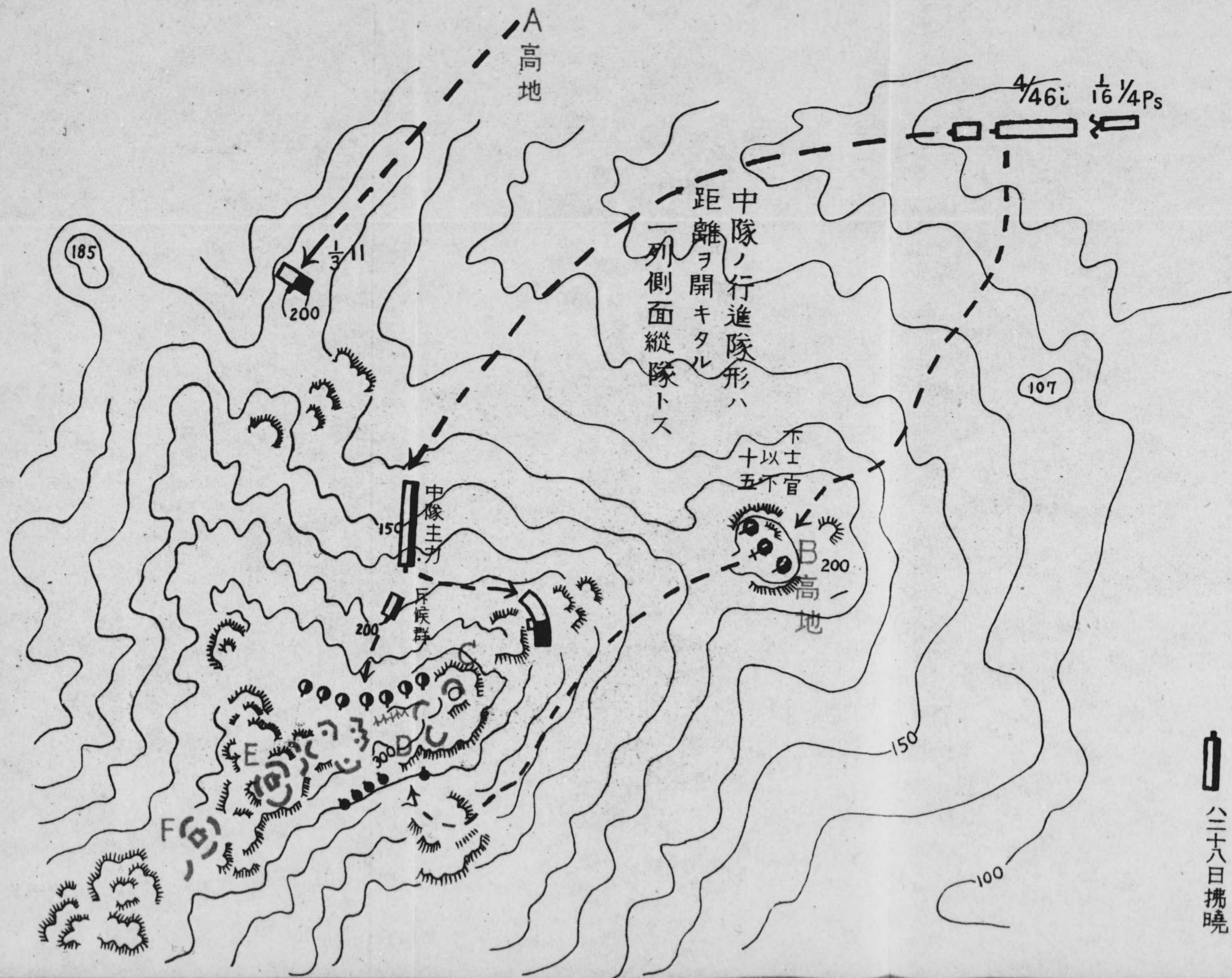
(附言) 此日第三大隊は既に金家嶺を占領し第十一中隊の一小隊は浮山山麓(敵前約千六百米)を占領せり。又工兵小隊は第三大隊と共に金家嶺に在り其中隊主力は今尙嶗山西麓路内に停止す。

浮山占領の任務を有する第四中隊は、特に屬せられたる工兵一分隊(工兵中尉賀川齊之を指揮す)の到着を待ち二十八日午前零時三十七分露營地たる石眠頭山の東麓凹地を出發し、金家嶺に通ずる道路に出で、曩に浮山東北麓標高一〇二・五附近を占領しありし第十一中隊の第二小隊(長中尉中山殿)の位置に到れり。此夜月なく四面暗黒加ふるに中隊は此日夕露營地に到着し地形を熟知するの餘裕なかりし爲行進大に遅延し、午前三時此地に到着せり(行程約三千五百米に約二時間半を要せり)。

同地に於て中隊長は該小隊より昨二十七日(E)高地に七、八名の敵の監視兵を見たるのみなることを聞きし、同小隊より二名の嚮導兵を伴ひ尙中隊よりは下士官以下三十名の斥候を選抜し、内十名を中隊の前方に行進せしめ、中隊長は自ら残餘の二十名を指揮し中隊の主力は先任小隊長の指揮を以て其後方二、三十米に在りて前進し、又工兵分隊は中隊の後尾に續行せり(附圖第二參照)。

中隊は標高一〇二・五高地より南方谷地に降り爾後(E)高地より(A)高地に走る稜線の南方谷地に沿ひ(E)高地を目標として前進せり。然るに該高地は全山岩石より成り、或は斷崖絶壁を爲し或は磊々たる岩石となり斜面亦頗る急峻辛うじて距離を延したる一列側面縱隊を以て行進せしが、進路險難加ふるに夜暗の爲連絡を斷つこと一再にして止まらず。中隊は斯くの如き状態を以て山脚を前進中前三時半頃俄然右方より十數發の急射撃を受く。然れども四圍暗黒敵の所在を確かむるを得ず。之より先き中隊長は下士官の率ゆる十五名の斥候を(A)高地東南高地脚より(B)高地に派遣せり。該斥候は勇敢に斷崖を攀登し午前四時三十分頃目的地を占領し敵に就き異常なき旨の報告を爲せり。依つて中隊長は更に同斥候を西南方敵の背面より(D)鞍部に向つて前進すべきを命ぜり。此等の報告命令は直接音聲を以て傳達せり(距離約四百米)。





A高地

$\frac{4}{46i}$ $\frac{1}{16}\frac{1}{4}Ps$

中隊ノ行進隊形ハ
距離ヲ開キタル
一列側面縦隊トス

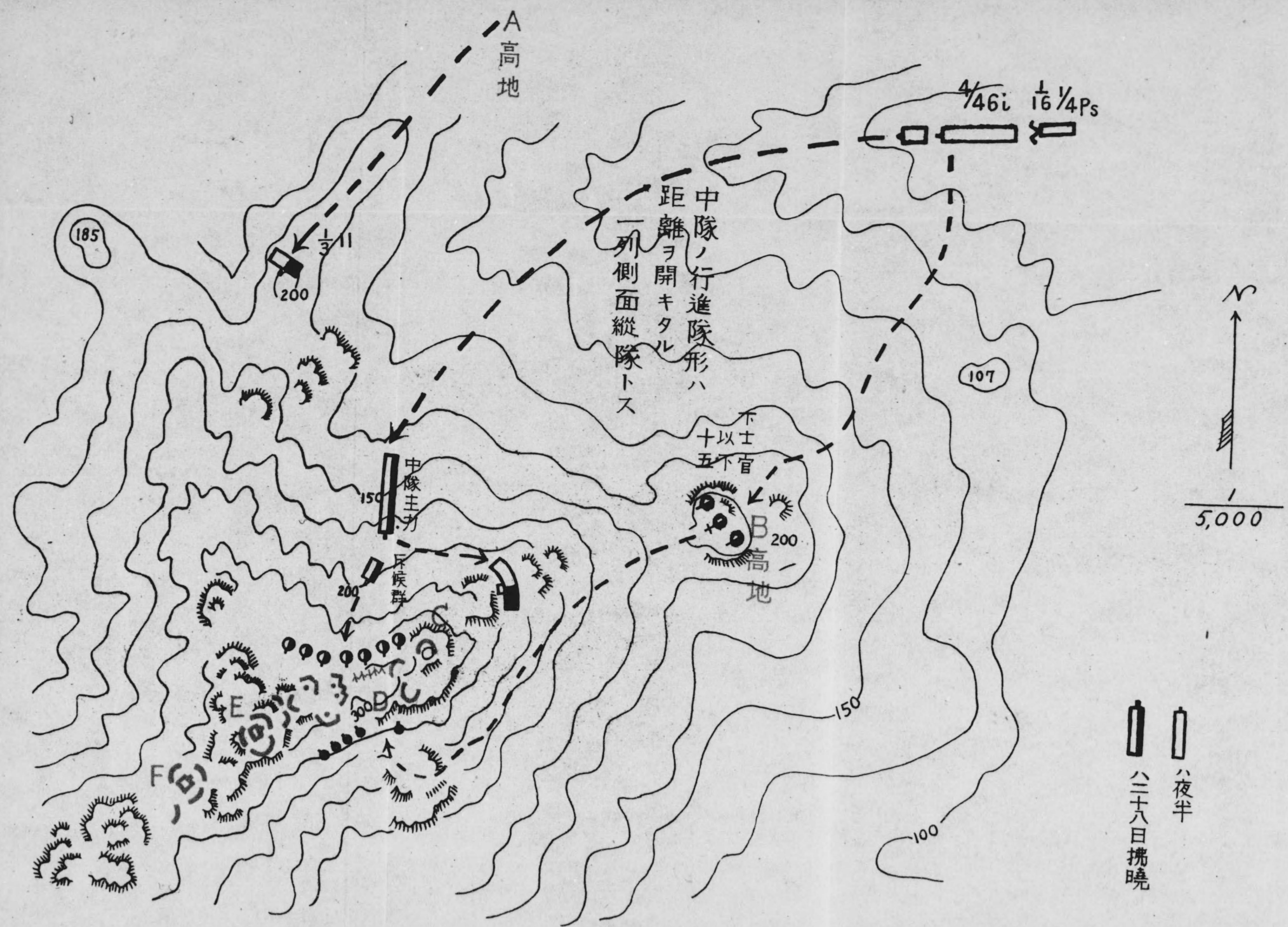
下士官
十以五

B高地

中隊主力
斥候群



〇 八夜半
□ 二十六日拂曉



中隊は尙前進を續行し拂曉前其先頭を以て(C)高地北側斜面に達するや、高地より再び敵の急射撃を受く。時正に午前五時天光尙微にして二、三十米を通視し得るのみ。敵は射撃を續行し敵彈頻りに中隊の位置に飛來せしも敵影は之を認むる能はず。此間我に二、三の損害あり。中隊は尙前進を續行し遙かなる岩上に二、三の敵影を認めたるを以て中隊長は直ちに先頭に在りし一部の兵に射撃を命じ他は前進を續行せり。當時認めたる敵影は僅かに二、三に過ぎざりしも飛來する彈數より判斷するに銃數二、三十を下らざるもの如し。

斯くの如き情況に在りて中隊の一部は敵と射撃を交換中午前五時二十分頃中隊長は最前線に在りて兩足拇趾並左大腿に負傷せしも尙ほ屈せず大聲叱呼部下を激勵し前進を續行せしが、敵前約三十米に於て左腹部を貫通せられ茲に戦死を遂ぐるに至れり。此時岡中尉中隊長の後方二十米にて中隊主力の先頭に在りて前進せしが、直ちに代りて中隊を指揮し部下を督勵して猛進せしが、敵前約四十米に於て敵彈の爲斃れ、小隊長中尉瀬戸正秀代りて中隊の指揮を執り攻撃動作を繼續せり。時に午前五時三十分天全く明く。當時中隊は近きは敵前十四、五米に達したるも敵との間には殆ど垂直の岩壁ありて突撃を決行すること能はず。而も敵火益々熾烈にして前進漸く困難ならんとせり。此時曩に(B)高地より(D)鞍部方面に迂回せしめたる下士官斥候



は(E)高地南方に進出し、斥候の一兵は岩壁を攀ぢ將に敵陣に突入せんとせしも負傷して果さず、斥候長奮進せしも敵の投下せる爆彈の爲戦死を遂げたり。時恰も曩に二十七日師團に連絡の爲派遣せし小隊長(見習士官近藤玉衛)來り會し爾後斥候を指揮して攻撃を續行せり。

斯くの如くして正面及背面よりの攻撃頗る困難なる状況を呈せしが、中隊長代理は更に攻撃進捗を圖らんが爲中隊の主力を(C)高地の東側に誘導し、同方面より攀登を試みんとせしが、是亦行動困難にして攻撃の進捗意の如くならず。此間勇敢なる下士官兵は突屹せる岩石を攀ぢ一部の敵を瞰制する位置に到り多少の損害を與へたり。

即ち中隊の曹長は午前五時四十分頃兵三を率ゐる装具を脱し(C)高地に攀登し國旗を振り中隊及友軍に信號し、敵に向つて射撃せり(國旗を振りて信號せしを見て左翼隊長は浮山を占領せしものなりと判断せり)。而して中隊は唯一、二名宛射撃位置を求めて狙撃を行はしむるに過ぎず他は岩石を利用し敵弾を避けつゝ待機の姿勢に在らしめたり。従つて當時射撃に任じたるものは約一小隊の兵力に過ぎざりき。是より先き第十一中隊第二小隊は第四中隊に協力すべく拂曉後(A)高地方面に進進し逐次(D)鞍部西北方より敵の側面に迫り、第四中隊と協力して攻撃を開始し、午前十時頃(E)高地北方約七百米の地點に進出し同高地の敵に對し射撃せしと雖も、

爾後の前進は土地斷絶せし爲め大なる發展を見ざりき。

(E)高地の敵は如上三方向よりする我射撃の爲漸次其頭部を現はさるに至り、午前十一時半頃(E)高地の敵先づ白旗を掲げて降伏の意を表せり。依つて第四中隊は同高地に進進し下士官以下十五名を俘虜とせり。然るに(F)鞍部に在りし敵は尙我に抵抗せんとせしも幾許もなく是亦降伏し、第十一中隊の一小隊も敵の降伏を見るや直ちに(E)高地の一角を占領せり。

斯くの如くして正午頃全く浮山一帯の高地を占領し將校二、下士官以下五十八を俘虜とせり。我損害第四中隊に將校、下士、兵二十二を出せり。

四、獨逸軍の行動

獨逸軍は九月十九日少尉ベスレルに下士官八、兵五十を附し浮山高地に派遣し、命ずるに日本軍を監視し且獨逸軍の砲火を観測すべき任務を以てす。同小隊は二十日浮山に到着し同高地上に五箇の陣地を構築し二十六日に至る間彈藥、糧食及飲料水の運搬に努め、同日迄に彈藥六萬、手榴彈三百、光彈二千と約八日間の水及糧食を蓄ふるに至れり。

九月二十五日監視將校としてグラボン中尉は信號部隊(少尉候補生一、下士官以下六)と共に同地に來れり。是に於て同中尉と小隊長との權限を定むるに小隊長は歩兵の行動に關し指揮權を

有しグラボフ中尉は全監視哨の撤退並萬一降伏すべき場合に當り之を決定するの權を有するものとせり。

二十八日拂曉前、監視哨は夜間浮山の半腹に攀登し來れる日本軍歩兵の射撃を受けて之に應戦し、次で拂曉頃より山背の到る處に日本軍歩兵の分隊及半小隊現出し近く相對して小銃戰を交へたりしが、日本歩兵は浮山最高部の後方に迂回し三方面より攻撃し來り、午前十一時過グラボフ中尉の監視哨は遂に日本軍に降伏せり。當時ベスレル少尉は同監視哨後方陣地に在りて抵抗を持続せんとせしも、今や全く日本軍の爲に包圍せられ如何とも爲し難く、自由退却に關し商議せんことを決意し、日本將校と會見し自由退却を爲さんことを提議せし間、小隊は日本軍の爲に武装を解除せられ遂に俘虜として護送せらるゝに至れり。

此戰鬪間兵二戰死し負傷者を出し下士官一、兵若干は逃れて要塞に歸還し、殘餘は總て俘虜となれり。當時總督府に於て此重要なる觀測所の神速なる陥落を惜み其陥落の原因を判斷して此哨所の有力なるが爲却て日本軍の注意を喚起し、守兵は又其兵力強大にして準備の完全なると陣地の難攻不落なるを自信せしに日本軍の夜間を利用し忽然目前に攀登し來りたるに落膽せしに依るべく、加ふるに五箇の陣地に分離せられて統一指揮に困難なりしものに起因すとせり。

五、戰鬪より得たる教訓

一、支隊が現在地に停止するも將又前進するも我企圖を秘匿し且敵情を偵察する爲浮山高地の占領は極めて緊要にして、支隊長は夙に此點に著意し何等かの腹案を有せしこと察するに難からず。然るに午後六時に於て明拂曉までに一部を以て浮山を占領すべき師團命令に接したる後二時間にして始めて中隊長に命じたるが如き、又第四中隊には日没を待ちて董家下庄を出發し大隊に合すべきを自ら命じたるに拘らず當時浮山に最も離隔しある第四中隊を故らに選定したるが如き、又當時正午頃より已に浮山麓敵前近くを占領せし第十一中隊の一小隊を使用せざりしが如き等、其理由奈邊に存するやを察するに苦しむも、恐らく戰史に現はれざる複雑なる理由存せしならん。

二、仄聞する所に依れば佐藤大尉は劍道の達人にして膽斗の如き人なりしと、或は之が爲特に此中隊を選拔せしものにあらざるか。果して然りとすも尙早く中隊長を招致して自ら直接意圖を授くるを適當とせん。決死隊と命令するに於て特に然り。

此際に於ける支隊長の處置に就き表面觀察を以て判斷すれば、第十一中隊を派遣するを適當とす。然るときは工兵小隊も亦同地に在るを以て出發準備は一層迅速にして攻撃も亦容易な

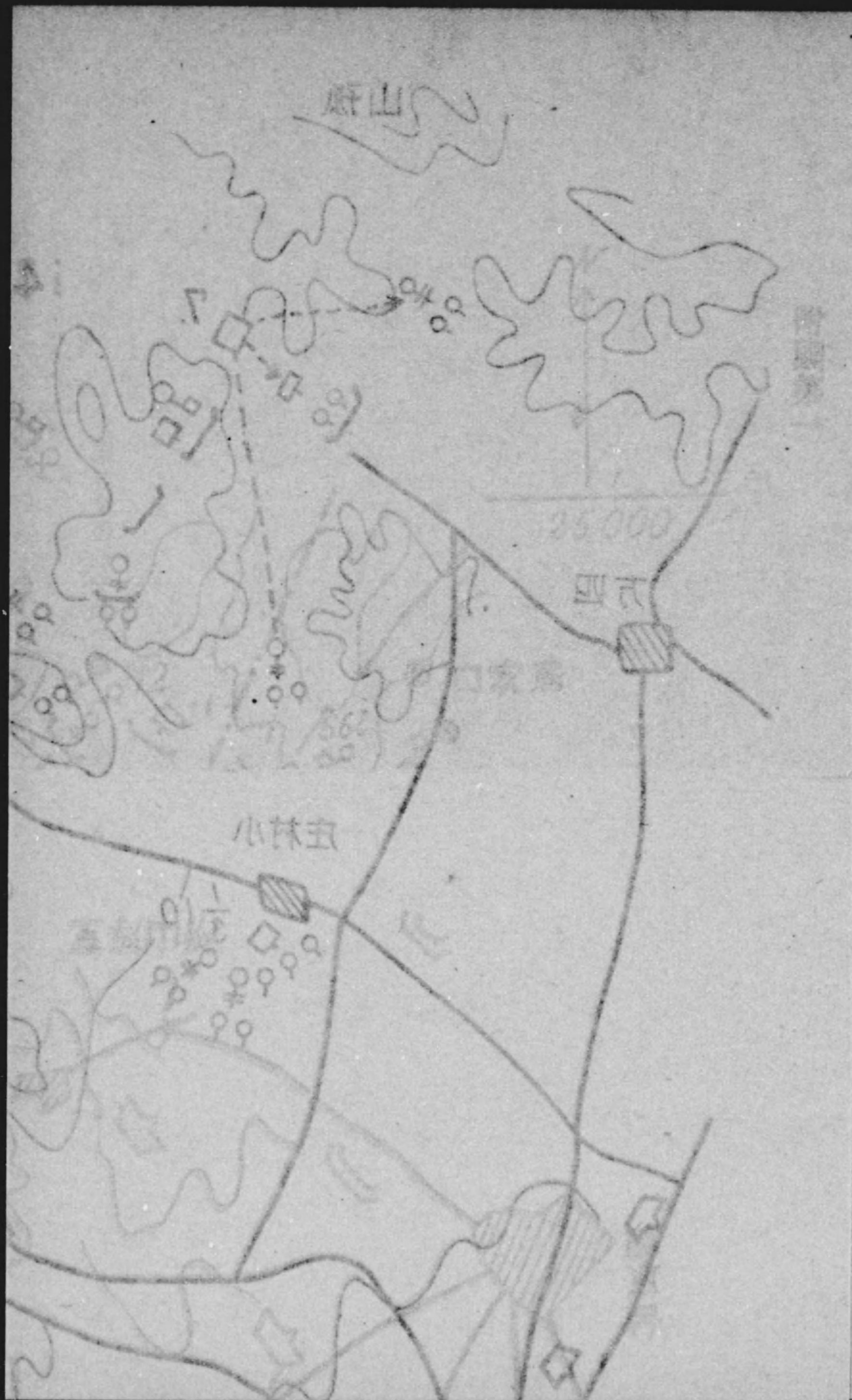
りしならん。

三、要するに斯くの如き場合に於て單に中隊長の適不適のみに依り夜襲部隊を選定し、其中隊の状態を顧みざるが如きは適當と謂ひ難し。

四、命令受領後如何なる準備を爲したるかは不明なるも、午後七時半より十二時迄中隊長は宿營地に在りて休養せしもの如く、此間第十一中隊の一小隊とは連絡を取りし形跡なく、午前三時該小隊の位置に到り初めて敵情を知りたるを以て見れば、恐らく的確なる計畫を樹て得ざりしならん。故に中隊長は命令受領後速に將校を派遣して第十一中隊の一小隊と連絡し敵情、地形を明にすると共に進路を標示することは當時の急務なりしなり。又一方に於て工兵分隊と連絡し且つ其小隊長を招致して計畫に參與せしめ、部隊は速かに出發の準備を爲すを適當とせり。然るに此處置に出でざりしを以て、工兵分隊の來著を待つ爲出發著しく遅延し、且第十一中隊の一小隊の所在に到る爲豫想外の時間を要し、遂に敵前に於て天明となるに至れるは甚だ遺憾なり。由是觀之晝間豫め準備せざる夜間の行動は、縦ひ一中隊と雖も甚だ困難にして錯誤を生じ易く、此局に當る指揮官は縦ひ友軍の所在地を通過するるときと雖も豫め晝間に於て準備し得る如く命令を下すこと必要なり。

五、地形錯雜峻峻なる山頂に於ける小部隊の戦闘部署を單に圖上判斷を以て論ずるは甚だ當を得ず。就中第四中隊は晝間に於て何等準備を爲さず且敵情に就ては七、八名の監視兵あるを知りしのみなりしを以て、今茲に評論するを得ず。唯其結果より論ずれば、已に拂曉に迫れる時機に於ては主力を以てC高地東方稜線に、一部を以てE高地北方稜線に轉進し此に攻撃を準備し勇敢なる下士官、兵若干を輕裝せしめ岩壁を攀登し射撃せば、E高地は三方より包圍せられ尙早く敵の降伏を誘起せしならん。

六、一見攀登困難なる岩石地も敵火の損害なくは多くの時間を要すれば攀登の方法を發見し得べく、之に反し縦ひ峻峻の度少なきときと雖も之に側防火を加ふるときは晝間の攀登殆ど不可能となるに至る。曹長が兵十二と共にC高地に攀登せしは前者に屬すべく、第十一中隊の一小隊が地形斷續前進極めて困難と稱しながらE高地の敵兵降伏するや直ちに其一角を占領せるが如きは後者に屬すべし。



獨逸軍夜襲失敗の例(附圖參照)

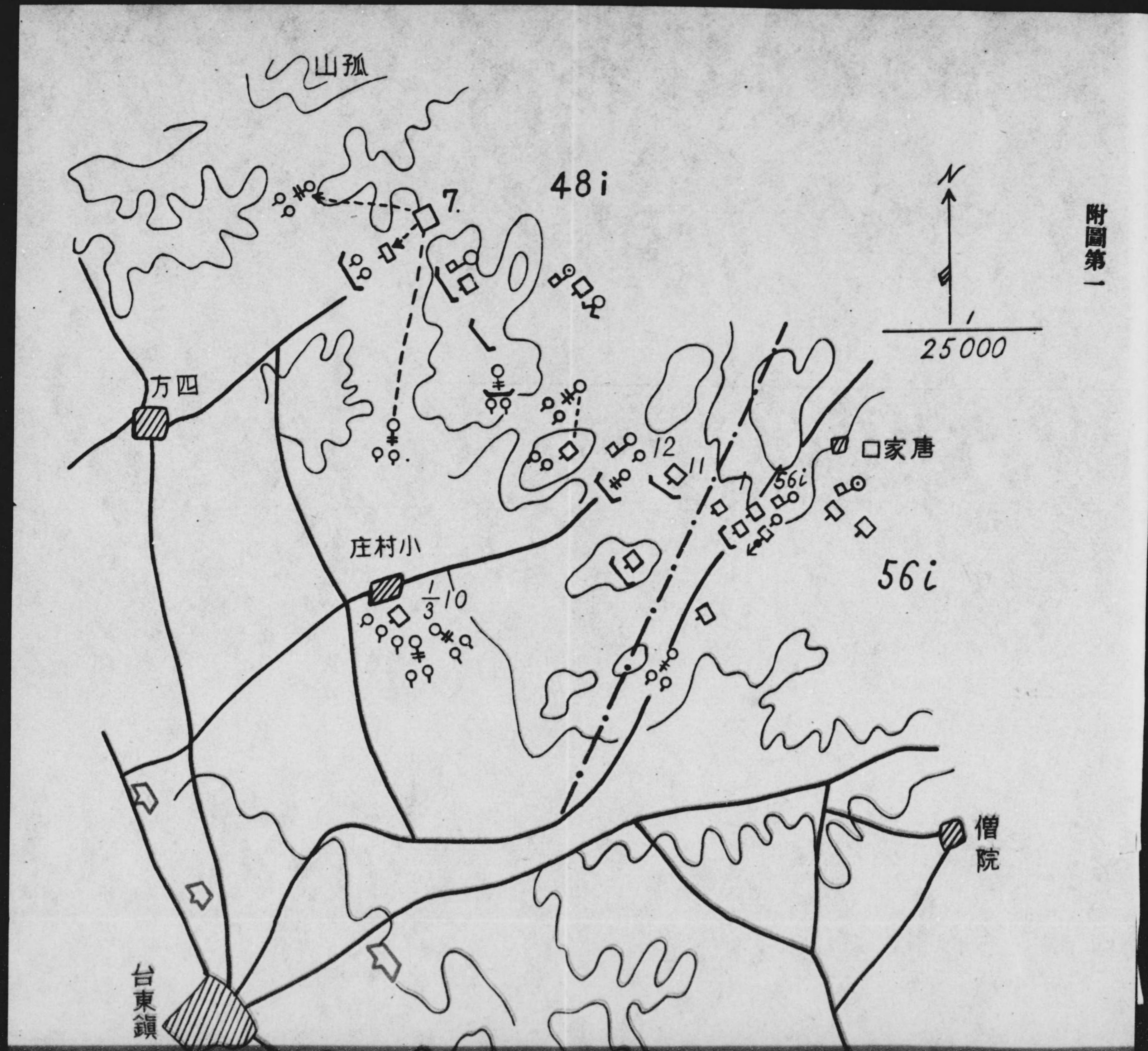
更に大正三、四年戦役に於ける四房山附近歩兵第四十八聯隊第三大隊の戦闘に就て研究せんとす。

一、一般の状況

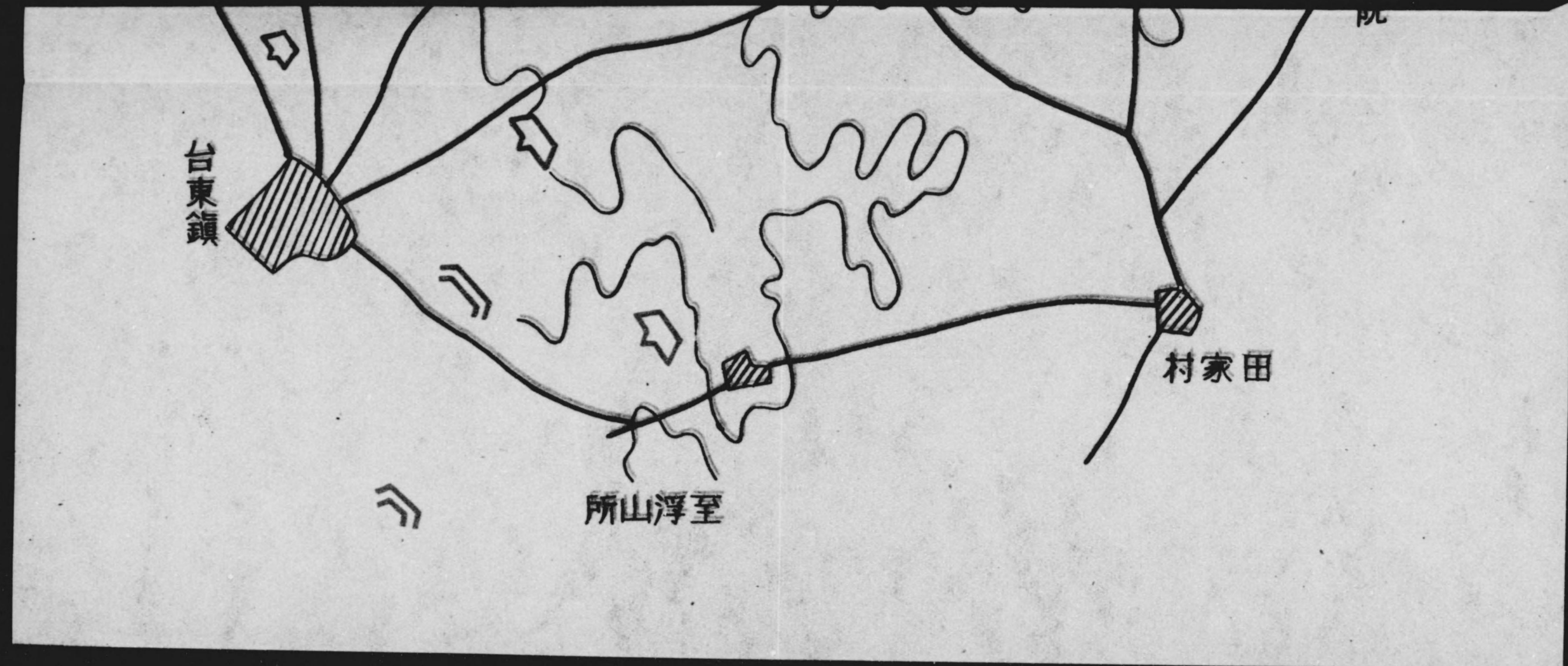
我が青島攻圍軍たる獨立第十八師團は、大正三年九月二十七日より敵の前進陣地たる孤山、浮山の線に在りし敵を攻撃し翌二十八日之を攻略し次で此線に攻圍線を占領し以て敵情、地形を偵察すると同時に本防禦線に對する爾後の攻撃計畫及諸準備を行へり。而して當時第十八師團の右翼隊は歩兵第二十四旅團にして第四十八聯隊右第一線、第五十六聯隊を左第一線とす。歩兵第四十八聯隊左第一線たる第三大隊(第九中隊欠)及其比隣部隊の配置は、附圖第一の如くにして、各隊は各、其陣地を堅固にし十月二日に至る。

前進陣地攻略に際し得たる敵情は次の如し。

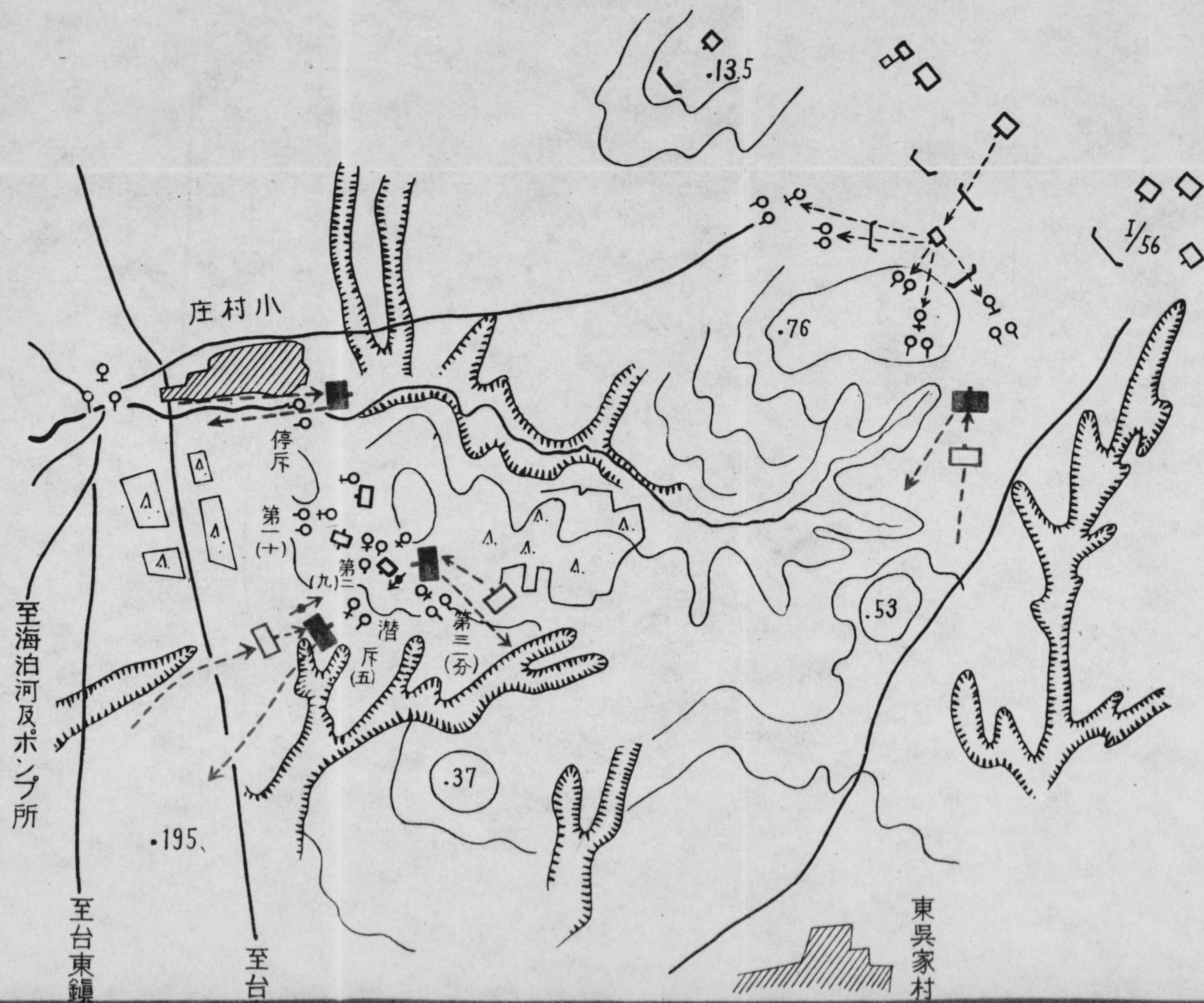
1、二十八日午後二時發左翼隊長の報告に依れば、我に對したる敵の兵力は歩兵約六百、砲二門、機關銃六にして、戦闘後台東鎮方向に約四百、浮山所方向に約二百の敵退却せるを確認すと。



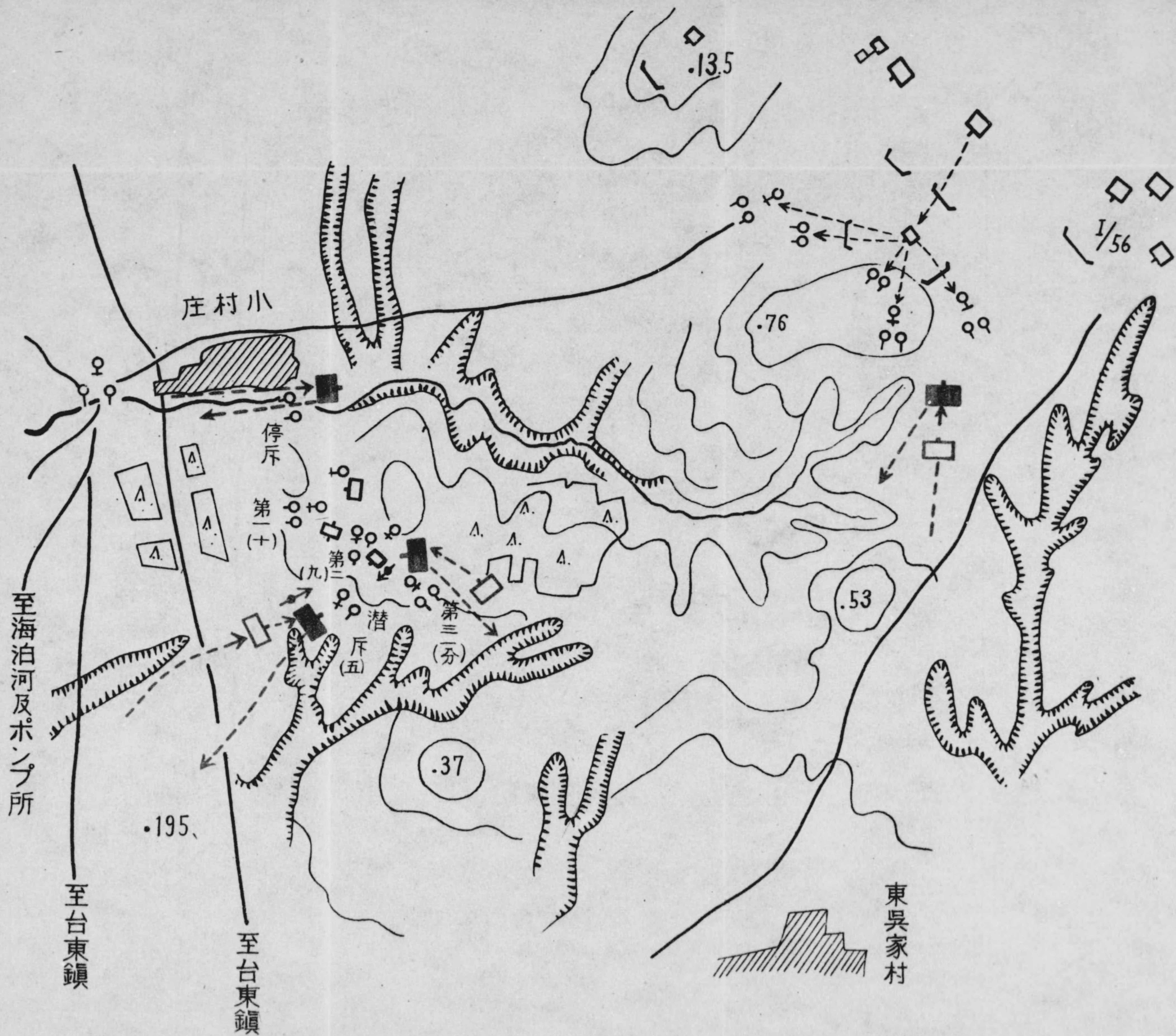
附圖第一



附圖第二



附圖第二



2、第一線に派遣せる師團參謀の報告によれば、右翼隊正面に於て我に對せし敵は約七百ならん、歩兵第四十八聯隊の正面に於ては敵兵三、四百、砲六門の退却せるを見たり、歩兵第五十六聯隊の正面に在りし敵の兵力は未詳なれども第四十八聯隊正面に比し稍、少なきもの如しと。

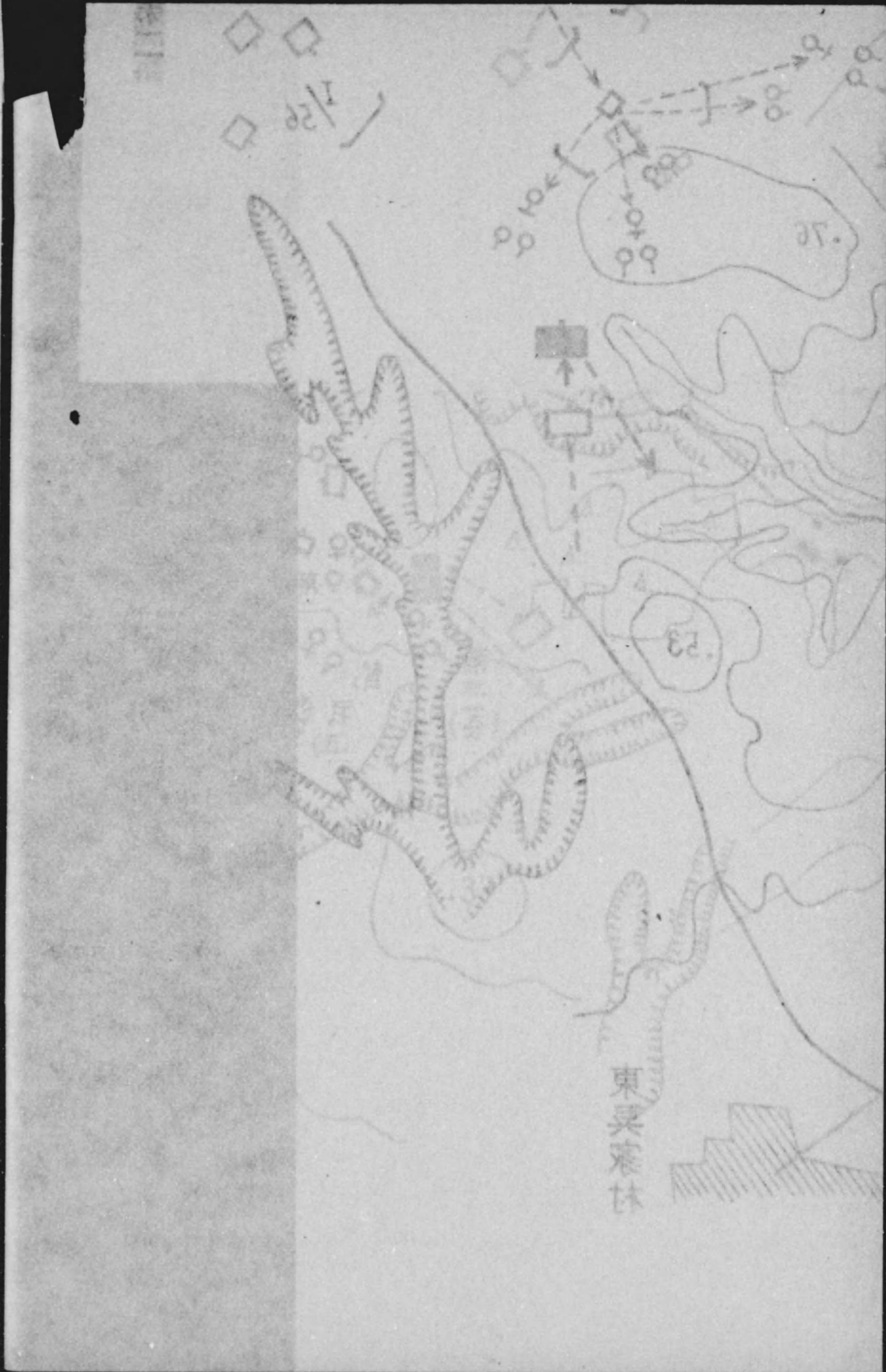
四房山の戰術的價值及前地の地形

攻撃前進の地域中四房山、東吳家村東南方高地、浮山所北方標高五八高地は共に著しく隆起して敵堡壘を瞰制し、我軍に掩蔽の利を與へ、殊に四房山は良好なる攻撃の據點を成形し、其北側斜面は急峻にして軍隊を掩蔽するに適す。森林は四房山、東吳家村の線以北の斜面に點在し其殆んど全部は矮松にして樹高一乃至二米なり。當時草樹繁茂せしも疎にして軍隊の夜間運動をも妨げず。而も掩蔽して接近し得るの利を與ふること尠なからず。

地隙は其幅異なるも共に三、四米を越ゆるもの少しとせず。其兩岸は急峻にして部隊の蔭蔽行動に適す。

二、十月一日及二日の戰況

以上述ぶるが如く、四房山には他の連繫部隊なく殆んど孤立して第十中隊の一小隊が小哨とし



て二十八日以来警戒しありしが、十月一日敵は該地點に海陸兩方面より射撃を加へ且つ屢、斥候を派遣せしが、毎に我小哨の撃退する所となれり。二日午前九時頃敵の歩兵約二十は巧に地隙を利用しつゝ、同小哨(第十中隊第二小隊長尾形春吉)第二下士哨前に現出す。依て下士哨は直ちに之を射撃せしに、敵は廣大なる正面を以て我下士哨に向ひ直進し、我に戦死一、負傷六を出したるも遂に能く之を撃退し、敵は屍體一を遺棄し尙負傷者三、四を出せり。同日午後零時三十分頃に至り再び敵の歩兵約三十は主力を以て小哨の正面より、一部を以て其左側より攻撃し來る。當時第十中隊長(大尉佐藤久太)は小哨の視察中なりしを以て直ちに小哨の主力を其頂界線に散開し射撃を開始せしむ。時に敵の機關銃二は台東鎮より海泊河橋梁を渡り橋梁の東北方約五十米本道上より我に向ひ射撃せしも、我兵の射撃により敵の歩兵散亂して退却し、橋梁監視哨に合したるもの如く、機關銃は午後一時頃迄射撃を續け且つ此間台東鎮東側に在る敵砲約十二門も亦我小哨に向ひ射撃せしが、我に損害なく、次で午後一時十分頃に至るや敵線全部銃砲火を中止す。歩兵第四十八聯隊長(大佐松前正義)は前記の報告に依り本夜或は敵の夜襲を受くることあるべきを豫想し、第三大隊長及機關銃隊長に命ずるに機關銃一小隊を午後六時四房山の小哨に派遣し第十中隊長の指揮を受けしむべきことを以てし、同大隊長は右要旨を中隊長に命令せり。

十月二日午後六時頃四房山小哨長交代の爲第十中隊第三小隊(長見習士官岩切英男)及機關銃小隊長(中尉古賀龍太郎)は中隊長之を指揮し同地に到着せり。第二小隊は日没後を利用し第三小隊と交代を終り、小隊は歸還の途に就き、中隊長は前方に潜伏斥候を派遣せしむ。次で敵は午後八時過より約二時間に互り四房山標高四五高地頂界線に對し猛烈なる砲撃を開始せしが、午後九時十五分に至り漸次四房山の砲撃を中止し隣接地區に射撃を轉移せり。是を以て小哨の位置にありし中隊長は、異狀のあるべきを豫想し、小哨の位置より第二下士哨の前方に出で敵情を視察す。時に歩哨線の前方に出しある潜伏斥候は約二、三百の敵兵第一線に五、六十名を散開し我に向ひ「ボンブ」所東北方高地稜線(橋梁より小哨の位置に至る稜線)を経て前進し來ることを探知したるを以て、直ちに之を報告し且射撃を以て急報せり。此夜満月前十三夜にして天氣晴朗能く二、三百米前方を通視し得たり。小哨及機關銃小隊は中隊長の命に依り四房山標高五八高地東南方約二百米の鞍部上小哨より東吳家村に通ずる歩小徑(此部分は若干凹道を爲し散兵壕に代用し得)上に散開し、敵兵約二百米に近接するを待ちて俄然猛烈なる射撃を加ふ。敵は潜伏斥候の射撃を受くるも其行進を繼續しつゝ、漸次附圖の位置に進出し、逐次其散兵線を其右方に延伸し機關銃を展開して射撃を開始せしを以て、小哨は當面の敵に對し射撃を續行し彼我

の銃聲漸く熾なり。然るに午後九時三十分別に敵の一部隊東吳家村方向より來襲し小哨の左側我第三下士哨の前面附圖の位置に現出せり。第三下士哨は當時交代中にして敵は我五、六米前方を恰も我下士哨のあるを知らざる如く通過するを看取し、下士哨之を猛射するや、敵は混亂して約五、六名の損害を生じたるも其優勢を利用し、損害を顧みず我小哨背後の標高五四高地に進入し、背後より小哨を射撃せり。是に於て小哨は、兩敵の中間に在りて兩面の敵を射撃し相對峙せる敵の彈丸は小哨の頭上を超過し彼是相互に射撃すること約三十分及びぶ。乃ち小隊の左半部及機關銃一挺は後面して背面の敵(標高五四高地の敵)を射撃し、第三下士哨も亦其位置を固持して該敵(標高五四)を射撃したるに、標高五四高地の敵は退却せり。是に於て小哨及機關銃小隊は一意正面の敵に對戦せり。

曩に交代歸還の途に在りし第二小隊は途中銃聲を聞きて來援し、小哨の右翼後より其正面に在る敵の左側に進出し敵を縦射せり。時に午後十時二十分なり。暫くして(小村庄に在りし第七中隊の停止斥候は此敵兵(附圖)台東鎮方向より自動車に乗りて來り此地に下車して四房山方向に前進せんとしたるを以て、斥候は約五百米退却し敵は小村庄方向に前進せしが間もなく退却せり)正面の敵兵亦之に次ぎ退却せり。

敵兵退却を開始するや第十中隊長は直ちに小哨及機關銃小隊を高地敵方斜面に進出せしめ、之を追撃して敵影を見ざるに至り、曩に來援せる同中隊第二小隊を合して同高地上に散兵壕を構築せしめ、敵の恢復攻撃に備へつつ天明を待ちしも異狀なきを以て小哨を殘置し他は本守備線に歸還せしむ。

此夜隣接地區に於ては、四房山に對し來襲せし敵の退却前四房山小哨の左側後に在りし第十一中隊(長大尉西原安次郎)の正面にも機關銃を有する敵歩兵約四、五十東吳家村北方千米附近の高地に來襲せしを以て、同中隊は抵抗線に就きしに敵は間もなく退却せり。又此時歩兵第五十六聯隊第一大隊(長少佐高園尙武)は第三中隊及第十一中隊を各、其中隊の抵抗線に就かしめ此敵を側射せしめたり。

此戰團に於て我損害は戦死六、負傷下士官一、兵十一にして、敵の遺棄せる屍體は將校一、下士兵三十八、俘虜下士以下十六にして、總損害百を下らず。

三、夜襲に任じたる敵軍の行動

獨逸の海軍東亞派遣隊長クロー中佐は、十月二日午後四時三十分陸正面司令官ケッセンゲル中佐より午後九時東吳家村、海泊河大橋梁北方十字路の線を出發し四房山より敵を驅逐すべき命令

(同時陸正面司令官は海軍野戰砲中隊に午後八時乃至九時四房山に向ひ猛射を加へて午後九時共射撃を四房山―水清溝道より以西の地區に移すべきこと但し四房山及其南方地區を射撃すべからず及陸正面砲兵に午後九時以後唐家口―保兒道より僧院―ワルデルゼー高地道に至る地區を猛射すべきことを命令せり)を受け第一中隊を以て東吳家村より、第二中隊を以てボンブ所東方八百米標高一九・五地點附近より四房山に對して前進し、同地に在る敵を撃退したる後黃家榮閭家山方面に前進すべく、又第三中隊は四房山の南方標高三七高地を占領し必要に應じて收容陣地を占領する如く部署し、クロー中佐は第三中隊に在り第一中隊長大尉伯爵フォンヘルツベルグは午後八時四十五分頃東吳家村に達し谷地より四房山に至る點線路の中央とし二小隊を散開し一小隊を援隊とし中央後に、機關銃を右翼後に位置せしめ、右側掩護の爲下士斥候を東吳家村―唐家口道に出し、午後九時前述點線路に沿ひ左旋回を爲しつつ前進せしも、地形錯雜せるが爲第一線兩小隊間に間隔を生じ、四房山を距る約二百米に接近せしとき日本軍の射撃を受けたり。中隊は之に應射しつつ四房山頂を目標として前進せしが、森林を通過中部隊混淆し辛うじて分隊毎に行動するを得たり。然れども前面及側面より日本軍の猛烈なる小銃火及機關銃火を蒙り、遂に退却して第三中隊の收容する所となれり。

第二中隊長大尉シャクブルグは、午後九時四房山標高五八地點に向ひ前進し大なる敵の射撃を被ることなく同高地を通過し、小村庄東端に到達し、同地に於て數回喊聲を發し四方道を前進中なる機關銃隊を招致し、一小隊と共に小村庄東端を守備せしむ。日本兵は約三十分の後前進し來り能く掩蔽して我を猛射せるも、突撃を行ふに至らず、當時四房山上林縁に日本軍一中隊ありと判斷す。次でクロー中佐より命令を受け夜半海泊河に退却せり。第一中隊は中隊長以下二十五を失ひ第二中隊は死傷四あり。

四、所 見

一、戰術上の要地たる四房山を占領することは、敵情偵察上より或は又爾後攻撃陣地推進準備上より見て蓋し適當と謂はざるべからず。唯此地を占領するに於ては之が守備に任ずる部隊は孤立無援の境に在るを以て、防備施設及警戒心に於て緊張することに一段の注意を要す。而して本戰團の經過に鑑みるに、第十中隊の小隊は克く此要旨に合し完全に任務を盡したるものと謂はざるべからず。

二、此の間小隊と後方部隊との通信設備の如何なりしや記事明瞭ならざるを以て知るに由なし。通信設備は此際特に緊要なるを以て全幅の努力を拂はざるべからず。

- 三、獨逸軍の夜襲決行前の諸準備は餘りにも其徴候を暴露すること不用意にして、事前に日本軍をして夜襲等何等かの行はるるを察知せしめたり。夜間の砲撃の如きは夜襲實施を豫告せしに過ぎず。企圖の秘匿には特に考慮を要すべきなり。
- 四、歩兵第四十八聯隊長が敵砲撃轉移の一事に依り克く敵の夜襲を豫察したるは、敬服する所なり。微細なる徴候も狀況判断の資料たることを吾人に教ゆるものなり。
- 五、各小隊長以下下士斥候に至る迄腹背に敵を受けながら勇敢沈著奮闘せし行動は、正に賞讃に値す。又第二小隊長が第一線に銃聲を聞き直ちに獨斷逆行赴援し、協力戦闘したるは機宜に適應する行動と謂ふべし。
- 六、夜間月明時の射撃は相當効果あるべきを證するものなり。
- 七、獨軍が夜襲實施の前日所要に満たざる兵力を以て前後二回迄強襲を試み、爲に夜襲の企圖を暴露したるは、第三項に述べたる如く適當ならず。敵情の偵察を目的とせしならば宜しく斥候を使用するに如かず、斥候の偵察にて目的を達せずとせば威力偵察を各種の方面に施行するを可とす。一點に對してのみ偵察を實施するが如きは徒らに其方面の警戒心を喚起するに止まるのみ。

(254)

- 八、獨軍夜襲の部署は巧妙に過ぐ。
- 九、夜襲部隊が射撃を受けたる故を以て一回の突撃をも實施せず後退せしは適當ならず。夜襲の目的が單に偵察なりとせば格別、然らざるに於ては斷然突入後勝敗を一舉に決せざるべからず。
- 十、クロー中佐が豫備隊たる第三中隊を後方に殘置し收容にのみ使用せるは、其真意を知るに苦しむ。夜間の收容の如きは月明時に於ても最初より企圖すべきにあらず。

以上は小城町附近及其北方及南北に至る敵陣地を本二十一日夜夜襲を以て奪取する爲參考として研究したるものなり。即ち夜襲決行の必要、峻峻なる地形平坦波狀地に於ける夜襲上の注意並露支獨各軍に對し行はれたる夜戦の攻防等何れも貧弱ながら一の參考として戦例を擧げたり。本攻撃に於て攻撃準備の位置は敵の警戒陣地を奪取したる位置に定めらるること自然なるべし。

牽制行動に就て

敵をして師團の攻撃企圖を最初より斷定的に判断せしむるに於ては、之に對する準備を益、十

(255)

分ならしむるの不利あるを以て、二十二日には爲し得る限りの兵力を牛津方面に移動して敵をして其判断に迷はしめ、南方地區に成るべく多くの兵力を牽制するを有利とすべし。

軍隊區分に就て

一、飛行隊

作戰要務令第二部第三十四に「師團長は配屬せられたる直協飛行隊を搜索、指揮連絡及砲兵任務の爲使用し狀況に依り歩兵其の他の部隊に協同せしむるものとす」とあり、故に兵力大ならざる飛行隊は、此際其運用に關し勉めて濫用を戒め、重點に使用するを要す。故に先づ我の最も懸念する唐津、佐世保及長崎方面よりする敵の來援の有無並敵陣地の状態を偵察するの外狀況の進展に應じ若干を砲兵隊に協力せしむるを要す。

尙同第二百二十一に「飛行部隊地上の戦闘に直接協同するに方り其の取るべき行動は狀況に依り異なりと雖も通常敵の戦車、有力なる砲兵、敵陣地の要點等を攻撃し第一線部隊の戦闘を容易ならしめ或は重要なる第二線部隊、機甲部隊、交通の要點等を攻撃して地上部隊の戦果擴張を容易ならしむるものとす」とあり。故に本狀況に於て師團配屬の獨立中隊としては到底満足すべき第二百二十一の如き運用は許さざるべく、軍主力方面より戦爆兩隊の協力を得て始めて達し

得べき希望なるべし。

二、戦車隊

作戰要務令第二部の陣地攻撃に於て戦車に關し記載しある事項を摘録すれば左の如し

其の一 攻撃準備及實施

攻撃計畫に關し令第一百十二に據れば

戦車の爲には之を歩兵に配屬するときは配屬すべき兵力、時機要すれば配屬期間、其の行動する地域及時機の統制に關する事項等又之を師團長直轄するときは待機及出發位置、出發時機、行動地域、攻撃目標、歩兵に對する協同法、任務達成後の行動等の事項を命令の内容に示すべしなり。

又同第一百十四には

「戦車は歩兵の爲最も緊要とする時機及地點若くは敵の最も苦痛とする時機及地點に對し爲し得る限り多數集結し勉めて同時に之を使用すべきものとす云々」又其末項に「戦車は通常之に課すべき任務、地形に依り其の行動する區域を定む而して歩兵に直接協同せしむる場合に於ては多くは其の正面に使用し該正面に於ける歩兵の指揮官に配屬するを通常とし爾餘の場合に於て

は師團長直轄使用するを通常とす」とあり。

本状況に於ては敵陣地の關係上初期に於ては小城町西南側地區に使用するを至當とすべく、峰山―牛尾の陣地を攻略する間は、歩兵の指揮官に配屬するを有利とす。

又多久川左岸の陣地攻略に際しては、戦況の進展により右翼別府方面に使用するを有利とすべし。何れにしても地形は戦車の活動に甚だ不都合なり。故に其威力を十分に發揮すること難く敵の最前線陣地への突撃には砲兵の協力を依然重要視せざるべからず。

令第二百十八に「戦車は所要に應じ待機位置に進入すると共に協同すべき歩、砲兵の指揮官と協定を遂げ自己の行動を計畫し更に敵情、地形の搜索を周密ならしめ爾後の攻撃を準備し適時出發位置に就き攻撃準備を完了するものとす此の際戦車は極力其の行動を秘匿せんが爲め夜暗を利用するを可とす行動の秘匿の爲砲兵、飛行機等の協力を受くるを得ば有利」なることを示せり。

故に二十二日夜戦場に到着する戦車隊の進路は同日師團の欺騙行動を以て敵を牽制する見地よりして其行進路は神崎―佐賀市―牛津道を西進するを可とす。尙二十三日より戦車の活動を要求する爲には戦車隊に對する事前の準備は十分整備し置くを要す。

協同すべき指揮官との協定に關しては令第二百二十二及第二百二十三に詳細なる事項に互り示されあり。其の要領を白紙的に圖示すれば概要別紙の如きものとなるべし。

作戦要務令第二部第二百二十三にある歩戦砲及飛行部隊の協同戦闘は、戦例其三江橋鎮の陣地攻撃に於て實施せられたり。而して本協同は高級指揮官の統一せる計畫に基き特に準備を周到にし此等部隊の行動を適當に時間及地域に依りて規定すると共に確實なる連絡法を講ずること緊要なり。然らざれば相互の協調を缺き蹉躓を生じ友軍相撃の不幸を招來することあり。

過般歐洲佛蘭西國境線に於て行はれたる所謂獨逸の電撃作戦は蓋し此種の協同戦闘極めて緊密周到に實施せられたるものなるべし。

夜暗を利用して攻撃準備の位置に就く際又は其位置を設くるに方り戦車の出發位置は、令第二百二十五の第三項に示されある如く成るべく第一線に近く其出發位置を設け必要なる部隊と連絡を保ち爾後の攻撃準備を整ふる如くすべきは、第一乃至第三の戦例に就ても之を知ることを得べし。

拂曉より攻撃を實行するに方り戦車は令第二百二十六第四項によれば「通常第一線歩兵敵陣地突入後の戦闘に於て其の威力を發揮する如く之を使用するを有利とす状況特に障礙物の状態等に

依り戦車の一部若くは全部をして最初より歩兵の突撃に協同せしむるを有利とす」ることを示しあり。戦例に就て觀察するに戦車の最も苦痛とする所は戦車壕又はクリーク等なるが如し。

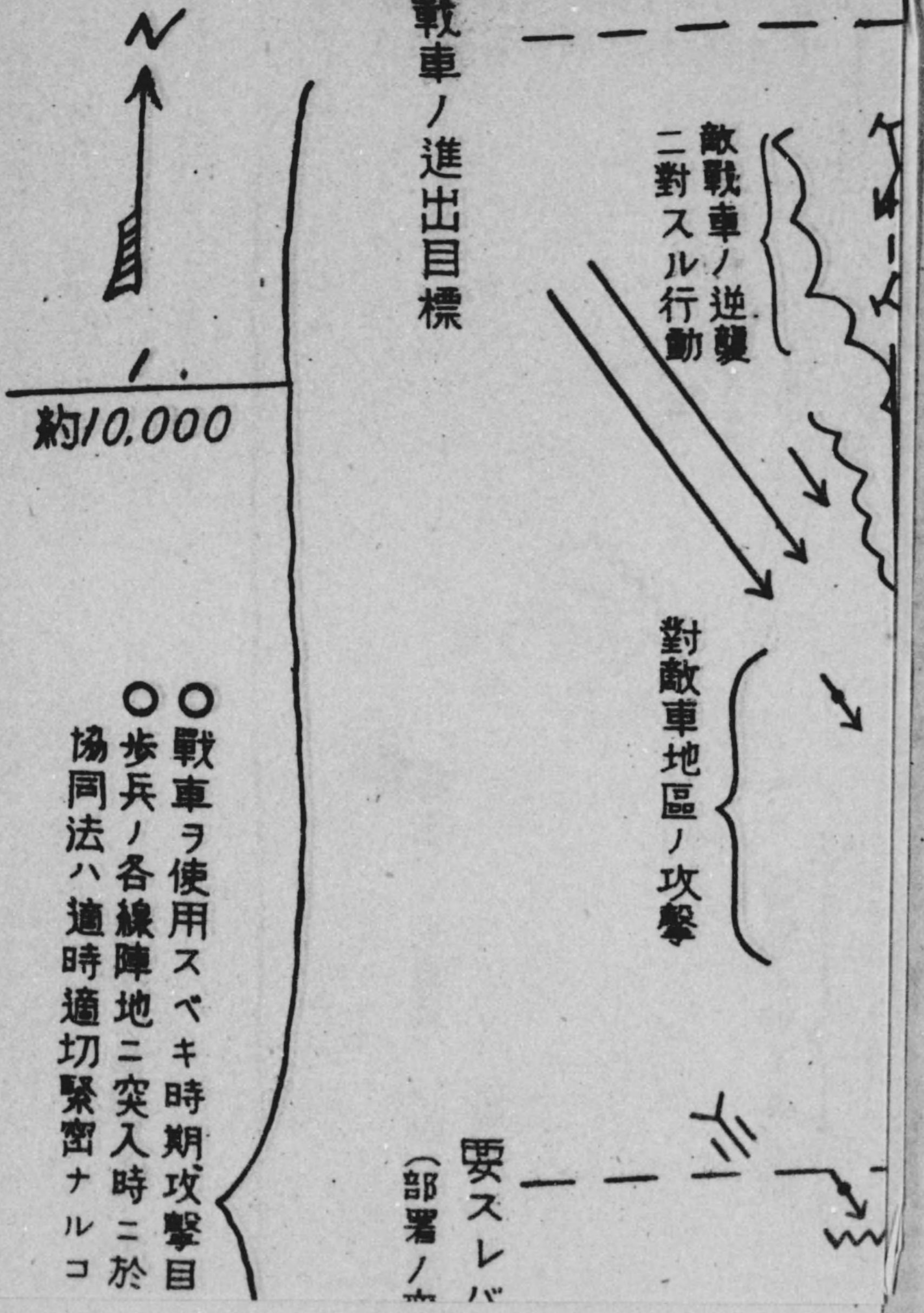
即ち戦車の行動は地形、土質等に依り制限を受けること大なり。令第三百三十六に障碍物破壊の爲戦車を以てするは地形及戦車の兵力之を許せば實施最も容易なりと示され、又同第三百十九第五項に於て最初の突撃に戦車を直接参加せしむる正面に於ては戦車は通常敵の最前線附近の障碍物、重火器、側防機能等を破壊蹂躪し云々とあり。本圖例及戦例に就て十分本原則は現出せられありと思考す。

尙夜戦に於て鐵條網、重火器特に側防機能を迅速に破壊若くは制壓するを必要とし、且他に適當の手段なき場合に於て企圖秘匿上支障なければ戦車を使用することあり。此場合に於ては小部隊毎に歩兵に分屬し其任務を勉めて單一ならしむるものなることを令第五百五十一の第三項に明示せられあり。

其二 各級指揮官の戦車の用法に就て

(1) 高級指揮官の用法
通常主要なる師團に適時配屬す。

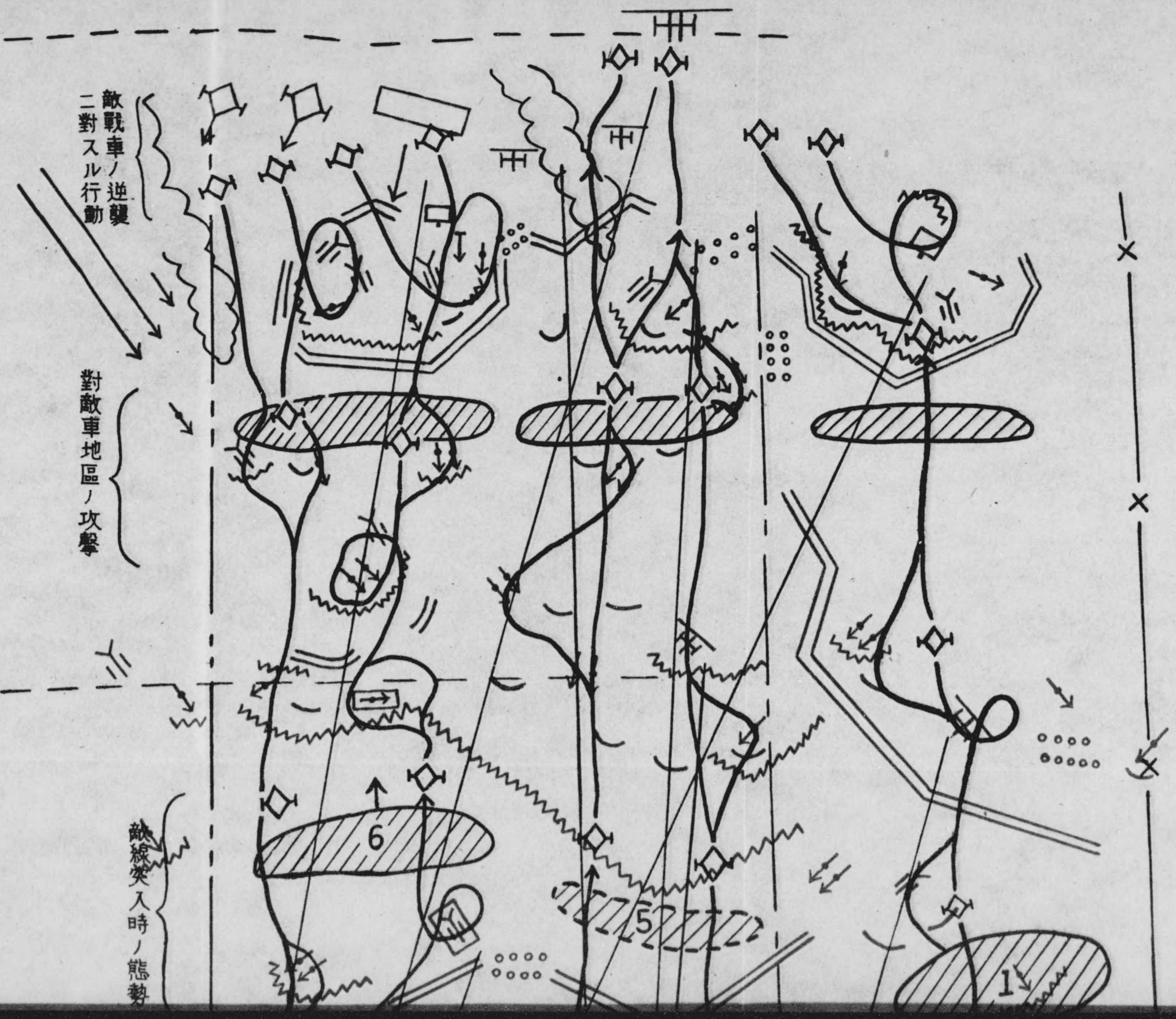
◎戦車ノ進出目標



○戦車ヲ使用スベキ時期、攻撃目
○歩兵ノ各線陣地ニ突入時ニ於
協同法ハ適時適切緊密ナルコ

戰車四中队ヲ步兵一聯隊正面ニ配屬シタル場合
 作戰要務令第二部第百二十二ノ條項ヲ圖示シタル概要圖

◎戰車ノ進出目標



要スレバ中間目標
 (部署ノ変更又ハ地形ノ關係ヨリ)

敵戰車ノ逆襲
 ニ對スル行動

對敵車地區ノ攻撃

敵線突入時ノ態勢



約10,000

◎戰車ヲ使用スベキ時期攻撃目標
 ◎步兵ノ各線陣地ニ突入時ニ於ケル步兵戰車及砲兵ノ
 協同法ハ適時適切緊密ナルコト

シタル場合
ヲ圖示シタル概要圖

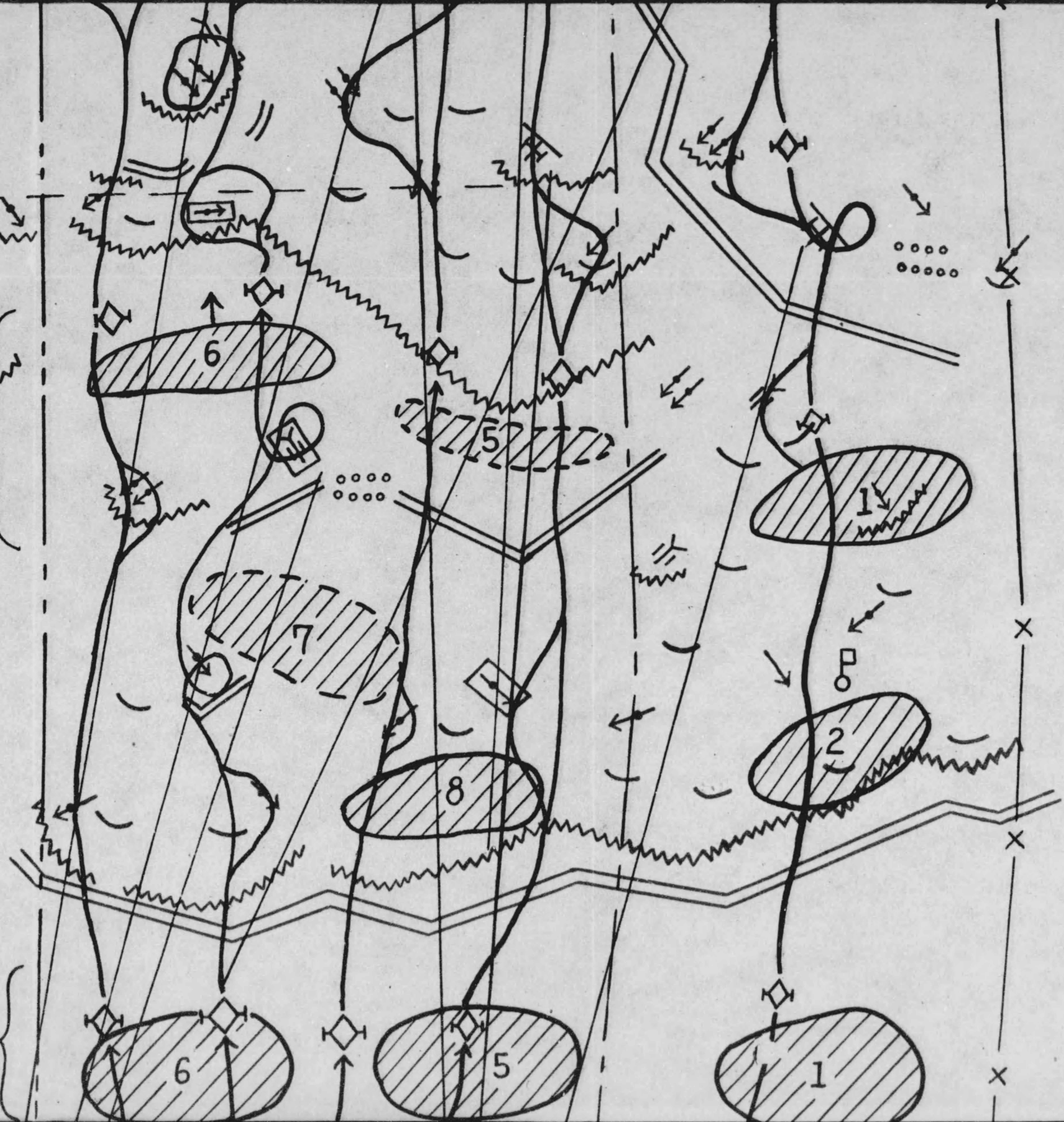
使用スベキ時期攻撃目標
各線陣地ニ突入時ニ於ケル歩兵戰車及砲兵ノ
ハ適時適切緊密ナルコト

要スレバ中間目標
(部署ノ変更又ハ地形ノ關係ヨリシテ)

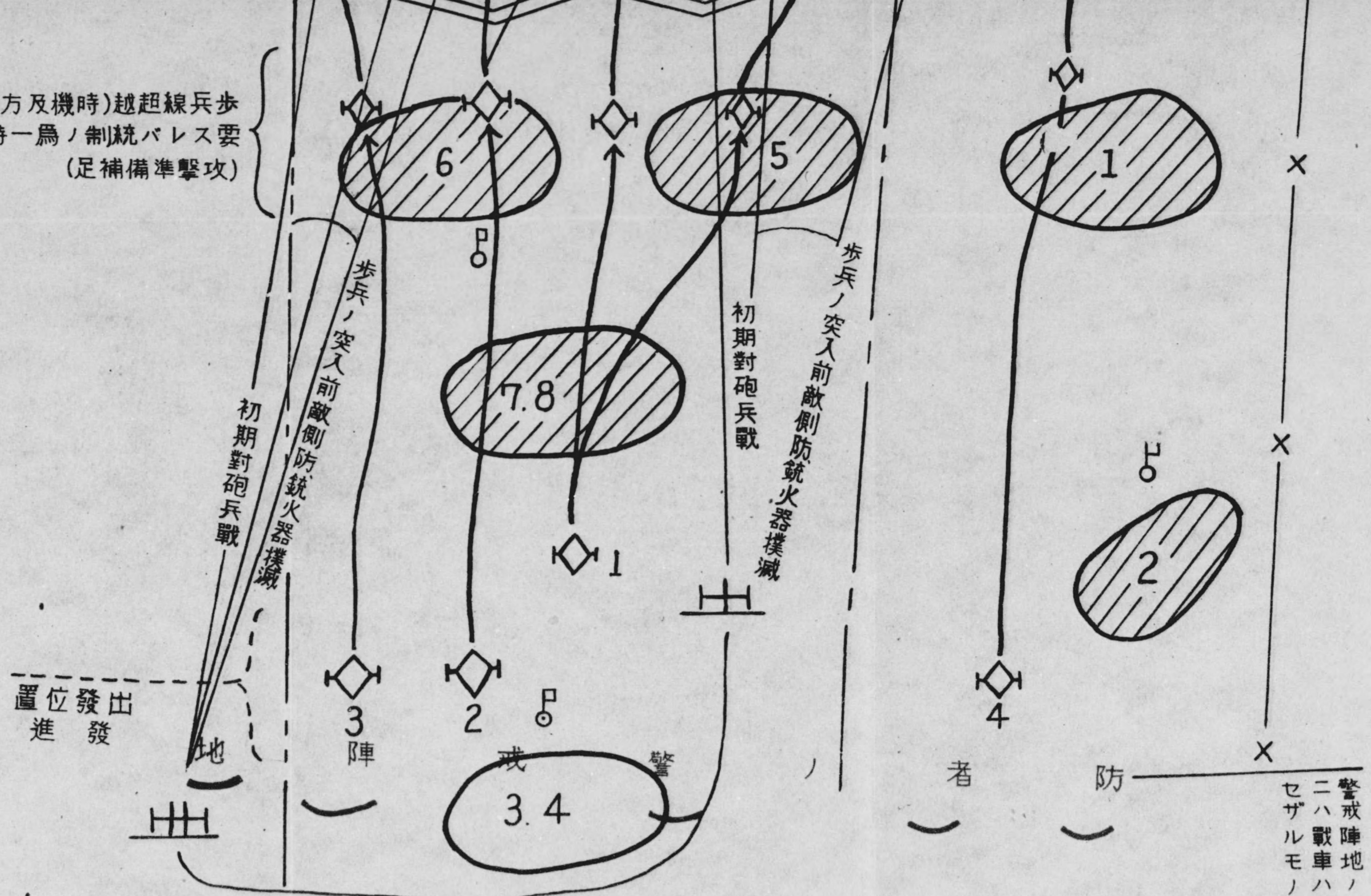
敵線突入時ノ態勢

(法方及機時)越超線兵歩
止停時一爲ノ制統バレス要
(足補備準擊攻)

攻撃



(法方及機時)越超線兵步
止停時一爲ノ制統パレス要
(足補備準撃攻)



○各時期ニ對スル
砲兵ノ支援協定
○戰車及歩兵ノ
突入状態ニ應
ジ射撃ノ關係
ヲ協定スルコト

警戒陣地ノ奪取
ニハ戰車ハ使用
セザルモノトス

戰例其一
郭家宅附近戰鬪經過要圖
(昭和十二年十月五日西住中隊ノ戰鬪)

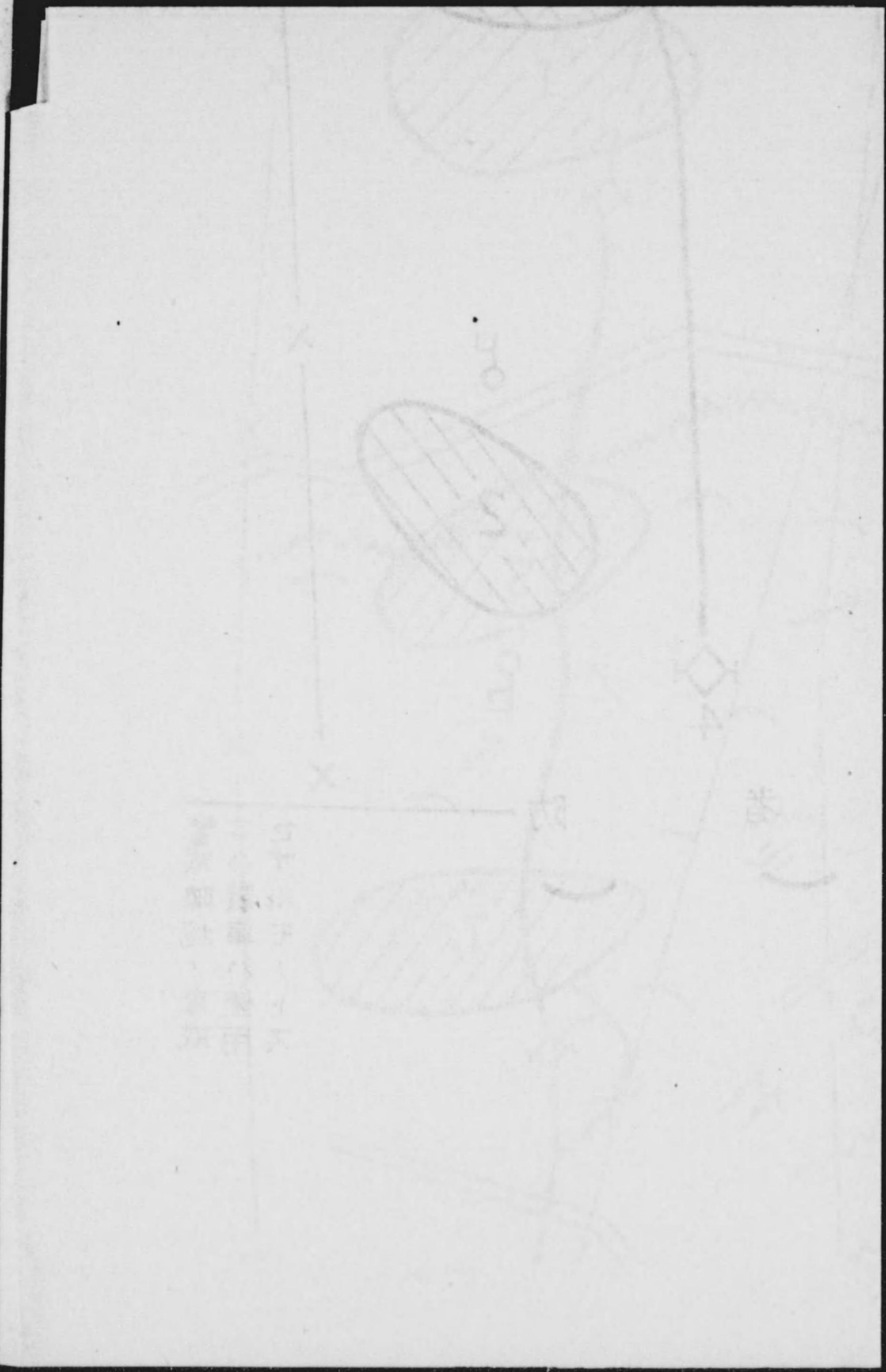
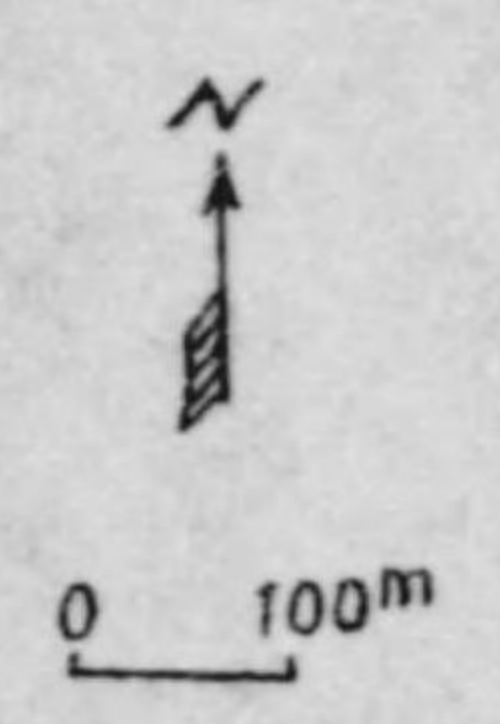
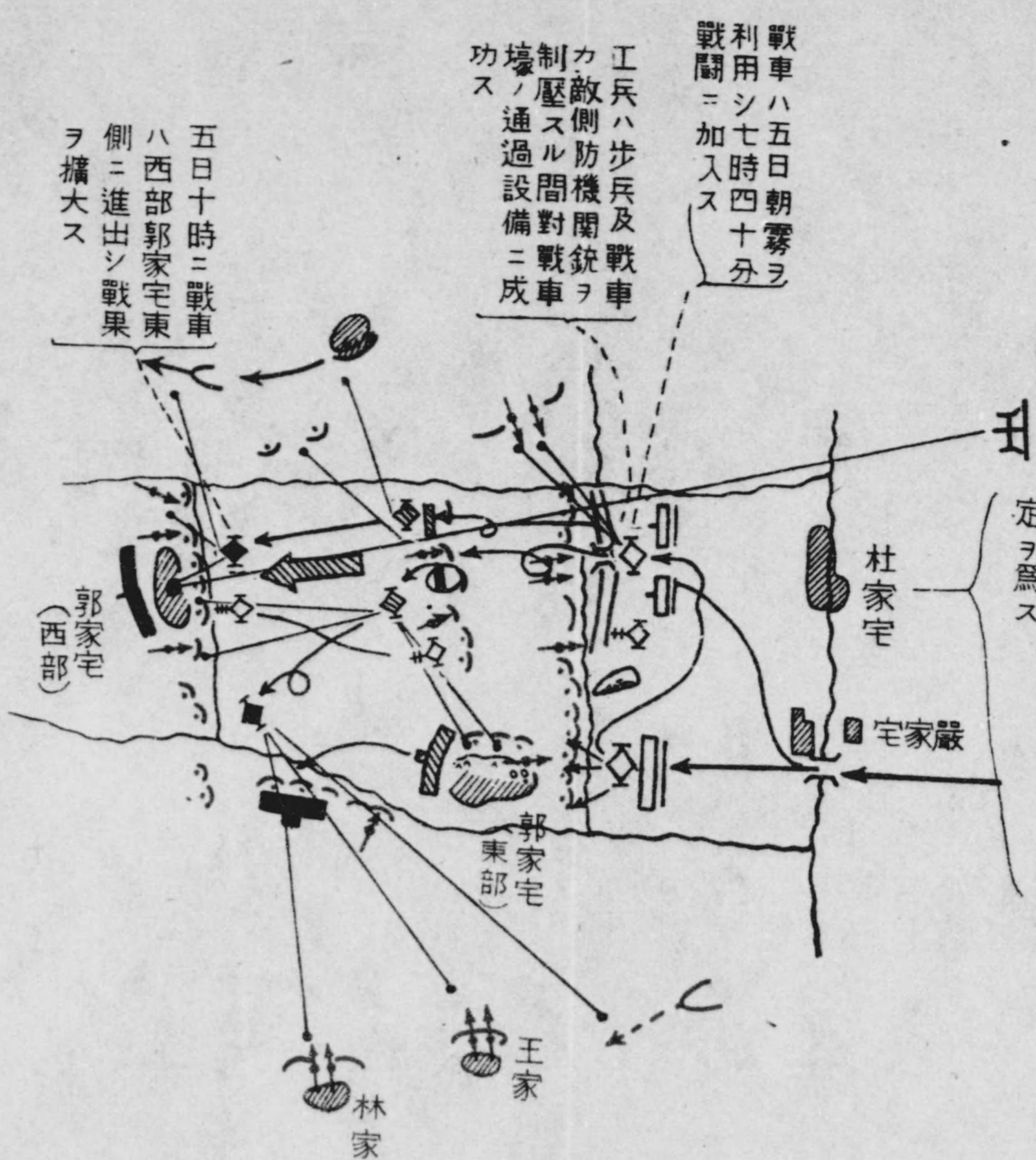
五日朝砲兵ハ西部郭家宅ニ射程ヲ延伸シ爾後適切ナル射撃ニヨリ後方及側方ヨリスル敵火ヲ遮断シ或ハ歩兵ヲ制壓シ歩戰ノ戰鬪ヲ有利ナラシメタリ

戰車ハ五日朝霧ヲ利用シ七時四十分戰鬪ニ加入ス

工兵ハ歩兵及戰車カ敵側防機関銃ヲ制壓スル間對戰車壕ノ通過設備ニ成功ス

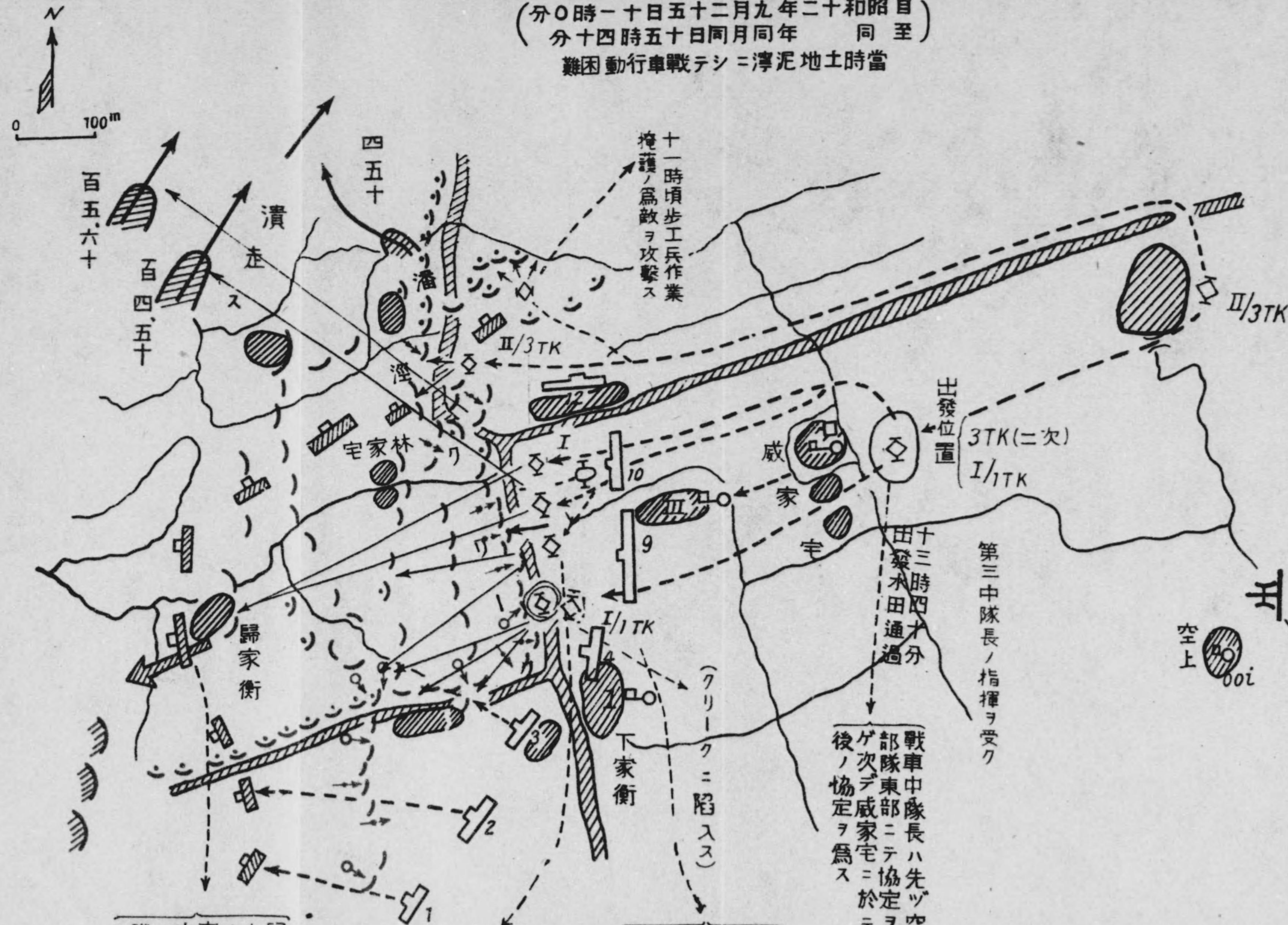
五日十時ニ戰車ハ西部郭家宅東側ニ進出シ戰果ヲ擴大ス

歩兵大中隊長砲兵連絡工兵小隊長會同周到ナル協定ヲ爲ス



圖要過經鬪戰隊中三第近附宅家林

(分0時一十日五十二月九年二十和昭自)
 (分十四時十五日同月同年 同 至)
 難困動行車戰テシニ溼泥地土時當



戰例其二
 戰車ヲ以テ一週餘敵ガ嚴守シタ
 ル堅陣ヲ僅々一時間餘ニシテ完全
 ニ突破セリ

砲兵八十三時頃ヨリ敵ヲ制壓ス

第三中隊長ノ指揮ヲ受ク

戰車中隊長ハ先ツ空上ノ
 部隊東部ニテ協定ヲ送
 ゲ次テ林家宅ニ於テ最
 後ノ協定ヲ爲ス

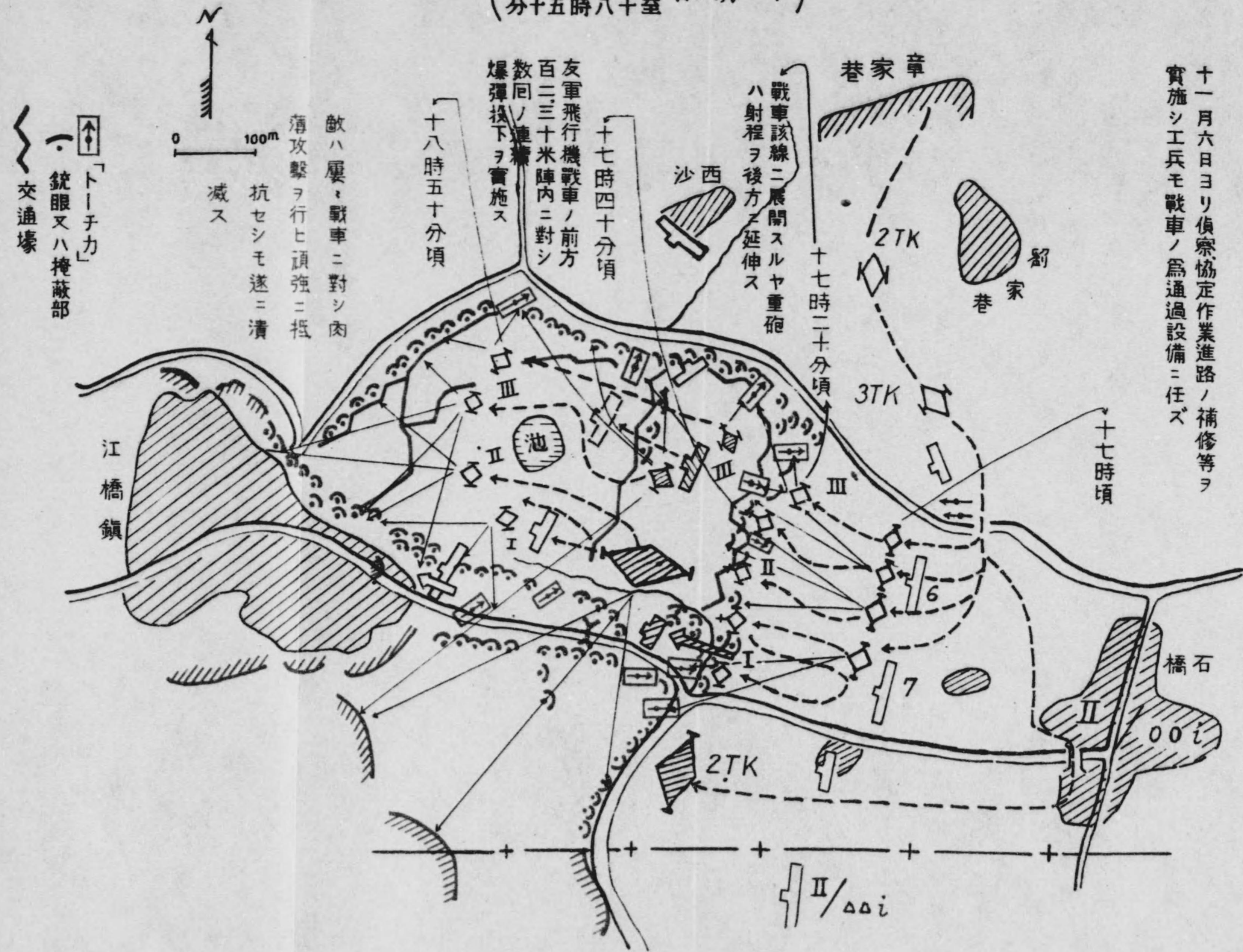
歸家五時頃
 東岸ヨリ北
 方敵ヲ對シ
 方敵ニ對シ
 爾方敵ヲ對
 鐵道ヲ破壞ス

戰車ハ敵前
 テ八時頃
 友軍歩兵
 ヲ超越シ
 四時頃東
 岸ヲ通過
 四時頃東
 岸ヲ通過
 三時頃東
 岸ヲ通過

工兵架橋成功
 步兵ハ渡リ
 敵陣ヲ突破
 入陣ノ後ハ
 此間敵ヲ制
 壓ス

江橋鎮附近三隊中戰鬪經過要圖

(十一月八日 自十七時十分至十八時十五分)



戰例其三

友軍砲兵及飛行機ト協同シ敵堅陣ヲ一時間半ニシテ突破ス

十一月六日ヨリ偵察協定作業進路ノ補修等ヲ實施シ工兵モ戰車ノ爲通過設備ニ任ズ

を本則とするを以て、僅かに一大隊の戦車を各級指揮官が各、豫備として其一部を控置するが如きは適當と謂ひ難し。然れども左の如き場合に於ては状況に應じ師團長若しくは翼隊長に於て戦車豫備を設くることあり。

(イ) 狭小なる正面を突破して廣く戦果を擴張せんとする場合

(ロ) 地形又は敵情に依り陣内若しくは陣後戦の顧慮特に大なる場合

(2) 第一線歩兵指揮官(翼隊長)の用法

戦車の配屬を受けたる翼隊長も亦師團長の場合と同様に重點方面に集結使用すべきものにして、陣地攻撃に在りては戦車は緊密に歩兵の戦闘に協同して敵陣地を突撃するを本則とするを以て、第一線歩兵聯隊に配屬せらるるものとす。然れども茲に顧慮すべきは集結使用と使用正面との關係なり。

集結使用を原則なりとするも、極端に狭小なる正面に集結使用するは一考を要す。即ち突破正面狭小となり突破の實を發揮し得ざるに至る。尙敵の對戦車砲の集中火を受け易き不利あり。故に主攻撃正面の翼隊は自己の全正面を突破し得る如く配置を適當ならしむるを要す。戦車一中隊は三小隊を第一線とするときは概ね主攻撃正面に在る歩兵大隊と同一の攻撃正面

を擔任し得るものなるを考慮し、配屬兵力を決定す。

即ち翼隊長は、戦車の配屬を受くるや自己の企圖、戦車の兵力、豫期する敵の抵抗並地形を顧慮し戦車の配屬を決定す。

師團長及翼隊長は、戦車を下級單位に分屬せる場合に於ても戦車と歩兵、砲兵及飛行機の協同に關しては自ら十分の處置を講ずるの責任を有するものとす。

師團長若しくは翼隊長は、戦車の戦闘加入に關し統制するを必要とす。歩兵大隊長に於て各自勝手に戦車を戦闘に加入せしむるときは、第一線歩兵大隊の戦闘進捗一様ならざるに従ひ戦車の戦闘加入も著しく遅速を生じ、結局戦車の時間的逐次使用となり各個撃破を受くるに至るべく、又友軍砲兵の射撃を妨ぐるに至るべきを以てなり。

(3) 聯隊長の用法

戦車を配屬せられたる聯隊長は、之を第一線歩兵大隊に分屬するを有利とすること多し。此際戦車中隊を分割して配屬するは成るべく之を避くるを要す。

陣地攻撃に於ては先づ敵第一線の突破に全力を盡すを必要とすること多く、之が突破單位たる歩兵大隊の戦力を飽く迄充實し、大隊長の意圖の如く其有する兵力を完全に統合發揮せし

むること必要なると、陣地設備特に對戰車組織完備せられ戰車の陣内機動比較的制限を受け易きとを以て、歩兵大隊に戰車を分屬するを有利とすること多きものとす。

然れども、陣地設備の程度不完全にして戰車の陣内機動を許し而も状況の變化測り難く之に即應せんとし或は戰團の進捗に伴ひ歩兵の攻撃部署變更を豫定せらるる場合或は某方面に對し特に戰車の集結威力を必要とする場合其他地形上戰車の行動容易なる地域が兩大隊の正面に跨る場合等、歩兵聯隊長若くは翼隊長に於て直轄使用するを有利とすることあるべし。

配屬せられたる戰車には、歩兵の企圖に應じ豫めの確なる任務を課し、以て歩兵をして機を失せず獲得せる成果を利用せしむるに遺憾なからしむるを要す。此際戰車使用の重點を明らかにし之が濫用を戒むると共に、特に直協砲兵等の火力運用に密接に連繫せしめ、此等の威力を適切に協調發揮せしむること肝要なり。

状況に依り某時機に於ける戰車の行動地域及砲兵の射撃地域を區分するを有利とすることあり、敵陣内の攻撃に於て特に然り。

分屬の場合に於ても、状況之を許すに至れば機を失せず戰車指揮官の統一指揮に復歸せしむるを要す。時として戰車を控置することあり。

戰團經過の某時機例へば第一線を突破し陣内殊に陣後の戰團に移れば戰車は其の大隊長の指揮に復し歩兵聯隊長以上の上級指揮官に於て直轄使用するを可とす。即ち戰車を歩兵大隊に分屬するを有利とする理由は前述の如く第一線歩兵大隊現に敵第一線陣地の突破を完成せば戰車分屬の理由の大部分は消滅す。然るに縦深に配備せる隣邦某國軍は此時機即ち攻撃軍の歩砲分離し隊勢未だ整はざるに乘じ戰車を伴ふ大逆襲を敢行し或は更に後方陣地に據り柔軟なる抵抗を試みるは彼等の常套手段にして、敵の逆襲を挫折せしめ或は退却する敵に急追して後方陣地に據るの暇なからしめ、若くは追撃する歩兵の前進を妨害する敵後方部隊特に砲兵等を急襲して歩兵の前進を容易ならしむるは實に快速を有する戰車に於て始めて實行し得るものにして、此際尙歩兵大隊に分屬するよりも寧ろ之を統一し全般の状況に通曉せる指揮官に於て直轄使用するを有利とす。

又第一線の歩兵某線に到達せば地形或は戦況に基き戰車を他に轉用するを有利とすること少なからず、斯くの如き場合に於ても此時機に於て戰車は其の大隊長の指揮に復せしむるを有利とす。

戰車使用の時機如何。

陣地攻撃に於ては通常敵の第一陣地突破に使用するも、状況特に敵陣地の状態に依り例へば敵第一線陣地は戦車の使用に適せず寧ろ陣地内部の靱強なる抵抗を感ずるとき或は戦果の擴張に使用せんとする如き場合等に於ては、其全部又は一部を控置することあり。

次に歩兵聯隊長の戦車配属の要領を研究せんとす。

聯隊長は戦車を大隊に配属するに方り其時機及地點を明確に指示し、要すれば進路、出發位置及進入並戦闘加入の時機等を統一するものとす。

聯隊長戦車を各大隊に配属するには、配属の時機と地點とを明示し誤解ならしむるは勿論、聯隊の攻撃計畫の確定するや勉めて速に配属の處置を講じ、戦車をして諸準備を完了せしむる爲時間の餘裕を與ふること緊要なり。之が爲完全命令の下達に先だち勉めて要旨命令を以てする等其意圖を速達するの著意特に緊要なり。

戦車を大隊に配属し之が使用を聯隊に於て統制するの必要ある場合に於ては、各大隊に配属せる戦車の出發位置及進入の時機並に戦闘加入の時機をも規正するを有利とすることあり。砲兵の計畫的射撃に順應し歩兵の攻撃を律せんとするが如き場合に於ては、叙上の如き必要を生ずるに至るべし。又出發位置を指示するには強ひて各戦車隊の明確なる出發位置を示す

ことなく、出發位置を設置すべき概略の線を指定するも亦一法にして、進入並戦闘加入の時機も其概要を以て満足せざるべからず。

(4) 大隊長の用法

大隊長の戦車に與ふる任務は、状況に依り異なるも、先づ重要方面に於ける第一線歩兵の突撃を支援せしめ次で陣内及陣後の攻撃に協力せしむるものとす。之れが爲敵情特に地形に鑑み戦車を使用すべき正面を決定し之を關係第一線中隊に指示するものとす。

而して第一線歩兵の突撃を支援する爲には、之に最も危害を與ふる敵就中機關銃、側防機能等を撲滅若くは制壓し或は障碍物に通路を開設し歩兵の攻撃を容易ならしむるものとす。

陣内の攻撃に於ては、歩兵、戦車、砲兵の威力を大隊長の企圖する如く發揮せしむる爲、連續せる任務を與ふることなく、所要の時機に之と連絡を恢復し新なる企圖の下に適切に第一線歩兵に協力せしむるを可とすること多きものとす。

戦車を配属せられたる大隊長は、企圖、戦車の攻撃目標、協力部隊、出發位置及其進入の時機、戦闘加入の時機、爾後の集結地等を示すを通常とす。

戦車の出發位置は、爾後の使用を主とし、地形、明暗の度等を顧慮し状況之を許す限り成る

べく敵に近く選定するを要す。而して其進入の時機は、我が企圖を秘匿する爲準備の餘裕を
あらしむるを度とし成るべく遅きを可とす。

大隊長の戦車使用上の掩護如何。

大隊長は直協砲兵に對し其一部を以て敵對戦車火器を制壓するの準備を要求すると共に、其
有する重火器の一部に對し戦車掩護の任務を課し、適時敵對戦車火器を制壓せしめ、以て戦
車をして長く其戦闘力を保持せしむるに勉めざるべからず。

戦車敵或は地形の障礙に依り其行動を妨害せられたる場合に於ては、歩兵は状況の許す限り
之を援助すべしと雖、之が爲苟も攻撃を遅緩するが如きことあるべからず。

戦車を出發位置より前進せしむるの時機は、歩兵の突撃に關する企圖、砲兵の支援射撃實施
要領、出發位置の遠近等により差異あるも、歩兵をして砲兵の突撃支援射撃の効果を十分利
用せしめ、且戦車を敵陣地前に於て停止せしむることなく、歩兵の突撃に緊密に連繫せしむ
ること必要なり。之が爲に歩戦間に豫め十分なる協定をなし連絡手段を講じ置くを要す。

(5) 戦車を配屬せられたる歩兵各級指揮官の戦車を戦闘に加入せしむる方法
歩兵指揮官其屬する戦車の用法、使用すべき地域及時機を決定せば、左記事項に關し所要の

件を命令するを要す。

(1) 現在の状況(戦車の行動に關係ある敵情、地形は特に詳細に)
(2) 自己の企圖及之に伴ふ砲兵射撃の要領
(3) 戦車の任務就中攻撃目標若くは協力部隊(任務は成るべく遠き將來の事にも及ぼし小刻
みならず某程度戦車の獨斷に委するを可とす而して攻撃目標の指示は通常地域を以て示す
も現實の目標を示すことあり)

(4) 攻撃準備の要領就中出發位置の概要要すれば其進入の時機(待機位置要すれば其進入時
機を示すを可とすることあり)

(5) 戦闘加入の時機

(6) 任務達成後に於ける集結地(敵對戦車火器に對し安全にして歩兵の支援を受け易く連絡
容易且段列車輜の到達容易なる地點とす)

注意 部署に應ずる障礙物の破壊に關しては命令するを要す(地點を明示す)

以上を以て戦車使用に關する研究を終る。本状況に於ては先づ右翼方面に使用し多久川左岸峰
山、牛尾の陣地を攻略せば爾後状況に應じ更に他の方面に使用することを顧慮し置くを要す。

三、騎兵隊に就て

作戰要務令第二部第二十二に、

騎兵は戦闘の終始に互り師團の爲主要なる搜索に任ずるものとす時として敵の側背を脅威し若くは敵の退路を遮断し或は我が側背を警戒し若くは掩護する等の諸任務に服することあり又敵の司令部或は砲兵を奇襲する等戦局に重大なる影響を及すべき好機を發見せば斷乎として之に乗ずるを要すとあり。本狀況に鑑みるに、兵力、部署竝に地形の關係上我左翼方面に使用し掩護に任せしむるを可とす。

四、右翼山地の攻撃竝に迂回に就て

敵陣地の状態を觀察するに、唐津に通ずる鐵道線路以北の山地には多くの陣地設備せられあらざるが如きも、今後如何なる兵力を以て遊動防禦を爲すやも測られざるのみならず、小城町方面より峰山—牛尾附近に互る陣地を攻撃すると共に、山地方面にも有力なる部隊を以て攻撃し重點方面の攻撃を容易ならしむるを要するの外更に敵の背後に遠く迂回せしむるの要あり。作戰要務令第二部を通覽するに、追撃、退却竝に山地及廣漠地の攻防に關し迂回動作に關し記述せられあり。而も包圍及側面攻撃等と相關連して用兵上の緊要なる手段たり。

然らば迂回と包圍との區別は如何にと云ふに、

通常吾人が慣用する迂回とは所謂迂回作戰の略語にして戰略的行動に屬し、包圍とは所謂包圍攻撃の略語にして戰術的動作に屬す。而して迂回は其目的攻者が準備せる敵陣地を直接攻撃するの難を避け單に運動を以て敵を其陣地より撤退せしめんとするか若くは一部を以て其動作を行はしめて主力の攻撃を容易ならしむるかにあり。之が爲め防者の背後連絡線を脅威す。包圍は直接敵を其正面及側背より合撃し優勢なる火力を以て敵を壓倒するにあり。即ち兩者は全然別個なり。即ち所謂迂回は前述の如く作戰の一法として名詞的定義を有するものとす。然るに包圍を行はんとするが爲にする繞回運動が其形狀に於て迂回と相似たるものあるの故を以て、往々にして之を混同するの嫌ひあれども、此動詞的迂回行動は全く迂回と區別すべきものなりとす。然らば迂回隊と別働隊とは如何なる點に於て差異あるか、

第一 目的に就て

敵の背後に動作する別働隊は、戰術書に示す如く其目的は敵軍の交通連絡を遮断し、其軍資を損害若くは奪取し或は敵情を蒐集するにありて、直接我軍に對抗する敵軍をして旗を捲いて退却するの已むを得ざるに至らしむる如く著大の威力を加へんとするものにあらず。之に

反して迂回隊は、前述の如く敵の退却後方連絡線に迫り敵をして其背後の危険なるに由り已むを得ず其陣地を放棄して後方に退引せしめ、以て新戰場を求めて茲に敵と雌雄を決せんとするを目的とす。

第二 兵力に就て

別働隊の兵力は大兵團よりも却つて小部隊を使用するを便とす。而して其編組の如きも地形に依りて歩兵或は騎兵又は落下傘部隊を用ひ或は此等を併用す。砲兵、戦車等は強大なる別働隊に非らざれば之を附屬することなし。縦ひ之を附屬するときに於ても勿論少數に限るものとす。之に反し迂回隊は状況に依り諸兵連合の強大なる兵團を使用することあり、而も、是れ特別の場合に限らざるなり。茲に一例を擧ぐれば永沼挺進騎兵隊の如きは一種の別働隊にして、奉天戦に於ける第三軍は即ち是れ一の迂回隊なり。

第三 能力に就て

別働隊は其兵力寡少なるを原則とす。従つて稍、有力なる敵の現出するに際會せば、即ち直ちに之を避けて更に他方面に向つて活動せざるべからず。又其携帯品も僅かに必要なる彈藥及糧秣に過ぎざるを以て、長く一地に位置して其行動を繼續するを得ざるなり。迂回隊は之

に比すれば大なる能力を有し、即ち通常兵力に於て然るのみならず軍需諸品の補給を受くるに便利なるを以て、其目的を達する迄は所要の地點附近に位置し得る如く計畫して派遣せらるるものとす。

第四 動作に就て

別働隊は眞面目に其威力を發揮すべきものにあらず、却つて輕捷なる運動を以て隱顯出設敵をして端倪するを得ざらしめ以て好機に乗じて敵の不意に出で之を奇襲すべし。従つて其動作を敵に秘匿するを要す。迂回隊にあつても故らに其動作を敵に暴露するの有利ならざること論を俟たずと雖も、決して別働隊の如く特に之を要求するものに非ず。何となれば其本領に於ては正々堂々として眞面目に敵と其勝敗を争はんとするものなればなり。従つて別働隊は已むを得ざる場合の外敵との衝突を避くるものなりと雖、迂回隊は寧ろ求めて之を撃攘して主作戦を容易ならしむるものとす。

以上の研究により迂回隊は遠く敵の背後を目標として行動すべきものなること竝其兵力、編組は師團兵力の關係を考慮し歩兵一大隊、山砲兵一中隊(通信機關を附す)を基幹とする部隊を以て編成するを適當とすべし。

五、攻撃準備の位置に就て

作戦要務令第二部中攻撃準備に關しては、第五百より同百二十九に互り詳細に記述せられあり。而して其攻撃が晝間行はるる場合(令第一百十敵の警戒陣地を攻略することなく攻撃を準備する場合と之を攻略したる後更に準備を整ふる場合とあり)狀況によりては令第二百二十四の敵主陣地帯の位置を偵知するに至らずして直ちに攻撃を開始するを要する場合(縦深に互る攻撃準備を整ふ)、拂曉より攻撃を實行する場合(令第二百五)の攻撃準備の位置、黎明を利用して突撃を行ふ場合(令第二百二十八)の攻撃準備の位置等之を研究すれば各、其特異の點を有すべし。

(274)

(1) 晝間の攻撃準備位置は

要するに令第一百十二に示されある師團長の攻撃計畫策定に基き命令に示すべき主要事項の實行さるべき位置たらざるべからず。

而して敵の主陣地帯の位置を偵知するに至らずして攻撃する場合は、豫め縦深に互る攻撃準備を整ふ。

(2) 拂曉の攻撃準備の位置は

特に令第二百二十五及第二百二十八に示す場合は夜暗を利用して攻撃準備の位置に就き特に敵情地形、撤毒地域の有無等を考慮し勉めて敵に近接せしむ。但し豫期せざる戦闘を惹起せしめざることを緊要なり。

之を要するに開進の配置より直に展開して攻撃に著手せしむるときは次の結果となる。

- 1、展開を速に完了せる部隊は攻撃前進を起す
- 2、側翼に展開すべき部隊は猶ほ行進中にあり

従つて敵は若し先づ現出せる我一部に向つて攻勢に轉ずるときは、我が他の部隊は尙ほ展開の爲行動中にあるを以て、有利に戦闘に加入するを得ず。是を以て各個に撃破せらるるに至るべし。是れ我が最も不利なる點なりとす。

(275)

従つて攻撃準備の位置を占領するの目的は、攻撃動作に入る前先づ總指揮官の部下掌握を確實にし以て攻撃を統一し各隊各個に敵に當り攻撃力を散漫に陥らしめざる爲なると、一方に於ては従來の偵察十分ならざるときは此の姿勢に於て一層細密に偵察を施行し攻撃を有利ならしむるにあり。従つて此の陣地に於て第一著の火戦を交ゆべきものなる如く思考するは適當ならず。但し敵が我が攻撃準備中に攻勢に轉ずることあるときは、固より之と有利なる交